# 研　究　紀　要

## 第　6　号

### 20周年特集号


| | | | |
|---|---|---|---|
| 創立20周年を迎えて | | 中島　邦夫 | 1 |
| 青森県埋蔵文化財調査センターの20年を振り返って | 青森大学教授 | 村越　　潔 | 3 |
| 20周年特集号概要 | | 成田　滋彦 | 5 |
| 旧石器時代 | | 太田原　潤 | 7 |
| 縄文時代草創期 | | 小田川哲彦 | 10 |
| 縄文時代早期 | | 坂本　真弓 | 13 |
| 縄文時代前期 | | 木村鐵次郎 | 17 |
| 縄文時代中期 | | 畠山　　昇 | 21 |
| 縄文時代後期 | | 成田　滋彦 | 25 |
| 縄文時代晩期 | | 福田　友之 | 29 |
| 弥生時代 | | 成田　誠治 | 33 |
| 奈良・平安時代 | | 中嶋　友文 | 37 |
| 中世・近世 | | 平山　明寿 | 41 |
| 埋蔵文化財調査センター20年の歩み | | 相馬　信吉 | 50 |



2000

青森県埋蔵文化財調査センター

# 創立20周年を迎えて

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 中 島 邦 夫

遺跡の発掘調査と記録保存を行う専門機関として、昭和55年（1980年）４月１日に発足した当センターは、本年で筋目となる20周年を迎えることになりました。

設立当初は、むつ小川原開発や下北地点原子力発電所建設の予定地内で、数多くの発掘調査をてがけたのをはじめ、この20年間、当センターは建設省、農林水産省、日本道路公団、青森県土木部・農林部などが行う道路建設その他の開発予定地において、ひたすら遺跡の発掘調査に取り組んできました。こうした調査の記録をまとめた報告書も、平成12年３月末現在で286冊目を数えるに至りました。

これらの多数の調査によって、表館(1)遺跡(六ヶ所村)で縄文時代草創期の隆起線文土器、櫛引遺跡(八戸市)で縄文時代草創期の住居跡や多縄文系土器、三内丸山遺跡(青森市)で縄文時代前・中期の拠点的大集落跡、大石平遺跡(六ヶ所村)で縄文時代後期の手形・足形付土製品等出土品、垂柳遺跡(田舎館村)で弥生時代の水田跡、杢沢遺跡(鰺ヶ沢町)で平安時代の製鉄遺構群、高屋敷館遺跡(浪岡町)で平安時代の環壕集落跡など、我が国や青森県の古代史を明らかにする重要な発見に巡り会うことができました。また、このほか調査したすべての遺跡において、地域の歴史をすこしずつ明らかにする考古学上のデーターを蓄積することができたと思っております。

発掘調査に当たった職員には、それぞれ多くの困難や苦労がありました。しかし、それらを克服しながら数々の貴重な成果を挙げることができたのは、発掘や整理遺物を手伝ってくれた多数の作業員の協力と、村越潔先生をはじめ考古学・地質学等に関する大勢の研究者の指導助言や地元教育委員会の支援のお陰であります。また、開発事業を行う各機関には発掘経費の負担、工事計画と発掘調査の調整等で多大の理解を賜わりました。20年間の発掘調査の成果は、このように大勢の方々のお力添えのお陰であり、この機会に、あらためてお礼申し上げたいと思います。

さて、当センターの今後の課題は、20年間に蓄積された大量の出土品や調査報告書等をいかに効果的に活用するかということと、近年発掘調査を行う市町村が増えてきたことから、これらの市町村との連携協力をどのように充実するかということではないかと考えています。

幸いにも、(旧）情報処理教育センターが使用していた施設を平成10年度から当セ

ンターが使用できることになり、新たに「資料課」も設置されたことから、目下、さまざまな改善充実を進めているところであります。

一つには、展示室を設けて出土品1,400点を開架展示しました。これまでに出土した約２万箱分の出土品の中から、資料価値の高いものを観察しやすいようにしたものです。

二つには、図書室を設けて全国から収集した調査報告書16,000冊を都道府県別に配架しました。さらにこれらの報告書の遺跡名、発行機関名、発行年をデータベース化して素早く検索できるようにしました。

三つには、報告書の巻末に掲載されている「抄録」情報をデータベース化しました。「抄録」には遺跡の種別、時代、主な遺構や遺物がのっているので、比較研究のための類似事例を探す格好の手がかりになります。東北各県・北海道の遺跡950冊分をデータベース化しましたが、毎年新刊分を追加していくことによって、事例集成のデータベースになるものと期待しています。

四つには、県と市町村との発掘情報交流誌「ネットワーク発掘」を創刊しました。年３回の発行で、埋蔵文化財担当職員、発掘調査予定の遺跡、刊行した報告書などその年度の基礎的情報や、現地説明会などの行事情報、注目される遺構・遺物情報などを掲載し、情報の相互交流の場づくりを目指しています。

このほか、県・市町村共同で発掘調査報告会を開催したり、当センターの研究紀要に「市町村投稿」を掲載したり、木製品・金属製品保存処理施設を開放するなどして市町村との連携協力を深めていく考えです。

20周年を機に、職員一同心を新たにして、新世紀に向かって前進したいと思っておりますので、関係各位の一層の御支援をお願いします。

# 青森県埋蔵文化財調査センターの20年を振り返って

青森大学教授
村　越　　潔

県の埋蔵文化財調査センター(略して埋文センターという)が発足20年を迎えるという。人間であれば成人として祝をうける年齢に達したのであり、`お目出度う、の言葉を捧げたい。

振り返ると、20有余年前に埋文センター構想が提起され、財団法人か県立の機関とするかで県の首脳も悩み、当時文化課に居られた栗村知弘・古市豊司君と一緒に設置母体は、そのどちらかがよろしいのか、他県の同じ機関を訪ねながら真剣に勉強したことがあった。当時は全国各地が開発ムードに溢れ、発掘調査が目白押しの状態であり、その作業量も膨大となって本県では文化課が行っていた発掘事業も追いつけぬ状態となり、埋文センターの設置は急務となっていたのであった。

なかでも「むつ小川原開発構想」による開発予定地内には数多くの遺跡が存在し、その調査をどのように進めたらよいのか、思い出しても気が遠くなる心境でもあった。

埋蔵文化財（考古学資料）は、発掘調査にはヒトが、調査終了後はその整理と保存のためにヒトと施設が不可欠である。文化課が行っていた初期のころは青森市の合浦公園に近接した自治研修所の古い建物を利用して事業を進めていたが、何しろ古い木造建築であるために遺物の大量な貯蔵には耐えられぬ状況と、火災の心配も関係者の脳裏から離れず、その心配を乗り越える施設の必要性は自明の理であった。

幸い、青森市新城字天田内の地に小規模ながらも強固な施設が完成し、さらにその後の調査によって手狭になった結果、現在は広い旧情報処理教育センターの跡で作業が行われるまで発展したのである。

このように埋文センターは、県民が真実の歴史を覚知したいとする願いと、重要な歴史資料である文化財の保護を進めて欲しいという期待を背景に、所長を先頭に職員は一丸となって職務に励み、県内各地の遺跡調査に尽力してきた。ここにその事業を振り返ると、青森県の歴史を解明する資料の提示ならびに蓄積に大きな功績を果たしている。その一、二を紹介すると、その一つは田舎館村垂柳遺跡の調査であろう。この調査は東北地方における米（稲の種子）の栽培を一挙に数百年溯らせ、わが国の農業史の上で稲作の開始時期の書き換えを提起したのであった。

米は日本人の主食であり、農業史の上でもその栽培開始時期は重要な課題でもあ

る。熱帯地を原産地とする稲がアジア大陸から九州地方に入り、その後全国に広まって、わが国の政治・経済に果たした役割は計り知れぬであろう。青森県には、この稲作技術と共に弥生前期の土器（遠賀川系土器）も伝わり、文化伝播が想像を越える早さで推移していることが証明されたのであった。

次には、青森市三内丸山遺跡の調査である。縄文時代前期中葉から中期半ばにかけて、本県を中心に北は北海道の西半分から、南は一部であっても、能登半島や富山県にまで波及した円筒土器文化のすぐれた内容を明らかにした。なかでも住居跡・掘立柱建造物・盛土・廃棄場・墓地などが計画的に配置造営され、食料となる堅果物の栽培、編物、漆器品等に見られる工芸技術は、従来考えられていた縄文文化が想像以上に高度であることを証明したのであった。

この特記した二つの業績に対し、垂柳遺跡については昭和57年に第35回東奥賞（東北初の弥生期水田跡の立証と研究）を、三内丸山遺跡の調査では平成６年に第47回東奥賞（三内丸山遺跡の発掘・研究と積極公開）を受賞したのである。

この栄誉は県内の埋蔵文化財関係者の保護と研究に対する意識を高め、また一面では遺跡・遺物等が歴史解明の資料として、いかに重要であるかを多くの人々に認知してもらう礎ともなった。以上のように埋文センターとして、また県内埋文関係者の主柱となって行くことを希望したい。人々はそれを期待しているのである。

# ２０周年特集号概要

成 田 滋 彦

昭和55年に設立した青森県埋蔵文化財調査センターは、今年で20年を迎えた。20年間で308箇所の発掘調査を実施し、227冊の発掘調査報告書を刊行した。

この多くの発掘調査の中で、特筆すべきことをあげるとすると、縄文時代の草創期では、六ヶ所村表館(1)遺跡の隆起線文土器の出土、八戸市櫛引遺跡の多縄文土器の出土とそれに伴う住居跡と土坑の検出であり、資料が少ない当該時期の貴重な資料が得られた。

縄文時代早期では、下田町中野平遺跡で大型住居跡を検出し、ロングハウスが早期の早い段階で使用され、大型住居跡の構造と性格に問題をなげかけた。

縄文時代中期では、六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡で土坑墓を中心とした環状集落を検出し、その後、青森市三内丸山遺跡で、中期の拠点型集落を検出し、拠点型集落と他の集落との関連が注目される。

縄文時代後期では、六ヶ所村上尾駮(2)遺跡・大石平遺跡で集落の全体を調査し、八戸市の韮窪遺跡では、住居跡から狩猟文土器が出土し、当時の狩猟の様子を描いているとともに、縄文時代では少ない絵画の資料として貴重である。

縄文時代晩期では、青森市朝日山遺跡で丘陵の斜面に170基の土坑墓を検出し、墓域内における墓のあり方及び集落との関連が注目された。

弥生時代では、田舎館村垂柳遺跡の水田跡の発見によって、東北地方の北部に至る地域に稲作が北上してきたことが確認され、教科書を書き換えさせる程の発見であった。

平安時代では、青森市野木遺跡で10万平方メートルの広大な面積を調査し、平安時代のトイレ・水場遺構・畑等などを検出し、平安時代集落の全体を調査している。また、浪岡町高屋敷館遺跡では、環壕を伴う集落を検出し、平安時代の集落構造を解明しつつある。

本県の平安時代は文献が少なく、古代史を解明していくにあたっては、考古学による調査が重要と考えられる。

このように、当センター20年間の調査で本県のこれまでの考古学の常識を変える発見と、遺構の検出がみられ本県の歴史の解明に貢献した。

これらの重要な発見によって、例えば、垂柳遺跡にかかる道路の一部は高架となり、高屋敷館遺跡は道路が迂回し、三内丸山遺跡は事業計画を中止し全面保存することとなった。

今回、20回周年の特集号を組むにあたっては、「旧石器時代」・「縄文時代草創期」・「縄文時代早期」・「縄文時代前期」・「縄文時代中期」・「縄文時代後期」・「縄文時代晩期」・「弥生時代」・「奈良・平安時代」・「中世・近世」と、時代・各時期毎に記載し、その中で遺構（住居跡と住居跡以外）と遺物に分け、埋蔵文化財調査センターが発掘調査した遺跡を中心に、本県の20年間の調査の成果を記載した。

なお、引用・参考文献は、最後に各時期ごとにまとめて記載した。

（青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹）

## 掲載遺跡一覧

津山遺跡（１）・鳴沢遺跡（２）・餅ノ沢遺跡（３）・杢沢遺跡（４）・外馬前田（１）遺跡（５）・湯船（１）遺跡（６）・丸山溜池遺跡（７）・亀ケ岡遺跡（８）・神明町遺跡（９）・千刈（１）遺跡(10)・十三港遺跡(11)・琴湖岳遺跡(12)・縄文沼遺跡(13)・荒神山遺跡(14)・古館遺跡(15)・永野遺跡(16)・鶴ケ鼻遺跡(17)・砂沢平遺跡(18)・五輪野遺跡(19)・季平下安原遺跡(20)・五輪堂遺跡(21)・太子森遺跡(22)・駒泊遺跡(23)・大光寺新城遺跡(24)・永泉寺跡(25)・富山遺跡(26)・垂柳遺跡(27)・水木館遺跡(28)・天狗平遺跡(29)・山本遺跡(30)・山元（２）遺跡(31)・山元（３）遺跡(32)・松山遺跡(33)・羽黒平（１）遺跡(34)・野尻（１）遺跡(35)・野尻（２）遺跡(36)・野尻（３）遺跡(37)・野尻（４）遺跡(38)・平野遺跡(39)・高屋敷館遺跡(40)・源常平遺跡(41)・浪岡城跡(42)・杉の沢遺跡(43)・一ノ渡遺跡(44)・独狐遺跡(45)・尾上山（３）遺跡(46)・十腰内（１）遺跡(47)・野脇遺跡(48)・砂沢遺跡(49)・宇田野（２）遺跡(50)・茶毘館遺跡(51)・中崎館遺跡(52)・境関館遺跡(53)・堀越城跡(54)・弘前城(55)・観音林遺跡(56)・実吉遺跡(57)・隠川（３）遺跡(58)・隠川（４）遺跡(59)・隠川(12)遺跡(60)・隈無（２）遺跡(61)・隈無（８）遺跡(62)・宇鉄遺跡(63)・山崎遺跡(64)・二ツ石遺跡(65)・尻高（２）遺跡(66)・尻高（３）遺跡(67)・尻高（４）遺跡(68)・間沢遺跡(69)・今津遺跡(70)・大平山元Ⅰ遺跡(71)・大平山元Ⅱ遺跡(72)・大平山元Ⅲ遺跡(73)・三内遺跡(74)・三内丸山遺跡(75)・新町野遺跡(76)・三内丸山（６）遺跡(77)・山野峠遺跡(78)・長森遺跡(79)・朝日山（１）遺跡(80)・朝日山（２）遺跡(81)・野木遺跡(82)・安田（２）遺跡(83)・山下遺跡(84)・内真部（４）遺跡(85)・尻八館遺跡(86)・岡町（２）遺跡(87)・大沢遺跡(88)・熊ケ平遺跡(89)・板子塚遺跡(90)・鞍越遺跡(91)・高谷川（２）遺跡(92)・水木沢遺跡(93)・小奥戸（２）遺跡(94)・物見台遺跡(95)・石持納屋遺跡(96)・前坂下（３）遺跡(97)・銅屋（３）遺跡(98)・アイヌ野遺跡(99)・浜通遺跡(100)・浜尻屋貝塚(101)・岩屋近世貝塚(102)・瀬野遺跡(103)・田名部館遺跡(104)・発茶沢遺跡(105)・幸畑（７）遺跡(106)・表館（１）遺跡(107)・上尾駮（２）遺跡(108)・幸畑（１）遺跡(109)・新納屋（２）遺跡(110)・上尾駮（１）遺跡(111)・大石平遺跡(112)・弥栄平（１）遺跡(113)・富ノ沢（２）遺跡(114)・弥栄平（４）遺跡(115)・沖附（２）遺跡(116)・千歳(13)遺跡(117)・沖附（１）遺跡(118)・弥栄平（７）遺跡(119)・鷹架遺跡(120)・家ノ前遺跡(121)・唐貝地遺跡(122)・吹越遺跡(123)・桧木遺跡(124)・獅子沢遺跡(125)・明前（４）遺跡(126)・柴崎（１）遺跡(127)・槻ノ木（１）遺跡(128)・七戸城跡(129)・掘切沢（３）遺跡(130)・長谷遺跡(131)・古屋敷遺跡(132)・長者久保遺跡(133)・中野平遺跡(134)・向山遺跡(135)・下谷地（１）遺跡(136)・平窪（２）遺跡(137)・寺山（３）遺跡(138)・明戸遺跡(139)・大和田遺跡(140)・伝法寺館遺跡(141)・洞内城遺跡(142)・淋代遺跡(143)・根井沼（１）遺跡(144)・小田内沼遺跡(145)・小山田（２）遺跡(146)・泉山遺跡(147)・杉沢遺跡(148)・上蛇沢（２）遺跡(149)・剣吉荒町遺跡(150)・前比良遺跡(151)・佐野平館遺跡(152)・聖寿寺館跡(153)・野場（５）遺跡(154)・滝端遺跡(155)・小沢館遺跡(156)・志民（２）遺跡(157)・西張（２）遺跡(158)・西張（３）遺跡(159)・館野遺跡(160)・坪渡遺跡(161)・日渡遺跡(162)・畑内遺跡(163)・馬場瀬（１）遺跡(164)・右ェ門次郎窪遺跡(165)・三合山遺跡(166)・石ノ窪遺跡(167)・水吉遺跡(168)・松石橋遺跡(169)・砂子遺跡(170)・鴨平（１）遺跡(171)・鴨平（２）遺跡(172)・櫛引遺跡(173)・長七谷地２号遺跡(174)・長七谷地８号遺跡(175)・長七谷地貝塚(176)・和野前山遺跡(177)・売場遺跡(178)・赤卸堂遺跡(179)・見立山（２）遺跡(180)・鶉窪遺跡(181)・弥次郎窪遺跡(182)・岩ノ沢平遺跡(183)・韮窪遺跡(184)・牛ケ沢（３）遺跡(185)・笹ノ沢（３）遺跡(186)・松ケ崎遺跡(187)・風張遺跡(188)・田面木平遺跡(189)・丹後谷地遺跡(190)・沢掘込遺跡(191)・八幡遺跡(192)・是川中居遺跡(193)・丹内遺跡(194)・牛ケ沢（４）遺跡(195)・松館遺跡(196)・根城跡(197)・三八城跡(198)・新井田古館遺跡(199)・黒坂遺跡(200)

# 旧 石 器 時 代

太田原　　潤

青森県内の旧石器時代遺跡は隣接道県に比べても非常に少なく、未解明な点が多い。青森県立郷土館による蟹田町大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡の発掘調査及び報告書刊行は当センター設立前後であるが（三宅他1980、81）、それ以前においても、また、それ以後においても両遺跡を凌駕する遺跡はいまだ確認されていない。当センター設立後の調査成果を概観するのが本号の趣旨ではあるが、それをもって県内の旧石器時代を叙述するにはあまりにも資料不足の感が否めない。そこで旧石器時代に限っては、この20年間を中心としつつも、関連する資料についてはそれ以前のものについても若干言及することとする。なお、大平山元遺跡群以前の研究史については大平山元Ⅰ遺跡の報告書に詳しい（岩本1979）。

**遺構**

検出することができた遺構は、大平山元Ⅱ遺跡で確認された石囲い炉のみである（三宅他　1980）。熱を受けた痕跡が観察される拳大の円礫がほぼ円形に並んだものである。

**ナイフ形石器文化の遺物**

ナイフ形石器は、東通村物見台遺跡、三沢市淋代遺跡、蟹田町大平山元遺跡、野辺地町獅子沢遺跡等で出土している。ナイフ形石器は旧石器時代の編年研究をリードしてきた石器であるが、県内での出土例は単発的なものが多く、火山灰との関係が把握できるものもないため、他地域との比較は困難である。また、定量的な分析もできないため、技術や形態の比較も困難なものが大半であるが、獅子沢遺跡採集例は素材の用い方、調整のあり方に東山型ナイフ形石器的要素がうかがえる。

**尖頭器文化の遺物**

尖頭器は大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡等で出土しているが、特に充実しているのは大平山元Ⅱ遺跡である。接合資料の分析を通じて大平山元技法Ａ、Ｂが提唱されたが、前者は樋状剥離を有する尖頭器に関わる技法、後者は湧別技法に関連する技法とされる（三宅1980）。県内の旧石器資料は他県の資料と比較しにくいものがほとんどであるが、技法Ａについては当初から長野県男女倉遺跡や千葉県東内野遺跡との対比が試みられた（三宅1980）。その後、類似資料が北海道を除く東日本各地から報告されるようになり、それらの集成や再評価もなされている（川口1988、1989他）。

**細石刃文化の遺物**

細石刃文化関連の資料は、大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡、木造町丸山遺跡、横浜町吹越遺跡、五所川原市隠川（２）遺跡等で出土している。大平山元Ⅱ遺跡では、舟底形石器や大平山元技法Ｂによる石核が確認されている。技法Ｂは湧別技法の母体となったとの見解も示されているが、両遺跡からは湧別技法そのものを示す細石刃や石核は出土していない。湧別技法に関連した接合資料は、大平山元Ⅱ遺跡の1989年の調査でも複数得られている（横山1992）。それらは両面調整のブランクから複数本のスキー状削片を剥離する点では湧別技法と共通するものであるが、細石刃は剥離していない。この時の調査では他に荒屋型の範疇で捉えられる彫刻刀形石器も出土しており、石器製作技術だけではなく、石器組成の面からも湧別技法との共通性がうかがわれる。荒屋型彫刻刀形石器は隠川（２）遺跡の調査でも１点出土している（山口 2000）。

1998年に県立郷土館が実施した丸山遺跡の発掘調査でも湧別技法との共通性がうかがわれる削片系細石刃の関連資料が出土している（大湯 2000）。ここでも細石刃そのものは検出できなかったが、細石刃石核、削片、掻器、削器等が出土した。他時期の遺物の混入が考え難い事から、限定された一時期の石器組成がある程度把握できた例としても貴重である。同遺跡発掘調査の契機となったのは1981・82年に１点づつ採集された細石刃石核である。１点は珪質頁岩製の削片系のものであり、もう１点は黒曜石製の非削片系のものであった。異なる技術、形態の両資料の関係を把握するのが調査の主眼の一つであったが、発掘調査では非削片系の細石刃石核は得られなかった。周辺に分布が広がる可能性もあるので今後の調査が望まれる。

大平山元Ⅲ遺跡でも丸山遺跡同様黒曜石製の非削片系細石刃石核が採集されている。これらは野岳・休場型の範疇に属するものとして西南日本との関連が指摘されたものである（三宅1981）。黒曜石の原産地が注目されるところであったが、その後の分析で両遺跡とも県内産黒曜石を使用したものであることが判明した（福田1990）。

**その他の資料**

上記諸遺跡の他にもこれまでに旧石器時代の資料として紹介されたものがあるが、再検討の必要があるものが少なくない。六ヶ所村発茶沢遺跡例（三宅1982）は旧石器時代の掻器として位置付けることも可能ではあるが、層位的には縄文時代草創期の可能性も残る。今別町山崎遺跡からは削片、舟底形石器が報告されているが、これらも技術的、層位的に再検討の余地がある（畠山・小笠原他1982）。平舘村尻高（４）遺跡、青森市三内遺跡からは石刃状の剥片１～２点が旧石器時代のものとして報告されている（岡田他1985、桜田・石岡他1978）。しかしこれらについても、積極的に旧石器時代に位置付けるにはさらなる検討が必要と言わざるを得ない。また、佐井村沖海底、小泊村沖海底123ｍから引揚げられた尖頭器についても旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺物としての報告がある。後者は更新世末の海面上昇により遺跡が水没したものと解釈しているようであるが（小泊村史編纂委員会1995）、海水面の変動について誤解があるように思われる。遺跡自体が水没したというより、縄文人の海洋活動を反映したものと考える必要もある。

他に六ヶ所村幸畑(7)遺跡も旧石器時代の遺物としてしばしば紹介されるが（大湯1988）、石器組成的にも層位的にも神子柴長者久保文化期のものと評価することが可能である。平賀町太子森遺跡例（葛西励他1983）も同様である。

**まとめと課題**

これまでみたように、この20年間の県内の旧石器時代研究は大きな進展を見せたとは言えない状況にある。今後の展開を望むには、何をおいても資料の蓄積が急務となろう。遺跡を見つけるには鍵層となる火山灰を把握する必要もあるが、県内では他地域と比較する上で重要な広域火山灰の検出例も極めて少ない。これまで姶良丹沢火山灰（ＡＴ）、阿蘇４、洞爺等の広域火山灰は確認されているものの確認地点は限られている。ＡＴは旧石器時代の編年研究上最も重要な広域火山灰であり、遠隔地の石器群を対比する場合の鍵層としての役割は大きい。残念ながら本県ではＡＴとの関係が層的に把握できる石器群は未検出であるが、木造町出来島海岸では泥炭質の露頭中に５㎜前後の層厚でＡＴが堆積している（辻1993他、町田他1992）。同海岸は埋没林がある場所として近年脚光を浴び、観光地化しつつあるが、ＡＴはその埋没林の直上で観察される。解説板、各種案内等にＡＴのことは触れ

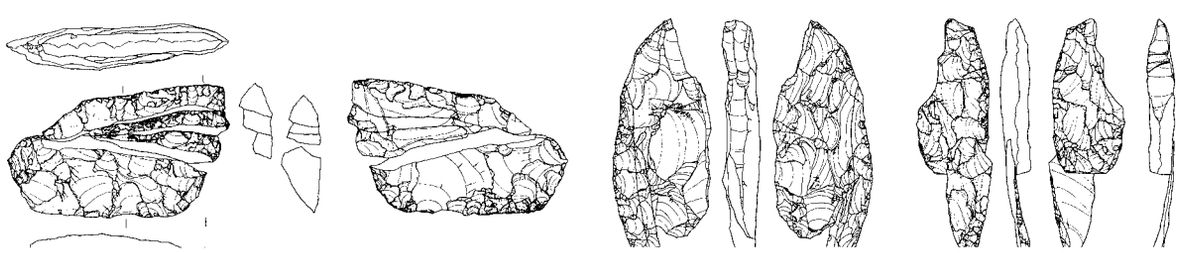
られていないが、埋没林の年代決定の決め手となったのはＡＴの降下年代であった。この埋没林はＡＴ降下直前のこの地域の植生をよく留めたものとしても重要である。ここではＡＴの上位にも泥炭層が堆積しているので、最終氷期最寒冷期前後の自然環境変遷史がこの露頭にはパックされていることになる。遺物こそ出土していないものの旧石器時代の自然環境を知る上でも重要な露頭である。阿蘇４、洞爺は前期・中期旧石器を探す場合の手がかりになるものと思われる。

県内の遺跡調査で分析に供される火山灰は、層、またはブロックとして検出された高純度のものがほとんどであり、鉱物分析レベルで同定が試みられた例はほとんどない。偏西風と火山の位置関係から本県は広域火山灰が飛来しにくいという制約はあるが、火山灰の検出、同定法にも再考の余地がある。ローム層についても給源等が不明確なものが多く、今後はより微視的なサンプリング、分析の蓄積が必要である。

先に見たように神子柴・長者久保文化期の遺物がしばしば旧石器時代のものとして報告されている。同文化期は、大平山元Ⅰ遺跡や茨城県後野遺跡で無文土器が出土したことから縄文時代草創期として位置付けるのが一般的となっていたが、1998年の大平山元Ⅰ遺跡の調査で出土した土器に付着した炭化物をＡＭＳで年代測定し、暦年較正を施した結果、約１万６千年前との数値が得られた（谷口他　1999）。これについては測定法が変わっただけとする過小評価の声もあるが、重要なのは、蓄積されつつある最終氷期の自然科学研究の成果と暦年で対比可能になったことである。これにより、土器が如何なる環境のもとに出現したかが再考を迫られることになり、それと旧石器時代の関係、更新世から完新世へという地質学的な移行期との関係についても検討が必要となった。

この20年の間に県内の神子柴・長者久保文化期およびそれ以降の縄文時代草創期の様相は徐々に明らかになってきた。土器出現は考古学的に大きな関心事であるが、そのプロセスを解明する上でも県内の旧石器時代を追究することは意義深い。また、津軽海峡を挟んで北海道と対峙するという地理的な特徴にも興味深いテーマが多数潜んでいる。今後より一層の資料の蓄積が望まれる。

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護総括主査）



**大平山元Ⅱ・Ⅲ遺跡出土石器接合資料**

# 縄 文 時 代 草 創 期

小田川　哲　彦

## 調査の現状

青森県の縄文時代草創期は、昭和50年の青森県立郷土館が行った蟹田町大平山元Ⅰ遺跡発掘調査での無文土器出土を契機にする（三宅 1975）。昭和58年には当センターが発掘調査を行った八戸市鴨平(2)遺跡で爪形文系土器が出土し（春日 1983）、行政発掘のうえでも草創期という時期が認識されることとなる。この後昭和61・62年に六ヶ所村発茶沢(1)遺跡（畠山他 1986）、同表館(1)遺跡（三浦 1989）を発掘調査し、双方から隆起線文系土器が出土し、それまで不鮮明であった本県の草創期文化が強く意識されるようになる。その後、平成10年に発掘調査した八戸市櫛引遺跡では、多縄文系土器とこれに伴う竪穴住居跡と土坑、集石跡が検出されたほか（小田川・坂本 1999）、階上町滝端遺跡からは、爪形文系土器と集石遺構、竪穴状遺構が検出されている（森・市川 2000）。このように近年の調査により、草創期の資料は徐々に蓄積され土器型式も出揃ってきている。

県内の草創期の遺跡と当該時期の所産と考えられる遺物については、平成11年、平成12年と相次いで刊行された東北町長者久保遺跡と蟹田町大平山元Ⅰ遺跡の再調査報告書の中で詳細にまとめられている（谷口1999、福田2000）。両遺跡ともに次代への画期に位置し、縄文文化形成期の遺跡として注目され、縄文時代草創期を考えるうえで大きな調査成果をあげている。

この時期の遺跡と遺物は、現在調査中のものをあわせて22カ所知られているが（福田2000）、多くは断片的な資料で、その中には旧石器時代の遺物として報告されているものも含まれており再検討の必要がある。これらの分布は県東部と南部の太平洋側に集中しており、津軽地方での発見例は今のところ大平山元Ⅰ・Ⅱ遺跡と弘前市独狐遺跡だけである。草創期遺跡の分布傾向は、縄文時代早期の分布と共通するものである。

## 遺構

県内の遺構検出例は、今のところ２遺跡だけである。櫛引遺跡から竪穴住居跡２軒、土坑６基、集礫が検出されている。竪穴住居跡は不整な円形で、規模は6×5.5ｍ、深さは約１ｍである。炉跡と柱穴は検出されなかった。また、住居跡から約３ｍ離れて集礫が検出されている。礫は被熱したものが多く屋外炉として使われていたものと思われる。

八戸市櫛引遺跡遺構

土坑は、住居跡の周囲約10ｍの範囲から検出されている。形状は不整な円形および楕円形で、大きさは１～1.3ｍ、深さは50㎝前後である。第１号土坑からは復元個体１個のほか、小型土器を含む複数個体の土器片が出土しており、土坑墓の可能性も考えられる。これらは多縄文系土器期の遺構として捉えられるもので、東北地方北部の草創期の遺構としては初例となった。

滝端遺跡からは竪穴状遺構１基、集石遺構が検出されている。竪穴状遺構は楕円形で、規模は2.1×1.9ｍ、深さは50㎝である。集石遺構は径が1.3ｍ程の円形の掘り方をもち、覆土の上面から被熱した70数点の礫と礫片が出土している。

櫛引遺跡での竪穴住居跡検出例は、季節的定住か通年定住かの議論もあるが、群馬県西鹿方中島遺跡などの例からも、この時期すでに集落としての定住化が広域的に確立していたことを示すものと思われる。今後、集落の立地条件や各遺構の形態や配置など他遺跡との比較から生活様式を考えるうえでも良好な資料となるものである。

**土器編年と今後の課題**

大平山元Ⅰ遺跡の無文土器出土は（三宅 1975)、それまで不明であった本県の縄文文化の年代を一気に草創期初頭まで遡らせ、以後、早期前半までの間を繋ぐ各土器型式の発見が課題となっていた。その後、前述の出土資料によって、本県の土器編年も全国的な編年体系に対比させ得る状況になってきているが、各土器型式の変遷からみれば細部で欠落しているものがあると考えられる。

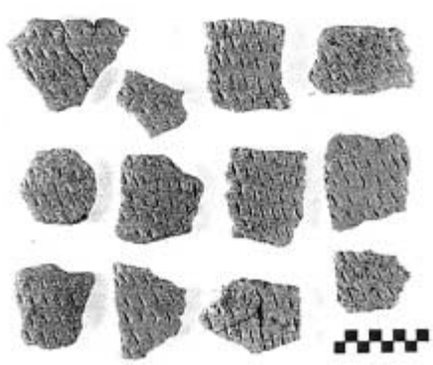
草創期の土器型式編年については、諸説論じられているが、大枠では無文土器群→隆線文系土器群→爪形文系土器群→多縄文系土器群の流れで把握されるものである。

昭和24年の長者久保遺跡石器群の発見から約40年、長者久保・神子柴文化期に土器が共伴することが大平山元Ⅰ遺跡の再調査（谷口 1999）でさらに明らかとなり、また、その土器は較正暦年代測定から 16,000～16,500 cal Ｂ.Ｐ.という年代が示された。これは、従来の年代を約4,000年ほど古く遡るもので土器の起源を探るうえで注目され反響をよんだ。

表館(1)遺跡出土の微隆起線文土器は隆起線文系土器群の中でも新段階のもので、より古段階の土器からの移行が問題とされ、その間に位置づけられる豆粒文土器など未発見の土器の発見が期待される。

爪形文系土器は断片的なものも含め遺跡数は多いものの、器形を把握できる資料はない。今年度調査された南郷村黄檗遺跡では、２ｍ程の範囲から爪形文土器片のみが約160点程出土しており、この中からは複数の個体が認められた。この爪形文土器のみの出土例は、鴨平(2)遺跡のほか滝端遺跡にも共通するものであるが、土器にやや違いが認められる。黄檗遺跡と鴨平(2)遺跡の土器は胎土に雲母片を多量に含むが、滝端遺跡出土土器には雲母片は含まれず、その違いは時間差によるものではないかとしている（森・市川 2000)。本土器群の単独出土と他土器との共伴出土は、依然として問題であり位置づけは今後の土器編年を左右する意味でも注目される。

**六ヶ所村表館(1)遺跡**
**出土隆起線文系土器**



**八戸市鴨平(2)遺跡**
**出土爪形文系土器**

**八戸市形櫛引遺跡出土**
**多縄文文系土器**

櫛引遺跡出土の多縄文系土器は、本県の土器型式間の空白を埋めるだけではなく、その特徴的な器形の共通性は室谷下層式と明確な繋がりを示すもので、分布圏を広げた点でも意義がある。報文中で筆者は、室谷下層第９層段階以降に併行する単一の土器群と考え多縄文系土器群の後半から末葉に位置づけたが、文様要素のバリエーションには室谷下層式土器と相違点が多々見受けられ、再度分析検討の必要がある。編年的には、前段階の押圧縄文系土器が滝端遺跡から１点出土しているほか（報告書中では不確定要素が強く早期の遺物として掲載されている:報告者と確認了承済み）、後続する土器群の発見がまたれるところである。

また、前述の爪形文土器との関わりも避けられない問題である。爪形文土器単独段階説と爪形文、押圧・回転縄文併存説があるなか、櫛引遺跡出土の爪形文土器は多縄文系土器と同一層中にあり、その前後関係を把握することは難しい。各土器片の胎土や施文の違いはもとより、県内の爪形文単独出土例の層位的前後関係を把握し対比させることが今後必要である。

草創期遺物の出土層位については、火山砕屑物との関係を太田原潤氏が大平山元Ⅰ遺跡の再調査報告書の中でまとめている（太田原 1999）。県南部の遺物は例外なく南部浮石層の下位にあり「多縄文系土器、爪形文系土器は二ノ倉火山灰堆積前後、隆起線文系土器は千曳浮石層堆積以後、神子柴・長者久保系石器群は千曳浮石層および八戸火山灰堆積以前の時期に位置づけられる」としている。

石器群については、大平山元Ⅰ遺跡以外に出土数も少なく、明確に把握されているものはない。櫛引遺跡では石器群の特徴について特に触れなかったが、出土地点の異なる局部磨製石斧を除き、縄文時代早期の石器組成と大差ないように思われる。石箆は形態的に早期のものと類似しており、やや違いがみられるのは、削器類の素材剥片が石刃状である点である。他に、滝端遺跡からは竪穴状遺構の覆土から磨製石斧が出土している。

また、今年度調査されている野辺地町明前(4)遺跡では、千曳浮石層から石槍を伴う石器群が検出されており、その中には新潟県小瀬ケ沢洞窟、東京都前田耕地遺跡の尖頭器と類似するものが含まれていることから、調査整理の進展が期待される。

**まとめ**

このように、本県草創期の遺跡と遺物の研究は今後の調査に待つところが大きく、特に土器型式間の空白を埋める土器の発見が待たれる。また、遺跡数も希少であることから、遺物の科学的分析はさらに重要性を増すものとみられる。更に、本県草創期の様相を一層鮮明にするためにも火山砕屑物の年代と各土器型式の前後関係を把握し他地域との比較検討を進めていくことが必要である。

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主査）

# 縄 文 時 代 早 期

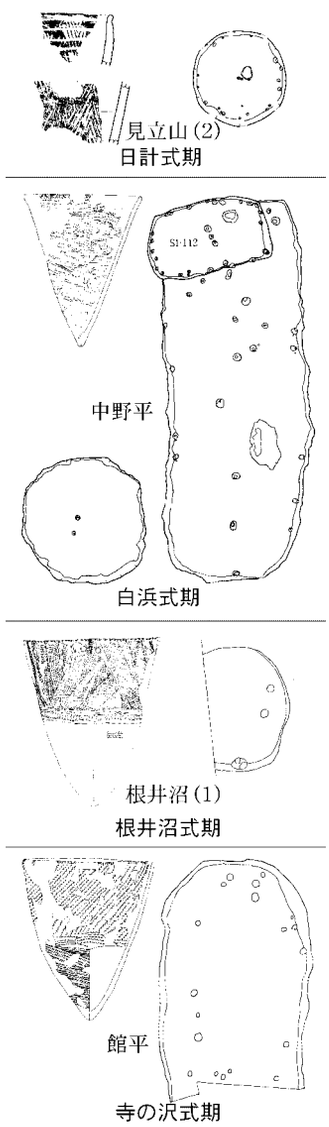
坂 本 真 弓

昭和55年以降、当センターでの縄文時代早期調査遺跡は124遺跡あり、そのほとんどが遺物のみを出土するものである。遺構に関しては、竪穴住居跡・土坑・焼土遺構・集石・貝塚等が検出されている。土坑の中には、「土坑墓」の可能性のあるものや「落とし穴」と考えられるものもある。遺物としては、早期前葉の押型文土器、早期中葉の底部が尖底主体である沈線・貝殻文系土器、早期後葉の底部が平底である縄文系土器とこれに伴う石器・土製品などである。

**竪穴住居跡**

昭和50年から55年には、まず、八戸市長七谷地貝塚の試掘調査（昭和53年）が行われ、長七谷地２号遺跡等も発掘調査が必要であるという報告がなされた。この試掘調査では早期中葉の竪穴住居跡が１軒検出された。また、これと並行して発掘調査が行われた八戸市長七谷地貝塚（昭和52・53年調査）からは早期末葉から前期初頭にかけての竪穴住居跡12軒が発見された。竪穴住居跡は楕円形のものが多い。中には長軸９ｍの大型住居跡も１軒検出されている。赤御堂～早稲田５類期の大型住居跡を含む集落跡が初めて明らかにされた。また、貝塚の調査も行われ、早期後半から前期前半にかけての動物・植物遺体が多数出土している。また、六ヶ所村新納屋(2)遺跡の調査が行われ、早期中葉から後葉の竪穴住居跡３軒が検出された。 昭和55年から60年には、八戸市和野前山遺跡（昭和56年調査）、八戸市売場遺跡（昭和54・56・57・59年調査）では、早期の竪穴住居跡が多数発見された。和野前山遺跡では、早期後葉の竪穴住居跡が４軒、売場遺跡では早期前葉から後葉の竪穴住居跡29軒が発見された。中でも、ムシリⅠ式期の竪穴住居跡は８軒発見されている。長軸2.6～5.3ｍの円形・楕円形主体で、２軒の住居から灰床炉と地床炉を検出している。この時期の竪穴住居跡は六ヶ所村表館(1)遺跡の１軒以外は検出されておらず、現在のところムシリⅠ式期の唯一の集落跡である。

昭和62・63年には表館(1)遺跡の調査が行われ、早期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡が26軒検出された。物見台式期の竪穴住居跡は３軒あり、そのうち２軒は、長軸約６ｍの隅丸長方形・楕円形で、炉は共に灰床炉である。また、赤御堂式期の竪穴住居跡は11軒、早稲田５類期は８軒あり、共に長軸９ｍ代の比較的大型の住居跡を１軒含む。前述の長七谷地貝塚と同様に上北地域においても、当時期の集落跡の一端を示した。六ヶ所村上尾駮(2)遺跡（昭和60・61年調査）の調査が行われ、早期中葉の竪穴住居跡２軒を検出し、内１軒は白浜式期のものである。




**早期前葉・中葉の土器と小型・大型竪穴住居跡**

平成元年には、下田町中野平遺跡の調査が行われ、白浜式期の竪穴住居跡が12軒検出された。遺構同士が重複していることから、複数時期にまたがっていると考えられている。平面形は隅丸長方形が主体で、住居跡内から炉は検出されていない。また、長軸13ｍの大型住居跡１軒が検出されている。また、平成元年に弥栄平(7)遺跡の調査が行われ、竪穴住居跡１軒が検出された。

平成６年には六ヶ所村鷹架遺跡の試掘調査が行われ、早期中葉の物見台式期の竪穴住居跡１軒が検出された。平成６・８年には、福地村西張(3)遺跡・西張(2)遺跡の調査が行われ、西張(3)遺跡では早期の竪穴住居跡１軒、配石遺構１基が発見された。西張(2)遺跡では早期中葉白浜式期の竪穴住居跡が６軒検出された。平成８年には六ヶ所村幸畑(1)遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉白浜式期の竪穴住居跡が２軒検出された。平成10年には八戸市櫛引遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉鳥木沢式の竪穴住居跡５軒と捨て場が検出された。規模は５ｍ前後の不整円形・楕円形主体で炉は地床炉でこの内２軒から検出された。早期中葉の遺物の中にはミニチュア土器・蓋(ふた)形土器・スプーン形土製品等を含む。

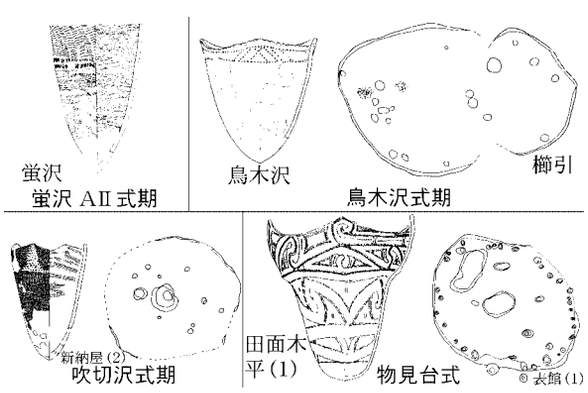
これらの他にも県内で行われた調査の主な成果を述べる。県で行った試掘調査をもとに、昭和55・56年に八戸市教育委員会が調査した長七谷地２号・８号遺跡では早期後葉の竪穴住居跡が多数検出され、長七谷地２号遺跡では14軒、長七谷地８号遺跡では８軒検出された。(注1) 昭和62年には三沢市教育委員会で根井沼(1)遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉の竪穴住居跡２軒が検出された。この内１軒は根井沼式期のもので、径2.27ｍの不整円形である。遺物は、早期中葉の土器、石錘等の石器、他、土偶も出土した。(注2) 昭和63年に八戸市教育委員会で赤御堂遺跡の発掘調査が行われ、早期中葉から後葉にかけての竪穴住居跡４軒とほかに貝殻・魚骨ブロックを18箇所検出した。(注3) 昭和63年・元年に調査が行われた見立山(2)遺跡では早期前葉の日計(ひばかり)式竪穴住居跡２軒が検出された。また、平成７～９年の調査でも同遺跡で早期前葉の竪穴住居跡２軒、早期後葉の竪穴住居跡４軒が検出された。(注4･5) 日計式期の竪穴住居跡は2～3ｍ台の不整円形が主体で、炉は検出されていない。この時期の集落跡として注目される。平成10年には館平遺跡の調査が行われ、寺の沢式期の竪穴住居跡１軒が検出されている。(注6)

上記に挙げた遺跡の中でも、見立山(2)遺跡・中野平遺跡・長七谷地貝塚・売場遺跡・表館(1)遺跡のように各型式の竪穴住居跡が集落単位で発見されたことは意義が大きい。また、中野平遺跡では長軸13ｍを越える大型住居跡が検出されたことにより、早期の集落構造を考える上で重要な遺跡である。

**土坑**

土坑は、フラスコ状土坑のほか、落とし穴として報告されているものが多い。また、これまで墓としての報告された例はないが、これは人骨の発見がなく、土坑墓群等、まとまった検出例がないために、これまで見逃されてきた可能性もある。

最近、「墓」と認定するための要素をいくつか満たしている土坑を見直し、積極的に墓の可能性を探る動きもあり、(注7･8) ここで紹介された「土




**早期中葉の土器と竪穴住居跡**

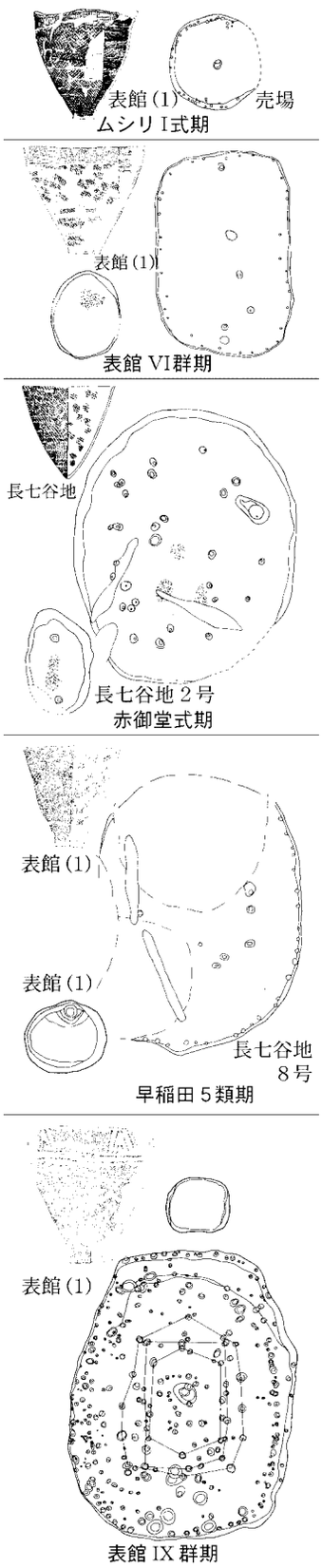
坑墓」について記述する。表館(1)遺跡（昭和62年調査）では、平面形態は楕円形・方形主体で、長軸1.7～2.4ｍ程で、遺物は土器２個体分が出土したものや配石を伴うものもあり、時期は早期後葉～末葉である。新納屋(2)遺跡（昭和54年調査）では不整楕円形・不整円形主体で、長軸0.6～2.4ｍの範囲で、土器の他に石錘を伴うものが多く、時期は早期中葉である。このほかの遺跡などでも「土坑墓」としての埋葬類型に該当する土坑が見られるが、その性格上、時期決定が困難なものもあり、遺跡名を列挙するに留める。しかしながら、これを積極的に判断するならば、「早期後半には墓制の諸要素の大半が出揃っている。」状態であり、早期は墓制の発展段階といえよう。今後の資料の増加を期待したい。

このほか、早期の遺構で竪穴住居跡以上に検出される遺構に円形の落とし穴がある。これは八戸市鶉窪（うずらくぼ）遺跡（昭和56年調査）で検出され、県内で初めて明らかにされた。これによると、落とし穴の形態は平面形が円形で、断面形が擂（す）り鉢・漏斗（ろうと）状に近い土坑である。規模は小型から大型まで様々であるが、中には土坑底面に小ピットを穿ち、杭跡の施設を持つものもある。遺構内からは構築年代を決定づける遺物がほとんど出土しないが、堆積状況を加味すると、縄文時代早期後半から前期初頭に位置づけた。また、鶉窪遺跡で検出された落とし穴は16基あり、そのうち15基は埋没沢の両岸に立地し、その一部は等高線に沿うような形で一定の間隔を持ち配列されている。

これ以降、円形の落とし穴は多くの遺跡で検出され、落とし穴として認識され、昭和55年以降は次の遺跡から検出されている。（八戸市鴨平(1)・三沢市小田内沼・八戸市弥次郎窪（１次）・南郷村畑内（１次）・名川町日渡・西張(3)（１次）・十和田市寺山(3)・十和田市平窪(2)・六戸町長谷・南郷村水吉・櫛引（１・２次）・八戸市岩ノ沢平遺跡）また、鶉窪遺跡の他に円形の落とし穴が一定の間隔を持った配列で検出された例は、小田内沼遺跡（昭和61年）、寺山(3)遺跡（平成８年調査）の７基、櫛引遺跡（平成９・10年調査）の13基などに見られる。

**出土遺物**

県内各地で遺物包含層の調査も行われ、早期の資料も20年の間に増加した。土器編年上新たに位置づけがなされた型式もある。昭和62年調査成果から、早期中葉には従来の白浜式・寺の沢式の中間に根井沼式の設定がなされている。これは、刺突の施文方法が白浜式と類似し、寺の沢式と貝殻腹縁文様に共通性が見られることによるものである。昭和62年の表館(1)遺跡の調査では縄文時代草創期から各時期の遺物が出土しているが、とくに、縄文時代早期後葉から前期前葉までの土




**早期後葉の土器と小型・大型竪穴住居跡**

器群は編年上大きな位置を占めることとなった。この中でも早期後葉の表館Ⅵ群はムシリⅠ式と赤御堂式の間に位置するものと考えられる。この群を４類に分類し、綾絡（あやくり）文－折り返し口縁－側面圧痕文－地文縄文とした土器群がそれぞれ強く関連しながら、赤御堂式へと推移してゆく過程をとらえた。売場遺跡の第Ⅶ・Ⅷ群土器もこれに相当する。また、早期末の表館Ⅸ群は従来の早稲田５類に後続し、表館Ⅹ群を経て長七谷地Ⅲ群に至る土器群と考えられる。早稲田５類との相違点を特殊縄文の消滅・側面圧痕の多用、器形・胎土に求めている。

昭和60年に八戸市教育委員会により、鳥木沢遺跡の調査が行われ、この成果に基づいて、早期中葉の鳥木沢式の名称が与えられた。蛍沢ＡⅡ式と近い時期と考えられるが、編年上の位置は確立していない。(注9・10)

次に各型式でこれまでの成果を述べる。日計式期には鴨平(1)遺跡（昭和56年調査）、八戸市見立山(1)遺跡（平成８年調査）、この土器は押型文の他に地文縄文に沈線文を施文するもの、地文縄文のみのもの等が存在すると考えられている。白浜式期は資料の増加が著しく、中野平遺跡・西張(2)遺跡、大鰐町鶴ヶ鼻遺跡（昭和62年調査）、六ヶ所村上尾駮(2)遺跡、六ヶ所村幸畑(1)遺跡等が挙げられる。鶴ヶ鼻遺跡は津軽地域でこの時期の土坑が検出されている。また、上北地域と南部地域では文様施文等に若干の違いが指摘されている。(注11) 吹切沢式期・物見台式期の土器編年はこれまで数多くの検討がなされてきたが未だに確立されてはいない。近年、吹切沢式－物見台式の編年に関わると思われる蛍沢ＡⅡ式・鳥木沢式などの資料も増加している。赤御堂式は長七谷地・赤御堂貝塚の調査により、従来の型式の前後に古段階・新段階と三段階にわたる変遷が認められている。

以上、この20年間の調査での大きな成果は、集落跡の広がりが確認されたこと、住居跡の資料が蓄積されたこと等である。これにより、早期の実像に迫ることが出来たが、同時に土器編年の確立・細分化など、今後検討すべき問題も残されている。

（挿図について：各型式で２軒掲載した竪穴住居跡は、大型・小型住居を掲載した。使用した実測図にはその遺跡名を付した。なお、実測図の一部は（注12）から転載した。また、土器の縮尺は不同で、竪穴住居跡は１/250である。）

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）

# 縄 文 時 代 前 期

木 村 鐵次郎

本県における縄文時代前期の調査は、県埋蔵文化財調査センター設立以前の県文化課によって大鰐町大平遺跡や碇ヶ関村大面遺跡、青森市熊沢遺跡など多くの調査例があり、膨大な資料を蓄積してきた。今回は、当センターが発足してからの20年間の調査を中心に、本県の縄文時代前期の発掘調査の成果を紹介していきたい。

**竪穴住居跡**

国道45号八戸北バイパス建設に先立って、昭和54年に県文化課が調査し、継続して昭和55年に当センターが調査した八戸市売場遺跡では、縄文前期初頭の長七谷地Ⅲ群期の住居跡３軒が検出された。平面形は不整円形（６ｍ×4.5ｍ、炉なし）及び楕円形（５ｍ×４ｍ、炉なし）であった。

国道338号仮設取付道路建設工事に先立ち、昭和58年に当センターが調査した六ヶ所村表館遺跡では、前期初頭の芦野Ⅰ群・表館式の隅丸不整長方形の住居跡１軒（３ｍ×2.7ｍ、炉なし）の検出をみている。この時期の住居跡としては初めての検出であった。

国道280号道路改良事業に先立ち、昭和59年に当センターが調査した平舘村間沢遺跡では、前期後葉の住居跡が２軒（１号3.4ｍ×3.5ｍ円形・地床炉、３号4.1ｍ×4.5ｍ円形・地床炉）検出された。特に第３号竪穴住居跡の床面から埋設土器が検出されたことは注目される。

むつ小川原開発事業に先立ち、昭和61年に県文化課が調査した六ヶ所村上尾駮（１）遺跡Ｃ地区では、前期後葉円筒下層ｄ１式の住居跡が17軒検出された。平面形は楕円形が多く、円形・長楕円形の例もあった。長径７ｍ～８ｍが最も多く、中には第８号住居跡のように長径が13ｍに及ぶ大型住居跡もみられた。

むつ小川原開発事業に先立ち、昭和60年と61年に当センターが調査した六ヶ所村上尾駮（２）遺跡では、前期初頭の早稲田６類期の住居跡が２軒(5.8ｍ×3.6ｍ、長方形・炉なし、3.7ｍ×2.7ｍ、不整円形・炉なし）検出された。早稲田６類期における住居跡の検出は県内で最初である。

津軽中部広域農道整備事業に先立ち、平成元年に当センターで調査した弘前市尾上山（３）遺跡では、前期後半の住居跡が２軒検出された。１軒は4.8ｍ×4.2ｍの不整な楕円形であった。

県営農免農道整備事業（高野川地区）に先立って、平成３年～４年に当センターが調査した川内町熊ヶ平遺跡では、前期の集落が検出された。前期の住居跡は12軒で、前期後半の円筒下層ｂ～ｃ式期が３軒（第８号・炉不明、第10号・砂敷炉、第14号・炉なし)、前期末の円筒下層ｄ１～ｄ２式期が９軒（第１号・炉なし、第２号・炉不明、第３号・地床炉、第５号・地床炉、第６号・地床炉、第９号・炉なし、第11号・炉なし、第12号・炉不明、第13号・炉不明）である。第10号竪穴住居跡では床を掘り込んで土器を埋設し、その上に石皿を裏返して蓋をしていたという。また、第10号・13号竪穴住居跡では、床に砂を敷いて炉として使用していた例がみられた。第３号竪穴住居跡の床面近くから検出された炭化物は、脂肪酸分析の結果、クリ・クルミ等の堅果類にキジ肉のような野鳥の肉を混ぜて焼いたクッキー状の食品炭化物と考えられている。

県総合運動公園整備事業に先立ち、平成４年～６年に当センターで調査した青森市三内丸山遺跡は、

縄文時代前期から中期にかけての、極めて多数の遺構と大量の遺物を出土したことで知られている。直接の発掘調査の原因となった運動公園整備事業は青森市の東部地区に場所を変えて行われることになり、三内丸山遺跡は保存されることとなった。その後の三内丸山遺跡の調査は、平成７年から県文化課三内丸山遺跡対策室に引き継がれている。住居跡の多くは中期の所産のものであるが、前期についても調査報告書で報告されている中では60軒弱の住居跡がある。内５軒は大型住居跡である。なお、三内丸山遺跡は、平成９年３月に国の史跡に指定された。

八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に先立って、当センターが平成４年から断続的に調査を進めてきた南郷村畑内遺跡も、平成13年に調査完了の予定である。現在まで報告された住居跡は77軒であるが、そのうち前期の住居跡は40軒ほどである。内訳は前期初頭期が１軒で他はほとんどが前期後半代の円筒下層式の時期でもので、中でも後葉期のものが多いように思われる。第55ｃ号住居跡は前期中葉期の円筒下層ａ式期と思われる長軸13.3ｍ×短軸6.6ｍの長楕円形の大型住居跡であった。

国道101号道路改良事業に先立ち平成７年に当センターで調査した、深浦町津山遺跡では前期末葉を中心とする竪穴住居跡が10軒検出されている。形状の把握できるものでは、平面形は楕円形で地床炉を持つものが多く検出されている。

青森中核工業団地遊水池建設事業に先立って、平成10年に当センターが調査した青森市新町野遺跡では、縄文前期の住居跡が８軒検出され、そのうち４軒が大凡10ｍ以上の大型住居跡で注目された。第29号住居跡(10ｍ×9.2ｍ、隅丸方形、地床炉１、南壁際に長方形の土檀)、第30号住居跡(12ｍ×10ｍ、隅丸方形、地床炉３、南西隅に三日月状のテラス)、第31号住居跡(12ｍ×6.5、隅丸長方形、地床炉７、土器埋設炉２、南壁東側に出入り口状のテラス)、第35号住居跡(9.3ｍ×6.2ｍ、隅丸長方形、地床炉４）である。

**青森市新町野遺跡の大型住居跡**

土砂採取に先立って、昭和59年に東通村教育委員会が調査した東通村石持納屋遺跡では、縄文時代前期後葉から末葉頃の住居跡が５軒検出されている。平面形は楕円形・円形でテラスを伴い、炉は地床炉・竪穴炉・土器埋設炉がみられた。

藩境塚保全整備事業に先立って、野辺地町教育委員会が平成７年に調査した野辺地町柴崎（１）遺跡では、縄文前期中葉期の円筒下層ａ式を伴う住居跡が18軒検出された。炉は第１段階地床炉、第２段階皿形の浅い掘り込み炉、第３段階に円形の掘り込み炉への変化が認められたという。

縄文時代前期の竪穴住居跡の調査では、当センター設立以前はほとんど円筒下層式期のそれも下層ｂ式やｄ１式期の検出例であったが、ここ20年の成果としては、円筒下層式以前の前期前半の検出例がみられてきたことと、円筒下層式期でも大型住居跡の検出例が増加してきていることが注目される。三内丸山遺跡や畑内遺跡などの遺跡全般に及ぶ調査例から、集落の中での大型住居跡の性格が、

より明らかにされてくるものと思われる。

**墓制**

**南郷村畑内遺跡第221号土坑**

（１）フラスコ状土坑

南郷村畑内遺跡では、３基のフラスコ状土坑から人骨が出土した。第221号土坑から４体分の合葬された人骨が検出された。壮年期前半の男性２体、壮年期後半の女性１体、小児１体である。第251号土坑では小児１体、第257号土坑では成人女性１体である。その他に、第63号土坑から骨粉、歯、ベンガラ等が検出され、第232号土坑では底面からベンガラが検出されている。合わせて５基のフラスコ状土坑が墓に転用されたものと思われる。これらのフラスコ状土坑はいずれも前期後葉を中心とする時期の可能性が強いものである。

昭和57年に上北町教育委員会で調査した上北町古屋敷貝塚のフラスコ状土坑の第２号遺構からは、成人女性人骨が出土している。人骨の下にホタテ貝が敷かれ、土坑の上面には蓋をするようにホタテ貝で覆っていたという。

一般にフラスコ状土坑の性格としては、貯蔵穴と考えられている。ここで取り上げたのは、フラスコ状土坑の中から人骨あるいはベンガラ等が認められた例だけであるが、極めて少ないながらも墓として利用されたものがあることは明らかである。

（２）埋設土器

上北町古屋敷貝塚から円筒下層ｄ式の土器の中から胎児骨（妊娠後半期の７～８ヶ月）１体分が検出されている（注１）。

県道長平町・陸奥森田線道路改良工事に先立って、当センターが平成２年に調査した鰺ヶ沢町鳴沢遺跡では、前期末葉の円筒下層 d2式を主とする埋設土器が13基検出されている。正立と倒立の比率には差が認められないが、埋設土器の分布は地域的にまとまりを有している。

南郷村畑内遺跡では、縄文前期の埋設土器が59基報告されている。これらの分布はやや散漫ながらもいくつかのまとまりがみられ、墓域的な意識が感じられる。型式毎では下層ａ式５％、下層ｂ式12%、下層ｃ式７％、下層ｄ１式69%、下層ｄ２式７％で、下層各型式に認められるが圧倒的に下層ｄ１式が多いことがわかる。また、正立と倒立の別であるが、４：１の割合で正立が多くなっている。

縄文前期の遺跡から埋設土器が出土することはしばしば認められることである。その用途については、かって八戸市蟹沢遺跡出土の埋設土器から幼児骨が検出されたことから、幼児や小児の墓ではないかといわれてきたが、その後の人骨の検出例はない。しかし、南郷村畑内遺跡での埋設土器内の土壌の脂肪酸分析では①ヒト遺体を直接埋葬した例の脂肪と類似すること②ヒトの胎盤試料とも類似する例もみられる③土器の大きさから幼児埋葬用であった可能性が考えられると分析された。

鳴沢遺跡例での脂肪酸分析でも遺体や人骨の埋葬の可能性が指摘されている。

（注１）この胎児骨が入っていた土器について、この土器を取り上げた三沢市教育委員会田島氏に話を伺ったところ、この土器はフラスコ状土坑である第６号遺構の外の西にあり、埋設土器ではなかったかということであった。

**南郷村畑内遺跡Ｂ捨場（西捨場）中掫浮石層直上からの下層ａ式土器と獣骨**

**その他**

（１）中掫(ちゅうせり)浮石層の年代

十和田火山噴出の火山灰で代表的なものに中掫浮石層がある。中掫浮石は粒が細かく粟粒大のものの散布が広いのでアワズナの呼び名をされている。

中掫浮石層の降下年代は、かって縄文時代中期末と考えられてきた。しかし、昭和58年の十和田市明戸遺跡の調査で、中掫浮石層をきって円筒下層ｄ式土器が埋設されていたことから、中掫浮石層の年代は前期末の円筒下層ｄ式以前ということが判明した

さらに、平成４年の南郷村畑内遺跡における西捨て場の調査において、中掫浮石層の直上に円筒下層ａ式土器が出土することが確認され、中掫浮石層の年代は縄文時代前期中葉の円筒下層ａ式期の直前であることが明らかになった。

（２）捨て場

円筒土器文化の遺跡では、しばしば捨て場が形成され、そこから大量の遺物が出土することは知られている。当センターでも、前期の円筒下層式土器の捨て場をいくつか調査している。

国道280号（今別バイパス）道路改良工事に先立って、昭和55年当センターで調査した今別町山崎遺跡Ａ地区では、500㎡の捨場が斜面に検出され、出土土器は円筒下層ｂ式後半と下層ｃ式後半～ｄ１式という。

鰺ヶ沢町鳴沢遺跡では、円筒下層 d1式から d2式の捨て場が斜面に形成されていた。

川内町熊ヶ平遺跡では、二つの遺物密集ブロック（捨て場）から円筒下層ｂ式・ｃ式・ d1式・ d2式の土器と石器が捨て場から段ボール箱で500箱に出土した。捨て場は平坦面に形成されていた。

青森市三内丸山遺跡では、遺跡の北側斜面と谷部（通称北の谷）に前期の円筒下層式から中期の円筒上層式期の捨て場が形成されており、多量の遺物を出土している。特に通称第６鉄塔地区からは、捨て場下部の包含層（円筒下層ａ式・ｂ式期）が水分を多く含んでいるために、動物骨・魚骨・植物質の遺物が出土している。

南郷村畑内遺跡では、円筒下層式の捨て場が平場を取り囲むように形成されているが、中でもＢ捨て場（西捨て場）は遺跡北側の斜面に形成された円筒下層ａ式～ d2式までの捨て場であるが、包含層下部の円筒下層ａ式土器に伴う状況で、動物骨・魚骨が検出された。

当センター設立以前の県文化課調査でもいくつかの円筒下層式の捨て場が調査されているが、多くは円筒下層ｂ式あるいはｄ式の捨て場である。しかし、南郷村畑内遺跡と青森市三内丸山遺跡では円筒下層ａ式から捨て場が形成されており、大規模な捨て場は円筒文化の初期から形成されることが明らかとなっている。

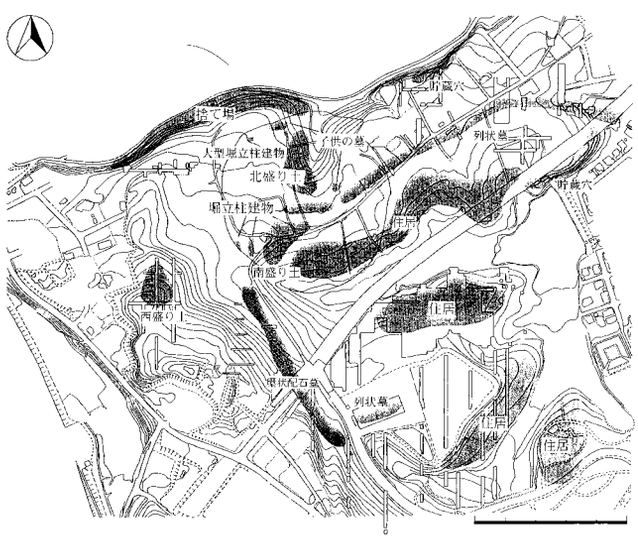
（青森県埋蔵文化財調査センター調査第三課長）

# 縄 文 時 代 中 期

畠 山 昇

当センター設立以降の20年間に県教育委員会が調査した遺跡のうち、中期の土器片が出土している遺跡数は約120遺跡に上るが、そのうち遺構が発見されたものに限ると約50遺跡である。それらのうち、おもな調査例を地域ごとに見てみる。

津軽地方では、青森市三内(2)遺跡（現在は国史跡三内遺跡）、三内丸山(6)遺跡、今別町山崎遺跡（中期中葉～末葉）、平舘村尻高(2)・(3)遺跡（中期中葉）、深浦町津山遺跡（前期末～中期初頭）、五所川原市隈無(1)・(6)遺跡、鰺ヶ沢町餅ノ沢遺跡等の集落跡が調査された。このうち、青森市三内丸山遺跡は、平成４～６年度に県営野球場建設事業に伴って当センターが調査を行ったが、おびただしい数の遺構や遺物が発見されたことから、県は遺跡の保存・整備へと軌道修正を行った。そして平成７年度からは三内丸山遺跡対策室が、遺跡の全体像解明のための学術調査を継続して行っており、平成９年には国史跡になった。これまでの調査から、前期中頃から中期終末にかけての長期間にわたって営まれた遺跡であり、中期後半に最も繁栄し集落が拡大したことが知られる。中期に相当する検出遺構としては、多数の竪穴住居跡のほかに、掘立柱建物跡、土坑墓群、粘土採掘坑、埋設土器遺構、道路跡、大規模な遺物廃棄ブロック（盛土遺構）等が発見され、各遺構が整然と定められた区域に配置されていたことから、計画性をもった集落経営がなされていたと考えられている。また、考古学だけでなく他分野の研究者との連携によって各種の調査・研究が進められており、多くの貴重な成果を得ている。調査の進展によって縄文社会の実像に迫ることができることが期待される遺跡でもある。この三内丸山遺跡との関連で注目される遺跡に平成９年～11年に調査された三内丸山(6)遺跡がある。三内丸山遺跡の南東約1.5㎞の場所に位置し、中期中葉と後期前葉を中心に営まれた遺跡である。住居跡や掘立柱建物跡、土坑などの遺構や遺物が多数発見されており、中期に関する調査事例にも貴重なものがある。たとえば、中葉期の住居跡からアスファルト塊が出土したことは、縄文時代におけるアスファルト利用を考える上でも貴重な事例といえる。また、餅ノ沢遺跡は前期から後期にかけての遺跡であるが、住居跡６軒、石囲炉25基、配石遺構10基、石棺墓４基、埋設土器５基、土坑39基、遺物包含層１カ所、捨て場２カ所等の遺構が発見された。住居跡のうち１軒は前期末葉、他は中期後半のものと推定され、大型住居跡が３軒ある。多数の土器・石器とともに各種の土・石製品も多数出土したが、特に注目される遺物に




**縄文時代中期中頃（約4500年前）の三内丸山集落の様子**

（縄文シンポジウム'99「検証 三内丸山遺跡」資料）

中期初頭のヒスイ未製品や中期末葉の赤色顔料入りの把手付注口土器や人面付き注口土器がある。

三八地方では、八戸市韮窪遺跡（中期末葉）、八戸市牛ヶ沢(3)遺跡（中期末葉）、階上町野場(5)遺跡（中期後葉～後期初頭）、五戸町上蛇沢(2)遺跡、三戸町泉山遺跡、福地村館野遺跡（前期末葉～中期中葉）、八戸市笹ノ沢(3)遺跡等の集落跡が調査された。とくに、平成10・11年に調査した八戸市笹ノ沢(3)遺跡は、中期初頭期の集落跡であり住居跡15軒、土坑194基、焼土跡12基、捨て場２カ所と多数の小ピットが発見された。当該時期の集落跡の調査例が少ないことに加え、ほぼ単一の時期の集落跡であることから、良好な資料となる（平成13年刊行予定）。

上北・下北地方では、六ヶ所村大石平遺跡Ⅱ区（中期末葉）、弥栄平(1)遺跡（中期末葉～後期初頭）、上尾駮(2)遺跡、富ノ沢(2)遺跡（中期後半）、幸畑(7)遺跡（中期後葉）、野辺地町槻ノ木(1)遺跡（中期初頭が主体）、川内町熊ヶ平遺跡（前期末～中期前葉）等の集落跡が調査された。とくに、六ヶ所村ではむつ小川原開発事業に関連して多数の遺跡が調査され、多くの成果を得ることができた。このうち、平成元年と２年に当センターが行った富ノ沢(2)遺跡Ａ地区では、中期の住居跡約400軒、掘立柱建物跡９棟、配石遺構４基、屋外炉９基、埋設土器２基、土坑698基、多数の小ピット群が検出された。円筒上層Ｃ式から大木10式併行期まで長期間にわたって営まれた遺跡であり、中期中葉と後葉の時期では遺構の配置に相違が見られることが判明している。また、平成元年に県文化課が行った富ノ沢(2)遺跡Ｃ地区では、中期中葉から末葉にかけての住居跡79軒以上、土坑179基、炉跡３基が発見されているが、主体となる時期は中期末葉（大木10式併行期）であり、当該時期の大規模な集落跡である。

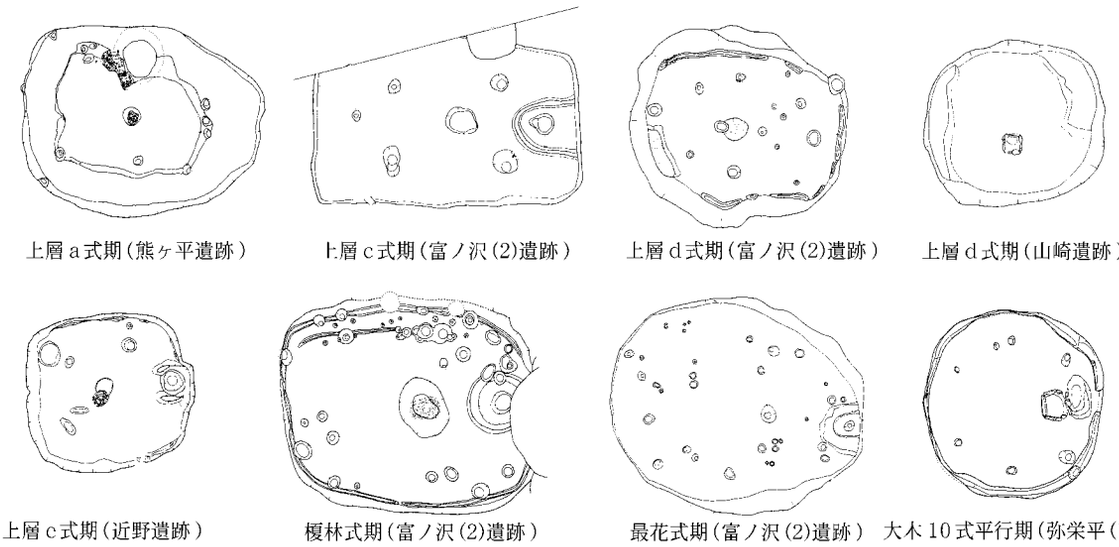
**竪穴住居跡**

昭和55年以降の県教育委員会が行った調査では、中期に属する住居跡が検出された遺跡数は約30遺跡近くあり、住居跡の件数も総数1,000軒以上が発見されている。この数は縄文時代を通じて最多であるが、なかでも、国内有数の集落跡である六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡で約500軒、青森市三内丸山遺跡でも500軒以上（実数不明）の発見例が知られ、この二つの遺跡で検出数の大半を占めている。これらのうち、所属時期が明確なものについて見ると、円筒上層ａ～ｃ式期のものは少なく、円筒上層ｄ式期以降のものが圧倒的に多い。それらを対象に、中期前半と後半について大まかな変遷を見てみる。

中期前半（円筒上層期）の住居跡は、平面形が円形や楕円形、隅丸（長）方形の住居が一般的であり、直径３ｍ前後の小型のものから直径５ｍ前後の一般的な大きさの住居に混じって、長軸が10ｍ～30ｍクラスのロングハウスと呼ばれる大型住居跡も多く発見されている。炉は中央に設置される場合が一般的で、地床炉が最も多い。このほかに土器埋設炉や小竪穴炉や粘土囲炉（周提炉）、粘土囲竪穴炉などが見られる場合も多く、ごく少数ではあるが石囲炉が見られる例もある。また、住居の長軸壁に「特殊施設」と呼ばれる付属施設がつくられる例も多い。

中期後半になると、東北南部に栄えていた大木式土器文化の北上に伴って住居跡の形態や構造にも徐々に変化が現れてくるが、榎林式期では、まだ前代の伝統が色濃く残っており、大型住居跡も多く発見されている。次の最花式期になると、住居跡の平面形は隅丸（長）方形のものは徐々に少なくなり、円形・楕円形のものが多くなる傾向にある。そして、終末期では円形・楕円形のものが卓越する。炉は壁際に偏在する例が一般的で、炉の形態には、地床炉・石囲炉・土器片敷石囲炉・土器片囲炉等があるが、最花式期以降では石囲炉の占める比率が高くなって、複式炉も多く見られるようになる。

また、特殊施設は最花式期にも見られるが、大木10式期では見られなくなるようである。




## 墓

中期の墓の調査例は、泉山遺跡、槻ノ木遺跡、上蛇沢(2)遺跡等各地の遺跡でも発見されているが、とくに六ヶ所村富ノ沢(2)遺跡や青森市三内丸山遺跡で多数検出されている。富ノ沢(2)遺跡では、環状集落の内外に205基の土坑墓が検出され、これらは四つの小墓域を形成しているという[注1]。三内丸山遺跡では、成人用の土坑墓群や胎児ないしは小児用の埋設土器（土器棺墓）群が整然と定められた区域に設けられて多数発見された。成人用の土坑墓は集落の中心部から東へ420ｍにも及ぶ二列の土坑墓列のほかに、西南へ延びる列状に配置された土坑墓が道路跡とともに約180ｍ確認されている。その中には、環状配石を伴う土坑墓も発見され、そのうちの１基は木槨のような構造であったらしいことも最近の調査から分かってきた。なお、配石を伴う土坑墓の例としては、野場(5)遺跡や槻ノ木(1)遺跡等でも発見されている。野場(5)遺跡では配石遺構が20基検出され、そのうちの５基の配石下部には土坑が伴う例が知られる。また、このうちの２基はフラスコ状土坑であり、土坑墓に転用された例と考えられる。

一般に土坑墓には副葬品が見られる場合と見られない場合があるが、前者にはヒスイの玉、石笛、石鏃、異形石器、石冠、敲磨器類、石皿等が副葬された例がある。こうした土坑墓の副葬品の保有率や希少価値の高い遺物の副葬例などから、中期中葉以降に社会的不平等が徐々に広がってくる現象が見られることも、最近の研究から指摘されるようになった[注2]。また、後期初頭には石棺墓が出現することが知られるが、当センターで調査した餅ノ沢遺跡では４基の石棺墓が検出され、中期末葉にまで遡る可能性が強いという。さらに、脂肪酸分析の結果から、１基はヒトの遺体を直接埋葬した可能性が、もう１基はヒトの骨のみを埋葬した可能性が指摘されており、従来考えられてきた甕棺等への再葬を前提とした一次埋葬施設という捉え方に一石を投じる結果となった。

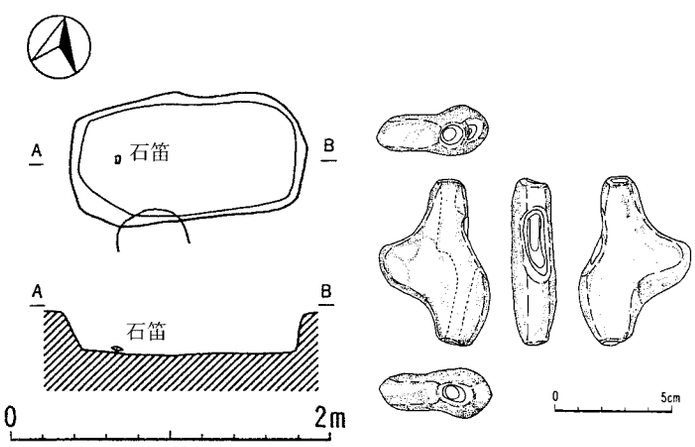
なお、土坑墓から人骨が発見された例は少なく、館野遺跡、泉山遺跡、十和田市明戸遺跡[注3]、八戸市松ヶ崎遺跡[注4]等の例が知られる程度である。このうち、八戸市教育委員会が調査した松ヶ崎遺跡では、住居跡床面から人骨が横臥伸展の状態で出土したことが注目される。住居廃絶後の竪穴内部を墓とし

て再利用した廃屋墓の可能性が考えられているが、中期後半の埋葬形態の一つとして貴重な事例である。

**出土遺物**

土器や石器以外にも土偶を初めとした祭祀に関連した遺物や各種の装飾品など、土・石製品が多数出土するようになるのも中期の特色の一つである。それらの多くは拠点集落とされる遺跡で出土する例が多く、三内丸山遺跡や富ノ沢(2)遺跡などから、土偶、垂飾品、玉、耳栓、キノコ形・三角形土製品、石棒、石刀、岩偶、ヒスイ製大珠、青竜刀形石器、 玦状耳飾り、コハク、石笛、骨角器等各種の土・石製品のほか、多数の動植物遺体の出土が知られる。ヒスイ（新潟県）やコハク（岩手県）、黒曜石（北海道・秋田県・岩手県・山形県・長野県）、アスファルト（秋田県？）など他地域から運び込まれたものも多数あり、遠方との活発な交流・交易が行われてきたことが、次第に分かるようになってきた。また、玦状耳飾りは前期・中期に見られ、大陸との関係で注目される遺物でもある。

人面付土器は中期中葉以降に多く見られるようになるが、最近では餅ノ沢遺跡の人面付注口土器の出土例がある。器内面には赤色顔料の付着が見られ、赤色顔料の入った把手付注口土器と共に、葬送に関係した遺物と考えられている。また、三内丸山(6)遺跡の石鏃などの着柄に使用したと考えられるアスファルト塊、富ノ沢(2)遺跡の石笛なども全国的にも類例が少ないことから貴重な発見である。




土坑墓と副葬された石笛（富ノ沢(2)遺跡）

赤面顔料入注口土器・
人面付注口土器（餅ノ沢遺跡）

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主幹）

# 縄 文 時 代 後 期

成 田 滋 彦

青森県埋蔵文化財調査センターの設立以前の調査は、昭和49・50年に108個という大量の土偶を出土した青森市近野遺跡(注1)、下北半島で初の後期後葉の集落調査を実施した大畑町水木沢遺跡(注2)、後期中葉の十腰内Ⅲ式で検出例が少ない住居跡を検出した金木町神明町遺跡(注3)があげられる。

このように貴重な遺構の検出及び遺物が発見されたが、多くは道路建設に伴う調査であり、そのために集落全体の構成が不明であったが、センターが設立された昭和55年以降に至って、集落全体を調査する事例が多くみられるようになってきた。

**竪穴住居跡**

昭和55年以降には、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い発掘調査が行われた。

昭和55年には南郷村馬場瀬(1)遺跡(注4)で、十腰内Ⅳ・Ⅴ式の住居跡５軒を検出した。また、特殊竪穴遺構３基を検出し住居跡の可能性も考えられる。

昭和58年には、八戸市韮窪遺跡で中期末葉(大木10式併行期)～後期中葉(十腰内Ⅲ式)の35軒を検出した。第77Ｂ号住居跡から、ほぼ完全な形での深鉢形の狩猟文土器が出土している(注5)。八戸市牛ケ沢遺跡では、後期初頭期の住居跡４軒を検出した(注6)。

昭和59年では、今津バイパスの建設に伴い調査した平館村尻高(4)遺跡で、地床炉をもつ十腰内Ⅴ式の住居跡を５軒検出した。住居跡は出入り口施設をもつ住居の構造である。出入り口施設をもつ住居跡は後期の段階で増加する傾向がみられる。

同遺跡では北海道系の堂林式を伴う住居跡が２軒と、深鉢形土器の体部にバンドを巡らす余市式の土器が出土した。これらの北海道系の遺物は、本県では主体的ではなく、陸奥湾沿いの海岸部分に多く遺跡が存在し、北の交流・影響を考えるうえでは重要な資料と考えられる(注7)。なお、堂林式は今別町二ツ石遺跡(注8)でも出土している。

また、同年には六ヶ所村の大石平遺跡の調査が開始された。六ケ所村内の発掘調査の多くは、昭和

六ヶ所村上尾駮(2)遺跡

49年から、むつ小川原開発に伴うものであり、数多くの遺跡の調査がおこなわれた。その全体の発掘調査面積は、50万㎡という面積に至っている。

その中で、大石平遺跡は、昭和58年～60年の三カ年の調査で、90,000㎡のほぼ全面を調査し、調査の結果、住居跡・土坑群・捨て場・配石遺構等を配置した十腰内Ⅰ式の集落である。(注9)

青森市山野峠遺跡 石棺墓（青森県立郷土館）

一方、同一丘陵で大石平遺跡の南方800ｍに位置する上尾駮(2)遺跡も土坑墓を中心とした十腰内Ⅰ式の環状集落である。(注10)

この２つの集落は、いずれも十腰内Ⅰ式期の時期であり、集落が同時に存在していたのか、あるいは別々に存在していたのか興味ある問題である。

筆者は、両遺跡から出土した切断土器を比較検討し、壷形土器の形態に差がみられ、土器の形態差から別々の集落の可能性があると指摘した。(注11) これは遺物の一要素の比較であり、今後は遺構全体の比較検討が必要であると思われる。

平成３年には、八戸平原開拓建設事業に伴う発掘調査が行われた階上町野場(5)遺跡で、後期初頭期の配石遺構と住居跡４軒を検出した。(注12) 第110号住居跡の覆土からは大形の土偶が出土している。

平成８年には、県道尾駮・有戸線改良事業に伴い、六ヶ所村幸畑(こうばた)(1)遺跡を調査し、十腰内Ⅰ式の住居跡３軒を検出した。(注13)

**墓**

後期初頭期の牛ケ沢式から、後期中葉の十腰内Ⅰ式にかけての段階は、特異な葬制がみられる。人骨を土器内に埋葬する甕棺葬であり、これは大正６年に笠井新也氏が、浪岡町天狗平遺跡を調査し、(注14) 昭和８年に喜田貞吉氏(注15)が青森市山野峠遺跡で発掘調査を行い注目されてきたものである。甕棺葬に関しては、葛西　励氏が県内の甕棺をまとめ、現在36遺跡の出土を確認している。(注16)

なお、昭和46年に成人女性骨が埋納された土器が六ヶ所村弥栄平(1)遺跡から農作業中に出土し、その際に復顔が試みられ、縄文美人として青森県立郷土館に展示されている。(注17)

倉石村薬師前遺跡 甕棺墓

なお、弥栄平(1)遺跡は昭和59年に発掘調査が行われ(注18)、中期中葉～後期前葉期の集落が検出されている。

昭和55年には、六ヶ所村鷹架(たかほこ)遺跡から十腰内Ⅰ式の土坑内に３個の壷形土器が出土し、その土器の内部から人骨が出土しており、合葬墓の可能性も考えられる(注19)。

昭和58年には、黒石市一ノ渡遺跡から配石・組石を伴う土坑墓を検出している(注20)。

また、平石を四角に組んだ石棺墓は津軽地方に多く分布しているが、昭和61年に六ヶ所村弥栄平(4)遺跡(注21)からも１基検出している。

なお、青森市小牧野遺跡に代表される(注22)環状列石墓も、後期前葉期から中葉にかけての特徴であり、地域的及び時期的に限定された遺構と考えられる。

このように配石を伴う土坑墓は、列石状に組むタイプ・環状列石のタイプ・不規則なタイプと墓域内の構成は一様でなく、複雑な様相を呈している。

**八戸市韮窪遺跡 狩猟文土器**

昭和60年には、沖附(おきづけ)(2)遺跡の第２号ピット(フラスコ状ピット)(注23)から、切断土器・深鉢形土器が出土し、転用墓の可能性が考えられる。

後期中葉期(十腰内Ⅱ・Ⅲ式)の段階は、検出例が少なく不明な点が多い。また、後期後葉（十腰内Ⅳ・Ⅴ式)の段階は、八戸市の風張遺跡(注24)に代表されるように埋葬の主体は、土坑墓が占めると考えられる。

センター20年の発掘調査は、開発に伴うものが多く、集落全体の調査が行われた遺跡には、六ヶ所村大石平遺跡・上尾駮(かみおぶち)(2)遺跡・沖附(2)遺跡、八戸市田面木平(たものきたい)遺跡・丹後谷地遺跡・風張遺跡がある。しかし、集落全体を概観し、集落内における墓の変遷研究が遅れている。

今後、遺跡内で検出した住居跡・墓を個々に分析するとともに、他の遺構も含めた集落全体の中で位置付けることが必要である。

**青森市近野遺跡の土偶**

**遺物**

土器の特徴は、後期前葉期は基本となる深鉢形の他に、鉢・浅鉢・台付鉢・皿などの器種の分化がみられる。（上尾駮(2)遺跡[注25]・大石平遺跡[注26]）　また、日常容器としての粗製土器と赤塗を塗布した精製土器が製作される。

このことは、器形の分化は調理の変化に伴う器の変化と考えられ、煮炊き中心であった食生活の変化が考えられる。

なお、精製土器は配石を用いた遺構（一ノ渡遺跡[注27]）、つまり非生産的な遺構や、非日常的な切断土器の製作[注28]など、祭祀を中心とした縄文社会の内部の変容に伴って、出現したと考えられる。

土器型式は、磯崎正彦氏が十腰内Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式と設定して以来[注29]、磯崎氏が示唆した十腰内Ⅰ式の細分と、中期末葉～十腰内Ⅰ式に研究主体がおかれ、研究者による多くの土器編年が提示され活発に討議されてきた。六ヶ所村の弥栄平(2)遺跡[注30]・沖附(2)遺跡[注31]・八戸市牛ケ沢遺跡の発掘調査によって出土した土器が、土器編年の研究に寄与したと考えられる。

土器以外の祭祀遺物は、後期中葉の十腰内Ⅰ式（大石平遺跡[注32]）と、後葉の十腰内Ⅳ・Ⅴ式（風張遺跡[注33]）に多く製作される。遺物の中において鐸形土製品やスタンプ形土製品など用途の不明なものがあるが、多くは祭祀に用いられた遺物と考えられる。

この二時期の段階に多量に製作されるのは、中葉期が十腰内式文化の成熟期であり、後葉期十腰内Ⅴ式が亀ケ岡文化の萌芽期であり、地域文化圏の拡大が、多くの祭祀遺物を生み出す背景にあったのではないかとも考えられる。

センター20年の調査は、調査担当者が大量に出土する遺物を処理するのに終始した嫌いがあった。しかし、大量の出土遺物は後期初頭期～十腰内Ⅰ式の編年研究を活発化させたが、これ以降の編年研究は活発に行われなかった。今後は後期全体の物差しというべき土器編年を、磯崎編年の再検討も含め検討すべき時期と考えられる。　　（青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹）

**六ヶ所村大石平遺跡　出土手形・足形土版**

# 縄文時代晩期

福田友之

昭和55年の当センター設立以降、平成11年までの間、県内では県や市町村教育委員会によって、晩期(亀ヶ岡文化)の遺跡調査が多数行われた。それらのなかで、おもに県教育委員会が行った調査事例を中心として紹介し、それぞれのもつ成果について述べる。

**竪穴住居跡**

県内の晩期住居跡は、昭和54年までは数例のみの発見であったが、この20年間に多数追加された。

まず、昭和55～58年に、東北縦貫自動車道八戸線の建設に先立ち当センターが調査した南郷村右エ門次郎窪遺跡(昭和55年調査)では、晩期前葉～中葉の円形竪穴住居跡が４軒と晩期の土坑が発見され(注1)、また、同じく南郷村の三合山遺跡(昭和55年調査)では、晩期の円形竪穴住居跡が２軒と晩期前葉(大洞ＢＣ式期)の土坑が発見された(注1)。また、八戸市鴨平(かもたい)(２)遺跡(昭和56年調査)では、晩期の円形竪穴住居跡が１軒発見された(注2)。また、八戸市牛ヶ沢(３)遺跡(昭和57年調査)では、Ａ地区から晩期の竪穴住居跡が３軒、Ｃ地区から１軒発見された。いずれも円形で晩期中葉(大洞$C_1$式期)のものである。Ｃ地区からはほかに同時期のフラスコ状土坑も３基発見された(注3)。また、南郷村石ノ窪(２)遺跡(昭和58年調査)では、Ａ区から晩期中葉(大洞$C_1$式期)の円形竪穴住居跡が３軒と晩期前半(大洞Ｂ～ＢＣ式期)のフラスコ状土坑が３基発見され、Ｂ区からは晩期中葉(大洞$C_1$式期)のフラスコ状土坑が13基発見された(注4)。また、平成２・３年に、八戸平原開拓建設事業(畑地造成)に先立ち県文化課が調査した八戸市沢堀込遺跡では、Ａ区から後期末～晩期初頭の竪穴住居跡が10軒発見された。円形・楕円形を主とする直径３～４ｍ前後の規模のものである。また、この地区からは後期末～晩期初頭とみられる土坑も31基発見された(注7)。また、平成３・４・６年に、県道櫛引・上名久井・三戸線道路改良工事に先立ち当センターが調査した三戸町泉山遺跡では、晩期終末(大洞Ａ´式期)の竪穴住居跡が１軒、晩期中葉の掘立柱(ほったてばしら)建物跡が１軒、土坑が23基、焼土が２基、さらに晩期前半(大洞Ｂ～ＢＣ式期)の環状列石の一部(幅３～８ｍ、長さ28ｍ)も発見された。この遺跡では遺構内外から晩期の遺物が多数出土した。とくに土偶破片が多く出土し、132点にのぼっている。また、石器・石製品も豊富で、穿孔(せんこう)途中や製作時に破損した玉類の出土は、製作工程を示すものとして注意される(注12・13)。また、平成５年に、主要地方道屏風山(びょうぶさん)・内真部(うちまんべ)線道路改良工事に先立って当センターが調査した金木町千苅(せんがり)(１)遺跡では、晩期の円形竪穴住居跡が３軒発見され、うち１軒は直径約11.8ｍの大型住居跡であった。また、晩期中葉の土坑墓も１基発見された。注目すべき遺物としては晩期中葉(大洞$C_1$式期)の土製仮面が１点ある(注11)。また、平成８年に、八戸平原開拓建設事業(世増(よまさり)ダム建設)に先立って当センターが調査した南郷村水吉(みずよし)遺跡では、晩期前葉(大洞Ｂ式期)の竪穴住居跡が１軒発見された(注14)。また、平成９年に、県営津軽中部広域農道建設事業に先立って当センターが調査した弘前市十腰内(１)遺跡では、晩期初頭(大洞Ｂ式期)の円形竪穴住居跡が２軒発見された。１軒は直径1.5ｍという非常に小型のものであるが、他の１軒はこれとは対照的に推定径13ｍほどの大型

**遺物出土状況（三戸町泉山遺跡）**

住居跡である。また、晩期とみられる土坑墓も１基発見された。このほかに、２ヶ所の遺物集中地点(大洞ＢＣ～$C_1$式・大洞$C_2$～Ａ式期)からは、土偶・土製耳飾り・円盤状石製品などの遺物が多数発見された。黒曜石の石器15点の産地分析結果は、すべて地元の出来島産であった。(注15) この遺跡は平成11年に、当センターが隣接区域を調査し、晩期前半の小型円形竪穴住居跡が５軒発見された。

**大型住居跡（弘前市十腰内(1)遺跡）**

これらのほかに、県内では各市町村教育委員会による住居跡調査例もある。昭和58・59年に青森市教育委員会が調査した長森遺跡では、晩期中葉の円形竪穴住居跡が３軒発見され、(注24) さらに、昭和62年に八戸市教育委員会が調査した八幡遺跡では、後期末～晩期初頭の円形竪穴住居跡が２軒発見された。(注19) また、昭和61・62年に小泊村教育委員会が調査した縄文沼遺跡では、晩期中葉(大洞$C_1$～$C_2$式期)の竪穴住居跡が３軒発見されたが、隅丸長方形である点が特徴的である。(注20) そのほか、平成５年に八戸市教育委員会が調査した是川中居遺跡では、後期後葉～晩期の円形竪穴住居跡が２軒発見された。(注26) また、平成９・10年に階上町教育委員会が調査した滝端(たきはた)遺跡からは、後期後葉～晩期前葉の円形竪穴住居跡が15軒発見された。ここでは、土坑墓も発見されており、本県初の抜歯のある人骨が確認された。(注27)

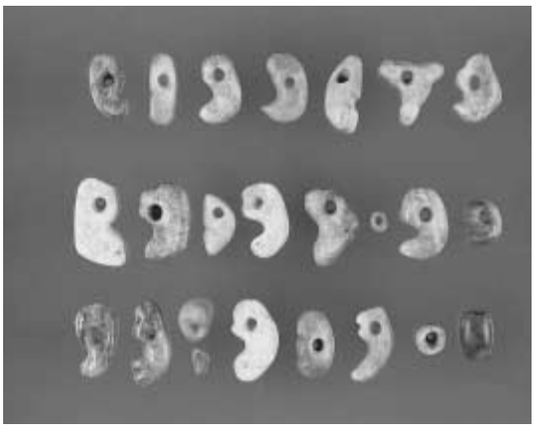
以上のように、この20年の間、多数の竪穴住居跡の新資料が追加された。時期は晩期初頭～末葉の各時期のものである。これによって、従来、資料的な制約もあって積極的な研究が行われてこなかった本県の晩期住居跡は、時期ごと・地域ごとの形態・構造の違い、さらに時期的な変化も少しづつとらえられる状況になってきた。また、泉山遺跡の調査では、掘立柱(ほったてばしら)建物跡も発見されており、今後の晩期の遺跡調査を行う上で参考とすべき遺構となった。

**土坑墓**

県内晩期の墓は、昭和54年までは数遺跡の発見しかなかったが、この20年間に多数追加された。

まず、昭和61年に、むつ小川原開発事業に先立って文化課が調査した六ヶ所村上尾駮(かみおぶち)(１)遺跡Ｃ地区があげられる。晩期中葉(大洞$C_1$～$C_2$式期)の土坑墓が20基発見され、長楕円形・円形・隅丸長方形の形態がある。16基からは赤色顔料が確認され、４基からはヒスイ(硬玉)などの玉類がついた鉢巻き状装身具が発見された。装身具としては玉類が圧倒的で、13基から計766点以上も出土した。緑色凝灰(ぎょうかい)岩が主体であるが、ヒスイが90点以上も含まれており、産地分析結果ではほとんどすべてが糸魚川(いといがわ)産であった。また墓域からは、晩期中葉の鼻曲り土面も出土し、注目された。(注6・29) また、平成２～４年に、新青森変電所新設に先立って当センターが調査した青森市朝日山(１)遺跡では、晩期の土坑が、円形・楕円形あわせて450基も発見され、そのなかに土坑墓とみられ楕円形の土坑が約170基以上も含まれている点が注目された。晩期初頭～中葉の土坑墓群が、丘陵頂部から尾根上にかけて分布するという特異な立地を示し、しかも県内他遺跡の土坑墓にくらべて深いという点で注目された。

**鼻曲り土面（六ヶ所村上尾駮(1)遺跡）**



ヒスイの玉類（青森市朝日山（１）遺跡）

内部には玉類が副葬されたり、赤色顔料が残っている例もあり、17基からはヒスイを含む玉類が37点出土[注9・10]した。このほか、昭和55～57年に、学術調査の一環として、県立郷土館が調査した国史跡・木造町亀ヶ岡遺跡では、雷電宮地区から晩期中葉とみられる土坑墓が24基発見され[注16]、江戸時代以来長い研究史をもつこの遺跡としては、はじめての遺構発見となった。

これらのほかに、県内市町村教育委員会による土坑墓調査例もある。昭和58年に十和田市教育委員会が調査した明戸遺跡(晩期中葉)からは、ヒスイ勾玉とともに仰臥屈位[注22]の人骨が１体発見された。また、昭和58・59年に青森市教育委員会が調査した長森遺跡でも、晩期中葉の土坑墓が３基発見され、２基からは歯も発見された[注24]。また、前に述べた八戸市八幡遺跡では、晩期前半の土坑墓が５基発見され、４基から右側臥屈位１体(性別不明)・仰臥屈位３体(成人男性２・成人女性１)の人骨が発見された。しかもこのうちの１基には成人男女２体が仰臥屈位で合葬されていた[注19]。このほか、昭和61・62年に小泊村教育委員会が調査した縄文沼遺跡では、赤色顔料・装身具は確認されなかったものの、石鏃を多数出土した、土坑墓とみられる例も発見された[注20]。また、平成５年に八戸市教育委員会が調査した是川中居遺跡では、後期後葉～晚期の土坑墓が９基発見され、一部から赤色顔料(水銀朱)や粉末状になった人骨が発見された[注26]。人骨はほかに、平成５・６年に三厩村教育委員会が調査した宇鉄遺跡で、晚期後半の土坑墓から成人男性人骨が１体分発見された[注25]。

屈葬人骨
（十和田市明戸遺跡）

以上のように各遺跡で、土坑墓が多数発見されたこともこの20年の成果として注目される。しかも上尾駮（１）・朝日山（１）遺跡のように、広範囲にわたる調査事例が多かったことも特色である。ただし、人骨の発見が少ないことや、土器のような年代を示す副葬品がきわめて少ないために、年代が不明の墓も多い。しかし、一連の調査によって、玉類などの各種副葬品が多数発見され、当時の埋葬方法・墓制を知るうえで、多くの資料が追加されたことが注意される。このなかで、一つの土坑墓群のなかで、ずば抜けて副葬品が多い土坑墓(上尾駮（１）遺跡Ｃ地区の第35号土坑からは、糸魚川産ヒスイを50点以上も連ねた首飾りが出土した)は、被葬者のおかれた社会の階層性の一端を示唆するものとして、その後の社会構造に関する論議に発展している。また、土坑墓が発見された遺跡でも、同時期とみられる住居跡が少しずつ発見されている。住居跡と墓は、晚期の集落構成を知るうえで、基本的な資料であり、今後の集落研究に必要な基礎資料が多数蓄積されてきている。

本県の土坑墓から多数発見される玉のうち、ヒスイの産地分析によって、上尾駮（１）遺跡出土の玉は、ほとんどすべてが遠隔地の糸魚川産のものであることが判明した。従来から、本県の晚期にはヒスイが多いことが指摘されていたが、産地から遠く離れた本州北端の本県域に、東北他県域に比べて、はるかに多くのヒスイがもたらされていたことが、この調査を契機として具体的に判明して

きた[注30]。これは、双方両地域の交流の結果によるものであるが、ヒスイをより多く入手しえた本県の亀ヶ岡文化の特性があらためてクローズ・アップされた20年でもあった。

**出土遺物**

県内の晩期遺物包含層も各地で調査が行われ、各種の遺物が多数出土した。

まず、昭和59年に、国道280号道路改良工事に先立って当センターが調査した平舘村今津遺跡では、晩期中葉（大洞$C_2$式期）の土器、天然アスファルト付着の石器のほかに、土偶・土版・土面等の土製品、岩版・石剣・石棒類などの石製品が出土した。また、この遺跡は製塩土器が多数出土した点でも注目された。海水を煮詰めるための平底の粗製土器で、器形・大きさ・製作技法がわかる好資料である。しかし、この遺跡でほかの何よりも注目を集めたのは、中国古代の「鬲（れき）」に類似した壷形土器で、底部に袋状の太い足を３本もつ「鬲状三足土器（れきじょうさんそくどき）」の出土であった[注5・28]。この型式の土器は、形態が明確なものは現在４個体あり、いずれも本県から出土しているが、出土状態がわかるのは本例のみである。この土器について、大陸と何らかの文化的関わりをもつものかどうか、その出自・系譜の問題が日中双方の研究者に注目され、議論が行われている[注31～34]。この問題は、簡単には決着しそうもないが、本県の亀ヶ岡文化研究が抱える宿命的な課題を再認識させる調査でもあったと言えよう。また、平成３年に、一級河川岩木川水系支川の後長根川（うしろながねがわ）改修工事に先立って当センターが調査した弘前市野脇遺跡では、晩期初頭～後葉の土器・石器のほかに、土偶・岩版・ヒスイなどが出土した[注8]。これらのほか、昭和58年に、学術調査の一環として県立郷土館が調査した名川町剣吉荒町遺跡では、晩期終末（大洞A′式期）の好資料[注17]、また、平成５～７年に同館が調査した馬渕川流域の晩期遺跡では、三戸町杉沢・福地村垪渡（ごみわたり）の両遺跡から晩期前半の遺物が出土した[注18]。

**鬲状三足土器（平舘村今津遺跡）**

晩期の遺跡ではこれらのほかに、県内市町村教育委員会による調査例があり、昭和55年に横浜町教育委員会が調査した桧木（ひのき）遺跡では、ホオジロザメの歯の垂飾品が出土した[注21]。なお、製塩土器は、階上町滝端遺跡で、県内では従来みられなかった晩期中葉の尖底にちかい形態のものが出土している[注27]。また、昭和58～平成３年に五所川原市教育委員会が継続調査した観音林遺跡では、晩期の土偶・岩偶の好資料が出土し[注23]、前に述べた滝端遺跡でも土偶の好資料が出土した[注27]。これらの土偶・土製仮面等の呪術関連資料は、亀ヶ岡文化にとくに顕著な遺物であり、今後の研究上、不可欠なものとなった。

（青森県埋蔵文化財調査センター総括主幹）

# 弥　生　時　代

成　田　誠　治

昭和56年の11月に青森県教育庁文化課の試掘調査によって、南津軽郡田舎館村垂柳遺跡から弥生時代中期の水田跡が発見された[1]。翌57年に垂柳遺跡調査会が組織され、58年まで発掘調査した結果、弥生時代中期の水田稲作の様相が明らかにされた。

さらに、この調査中に三戸郡南郷村松石橋遺跡出土の土器が弥生時代前期の遠賀川系土器であることが分かった[2]。それまで、縄文時代晩期終末期の土器型式とされていた砂沢式土器出土層の土器を調べ直したところ、遠賀川系土器破片が共伴していることも明らかになった。土器と共に水田稲作の有無が課題とされるようになった。

南郷村松石橋遺跡出土土器

昭和59年から4年計画で弘前市教育委員会が発掘調査した砂沢遺跡で検出された水田跡が、砂沢式土器包含層と同一層であることが昭和62年に確認された。これによって、砂沢式土器期に水田稲作が伝播したことが確定的になった[3]。

水田稲作は、南から伝播したものであるが、住居跡や墓の様相は、輻輳した文化状況を呈している。

ここでは住居跡・墓・生産遺構を項目分けして発掘調査の状況を述べることとする。

**住居跡**

前期の住居跡は、これまで10遺跡から発見されている。多い地域は、八戸市とその近辺である。八戸市内では当センターが発掘調査した弥次郎窪遺跡から３軒、八戸市教育委員会が発掘調査した八幡遺跡から１軒、牛ヶ沢(4)遺跡から４軒が検出されている。また、当センターが発掘調査した南郷村畑内遺跡では６軒、三沢市教育委員会が発掘調査した小山田(2)遺跡では２軒検出されている。

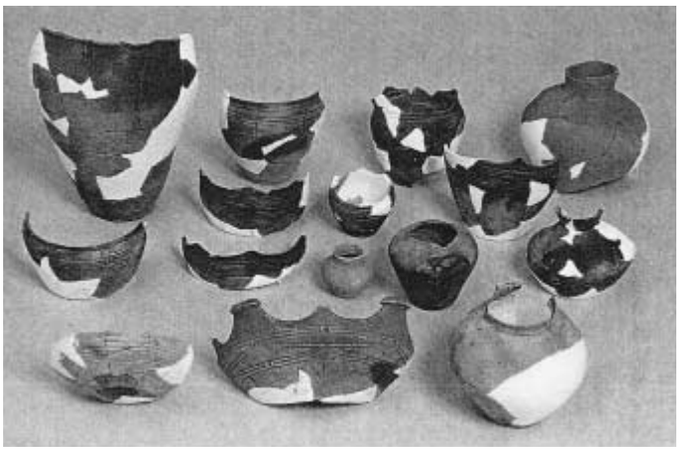
下北半島では、東北大学が発掘調査した脇野沢村瀬野遺跡から１軒[4]、当センターが発掘調査した東通村前坂下(3)遺跡から１軒、六ヶ所村大石平遺跡から２軒検出されている。

西海岸では、当センターが発掘調査した深浦町津山遺跡から２軒の住居跡が検出されている。

津軽平野部では、平賀町駒泊遺跡から部分的ではあるが２軒検出されている。

これらの住居跡は、川のほとりの割合緩い傾斜地や海岸に近い平坦地にある。住居跡の平面形は、楕円形や不整な円形で、規模は最大のものが瀬野遺跡の拡張された住居跡で9.8ｍ×9.5ｍあり、最小のものが弥次郎窪遺跡第２号竪穴住居跡で3.3ｍ×3.2ｍである。炉は、地床炉もあるが石囲炉が多く、炉内に土器が埋設されている例が見られ、この時期の特徴となっている。

畑内遺跡は、新田川中流域左岸にあり、縄文時代と弥生時代の複合遺跡である。平成４年～平成7年の発掘調査で6軒の竪穴住居跡が検出されている。いずれも前期で平面形が楕円形である。方位は、長軸が東西方向のものが４軒、それ以外のものが２軒である。炉は、すべて石囲炉で内部に土器が埋設されているものが３軒ある。出土土器は型式は砂沢期が多く、これに後続する時期のものが１



南郷村畑内遺跡出土土器

軒（第54号）ある。また、遠賀川系土器が混在している住居跡も１軒（第53号）ある。住居跡の配置は、少し高くなっている平坦地の端に４軒、一段低い緩斜面に２軒並んでいる。出土遺物が多かった住居跡は、第53号で壷・台付深鉢・浅鉢などの土器や石鏃、石刀、土偶脚部が出土している。第54号からは、甕・壷・台付鉢・鉢などの土器や石匕・敲磨器が出土しており、その組み合わせが注目される。平成9年度には捨て場から多量の土器に混じって遠賀川系土器や石製品が出土している。

牛ヶ沢(4)遺跡では、住居跡４軒と同時期の土坑が７基検出され、小山田(2)遺跡では住居跡２軒のほか土坑が５基検出されている。弥次郎窪遺跡では、住居跡のほかに竪穴遺構３基と土坑２基検出されている。津山遺跡では住居跡から少し離れた所に建物としては組めないランダムと思える柱穴群があり、それより低いところから土坑が検出されている。

八幡遺跡では、住居跡全域を発掘調査していないが、床面に接する土壌を採取して北海道大学の吉崎昌一氏がフローテーションを実施した。これによって得られた炭化種子は、コメが最も多く、ほかに栽培植物種子としてアワ・キビ・ヒエ・オオムギ・コムギなどがある。[5]

大石平遺跡の前期住居跡は２軒で、いずれも楕円形を呈し、炉には土器が埋設されている。炉の形態は地床炉のものと石囲炉のものがある。

以上のほか、平賀町駒泊遺跡からも前期住居跡の一部が２軒検出されている。

中・後期では、八戸市教育委員会が発掘調査した風張(1)遺跡と当センターが発掘調査した六ヶ所村大石平遺跡がある。

風張(1)遺跡は、新田川の下流域に近い場所の右岸丘陵に立地しているが、南面する緩傾斜地から住居跡が５軒検出された。これらの時期は、中期が４軒、後期が１軒である。平面形は、円形に近いものが１軒、不整な楕円形が２軒であるが、調査区外へ延びるため全体の形状・規模を知り得なかったものが後期の１軒を含め２軒あった。炉が残存しているものが２軒で、このうち１軒は地床炉、もう１軒は３ヶ所に火焼部分が見られるものである。出土遺物は、前期の住居跡では壺・甕・鉢・深鉢・台付鉢などの土器やスクレイパー・磨製石斧・くぼみ石などの石器が出土している。後期の住居跡から深鉢、覆土から石鏃・石錐・スクレイパー・石匕・磨製石斧・凹石等が出土している。[6]

大石平遺跡は、老部川右岸の低平丘陵上にあり、弥生時代の遺構は遺跡内ほぼ中央部にある湧水地とそれを水源とする川べりから検出された。前述した前期の住居跡は、水源地直上の高い所から検出されている。この場所より東側に中期の住居跡1軒、土坑3基、埋設土器遺構1基検出されている。

中期の住居跡は、南北方向に長軸を持つ楕円形の竪穴住居跡が１軒で、炉は検出されていない。後期の遺構は、中期のエリアよりさらに東側にあり、住居跡６軒、竪穴遺構７基、土坑１基、焼土遺構１基、埋設土器遺構1基検出されている。後期の竪穴住居跡の平面形は不整楕円形が多く、ほぼ円形

が1軒ある。規模は、最大のものが推定で東西6.96ｍ、南北5.80ｍであり、最小のものが東西3.6ｍ、南北4.7ｍである。炉は地床炉が２軒で、石囲炉が２軒である。掘り込まれた内部が焼けている施設が検出された竪穴住居跡が２軒あり、このうち１軒からはこれが３基検出されている。特殊な施設としては、壁外に盛土を持つものが１軒あった。

**墓**

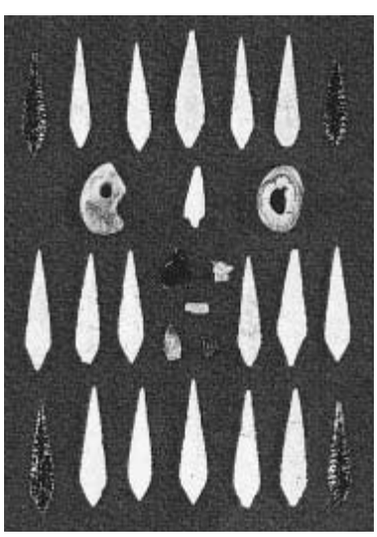
人骨の出土例はないが、土坑墓と甕棺墓が発見されているので時期ごとに見ていくこととする。

前期では、尾上町教育委員会が昭和57年に調査した五輪野遺跡から甕棺墓が1基検出されている。この遺跡では、このほかに同様の甕棺が以前の道路工事中に掘り出されている。これらは、いずれも頸部と胴部の境目及び胴部に平行線文と2列の点列文が施文された大型甕に縄文施文土器が被せられた状態で埋設されているものである。(7)

弘前市宇田野(2)遺跡は、平成6年から翌年まで当センターが発掘調査を行い、5基の土坑墓を検出した。平面形は、いずれも長楕円形である。遺物出土状況として坑底直上から石鏃28点（黒曜石が80%）が出土した第１号土坑墓が注目される。また、底面に近い層からベンガラが認められた土坑墓が２基あった。この遺跡は、大石川左岸の低い丘陵地の南側に傾斜する緩斜面地であるが、さらに南側の谷間には、前期初頭の捨て場が認められた。

中期では、青森県立郷土館が昭和50年～52年・62年に発掘調査した三厩村宇鉄遺跡から11基の土坑墓と4基の甕棺墓が検出されている。この遺跡は、元宇鉄川河口右岸の標高約20ｍの段丘上にあり、墓は平坦地のほぼ中央部分から検出されている。土坑墓の平面形は円形が2基、楕円形が9基で、甕棺は土坑内に斜位に2個埋設されているものと正立位に1個入っているものがある。土坑墓内から、恵山型式に見られる熊の意匠を表した把手付カップ形土器や底の丸いボール形土器及び靴形石箆・石銛などが出土しているものもある。一方、北陸産の翡翠製丸玉や碧玉製管玉が出土する土坑墓や甕棺墓もある。356個の管玉と翡翠製丸玉1個出土した第14号土坑墓が特記される。(8)

川内町板子塚遺跡は、平成4年に当センターが発掘調査をして多くの土坑墓が検出された。土坑内から石鏃が12点以上出土するものがあり、最も多く出土した第8号土坑墓は特記される。この土坑墓の平面形は長方形で規模が226㎝×198㎝で、遺物は石鏃１３４点、環状赤色顔料1点、黒曜石剥片1点、翡翠製勾玉1点、凝灰岩製玉1点、土器片7点、鉄小片及び板状石が出土している。ほかの土坑墓も長方形が多く、不整六角形、不整方形、楕円形もみられる。この遺跡の立地は、川内川下流域左岸の標高28ｍ～30ｍの場所で、土坑墓は緩斜面に群を成して構築されている。



**川内町板子塚遺跡第８号土坑墓出土遺物**

以上のほか、土坑墓が田舎館村垂柳遺跡や尾上町五輪野遺跡から検出され、甕棺墓が尾上町丑盛(9)（五輪野遺跡内）と平賀町大光寺新城跡から検出されている。(10)

後期では、六ヶ所村千歳(13)遺跡から1基検出されている。この遺跡は、下北半島の付け根部で低平な丘陵が続く場所にある。墓は、標高82ｍほどの場所で、丘陵上の端に近い所から検出された。土坑墓は長楕円形で、堆積土は人為的で、上の層から天王山式に相当

する鉢形土器が倒立状態で出土している。

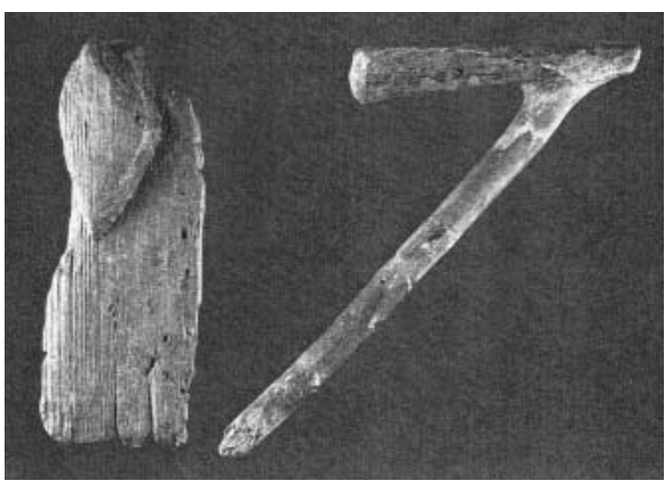
**生産遺構**

水田跡が、前期の弘前市砂沢遺跡、中期の田舎館村垂柳遺跡から検出されている。

砂沢遺跡は、岩木川下流域左岸の微高地で、標高15ｍ～20ｍの場所にある。検出された水田跡は、断片的なものが多く全体を知り得たものは2号水田跡だけである。この平面形状は、長方形で長辺15.4ｍ、短辺5.24ｍ、面積が81.27㎡である。畦畔の幅や高さは、場所によって異なるが幅40㎝～215㎝、高さ2.3㎝～29.4㎝、深さ17㎝～29㎝、大きい溝では幅75㎝～155㎝、深さ27㎝～72㎝である。出土遺物は、砂沢式土器や遠賀川系土器及び土偶・土版、石器や石製品などがある。ほかには炭化米や種子も出土している。

垂柳遺跡は、浅瀬石川左岸微高地のほぼ平坦な場所に立地している。水田の規模は14㎡が最大級で、11㎡、9㎡、4㎡にまとまりが見られ平均約8㎡である。形状は方形に近い長方形が多く、扇形を呈するものも若干ある。昭和58年までに656枚の水田跡が検出されているが、それ以降も田舎館村教育委員会で範囲確認調査を続行し[11]、当センターでも平成7年に広域農道予定地を発掘調査し、検出枚数はさらに増えている。これまで出土した遺物は、多量の田舎館式土器や石器、各種木製品（鍬、石斧の柄、漆塗盾状製品、柄杓、発火具等）、琥珀製臼玉、管玉などである。石器は、石鏃、石錐、磨製石斧、凹石、磨石などが出土し、また石核や剥片も出土している。磨製石斧は、縦斧と横斧に区別できる。縦斧が両面凸刃（蛤刃）で、横斧が扁平な片刃である。また、木製柄杓の柄先端には動物（熊）の顔が彫刻されている。

**田舎館村垂柳遺跡の水田跡**



**田舎館村垂柳遺跡出土の木製品**

（青森県埋蔵文化財調査センター次長）

# 奈良・平安時代

中 嶋 友 文

当センターがこの20年間に、調査した奈良・平安時代の遺跡は、奈良時代が約40遺跡、平安時代が約130遺跡、特に八戸市周辺地域と青森市から弘前市にかけての津軽地域に多く見られる。

時期的には八戸市周辺地域は奈良から平安時代前半の調査例が多いのに比べ津軽地域はどちらかといえば平安時代が中心であり、青森県において八戸市周辺地域と津軽地域は土師器文化の波及に相違があったと考えられる。以下簡単に遺構と遺物に分けて記載する。

**遺構**

古代の遺跡から検出される遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡、溝跡、環濠、土塁、土坑（土壙)、炭窯、製鉄炉、鍛冶場、焼成（土坑）遺構、道路跡、畠跡、須恵器窯跡などがあげられる。

**・奈良時代**

７世紀から８世紀の集落としてセンターが調査した遺跡は八戸市周辺地域が多く、八戸市鶉窪遺跡・弥次郎窪遺跡(間仕切りと考えられる床溝(根太？)をもつ竪穴住居跡)・櫛引遺跡・丹内遺跡(７世紀前葉の竪穴住居跡)、下田町中野平遺跡・向山遺跡、南部町前比良遺跡、六戸町堀切沢(3)遺跡などがある。その他の地域として三沢市小田内沼(1)遺跡、十和田市大和田遺跡のほか、下北半島の東通村銅屋(3)遺跡、大間町小奥戸(2)遺跡、浅瀬石川流域の尾上町李平下安原遺跡などがあげられ、この時代の遺跡は県内において地域的な偏りがみられる。

**・平安時代**

９世紀から10世紀の集落は県内に広く分布し、六ヶ所村発茶沢遺跡では、竪穴住居跡が完全に埋まりきらずにくぼみとして確認され、東通村アイヌ野遺跡でも埋まりきらない竪穴住居跡とその周囲に土手状の盛り土が認められている。また、この時期の遺構の堆積土から十和田ａ火山灰（Ｔｏ-ａ）や苫小牧 - 白頭山火山灰（B-Ｔｍ）が検出されることが多く、この2種類の火山灰は10世紀前半に降下した考えられ、本県の平安時代の鍵層とされている。

調査した遺跡を地域別にみると八戸市では、和野前山遺跡・売場遺跡・松館遺跡・丹内遺跡などが調査され、櫛引遺跡では奈良時代から平安時代の竪穴住居跡が53軒検出されている。隣接する下田町では、下谷地(1)遺跡や中野平遺跡が調査され、中野平遺跡でも奈良時代から平安時代前半の竪穴住居跡48軒、竪穴遺構24基、掘立建物跡20棟のほか円形周溝5基検出されている。六戸町長谷遺跡では竪穴住居跡のほかに土器埋設遺構（土師器壷１、須恵器甕１・壷２）が検出されている。南郷村砂子遺跡では､9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡49軒が調査されている｡小川原湖周辺の六ヶ所村では、沖附(1)遺跡で竪穴住居跡37軒のうち、3軒が竪穴周辺に盛土（周提）が確認され周提下層にB-Tmが堆積し､7軒が斜面に構築する際に低い方に土盛りをしている｡家ノ前遺跡でも周提が確認されている。そのほかに弥栄平(4)・(5)遺跡、発茶沢(1)遺跡、上尾駮(1)遺跡、上尾駮(2)遺跡、唐貝地遺跡などが調査され、上尾駮(2)遺跡では、土器埋設遺構（土師器の甕の上に須恵器系の壷を埋設）が検出している。

青森市では、数多くの竪穴住居跡が調査され、特に朝日山遺跡（朝日山(2)・(3)遺跡を含む）が201軒、新町野遺跡が31軒、野木遺跡が377軒[1]検出している。そのほか三内丸山(2)遺跡、安田(2)遺跡、山下遺跡などでも平安時代の竪穴住居跡が検出されている。浪岡町でも山本遺跡、山元(2)遺跡、山元(3)遺跡、松山遺跡、羽黒平(1)、野尻(1)遺跡、野尻(2)遺跡、野尻(3)遺跡、野尻(4)遺跡、平野遺跡、高屋敷館遺跡などの平安時代の遺跡が調査され、合わせて400軒を超える竪穴住居跡を検出し、その多くが掘立柱建物跡や外周溝を伴うものである。また、10世紀後半の集落として、野尻(4)遺跡や高屋敷館遺跡のように土塁や環濠で集落を囲んでいるものもみられる。尾上町李平下安原遺跡では奈良時代末期から平安時代前半にかけての竪穴住居跡が142軒、五輪野遺跡が53軒のほか、常盤村水木館遺跡、弘前市独狐遺跡・茶毘館遺跡・尾上山(3)遺跡・宇田野(2)遺跡、五所川原市実吉遺跡、隠川(3)遺跡・隠川(4)遺跡・隠川(12)・隈無(2)遺跡などが調査され、いずれも平安時代の集落である。

青森市野木・新町野遺跡

鰺ヶ沢町杢沢遺跡では、10世紀後半から11世紀前半の竪穴住居跡のほか製鉄関連の遺構が、外馬屋前田(1)遺跡や深浦町津山遺跡などでも竪穴住居跡を検出している。

浪岡町高屋敷館遺跡

一般的に竪穴住居跡の形態はカマドを持つものが普通であるが、カマドや柱穴を持たないものもみられ、掘立柱建物と合わせた数軒を一つの家族（生計を共にする）が所有していたと考えられる。その中で近年検出されることが多くなった建物跡には3種類存在し、①竪穴住居跡＋外周溝、②竪穴住居跡＋掘立柱建物跡、③竪穴住居跡＋掘立柱建物跡＋外周溝の3種類が存在する。建物跡が検出された主な遺跡として六ヶ所村発茶沢(1)遺跡、浪岡町山本遺跡・山元(2)遺跡・山元(3)遺跡・羽黒平(1)遺跡・野尻(1)遺跡・野尻(2)遺跡・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡・隠川(3)遺跡、青森市朝日山(3)遺跡・山下遺跡、弘前市宇田野(2)遺跡などが調査されている。用途について意見が分かれるが、とりあえず掘立柱建物跡は倉庫や作業場、外周溝は排水施設と考えられる。[2]

青森市朝日山遺跡

野木遺跡では、多くの竪穴住居跡の中に唯一柱穴を持たず礎石と考えられる礫が設置されている竪穴住居跡が検出されている。礎石を持つ竪穴住居跡は東北地方では初の検出例で、おもに中部地方にみられ、その地方との関連が考えられる。

竪穴住居跡に伴う施設として、上尾駮(1)遺跡で竪穴住居跡の西側に張り出しの施設、宇田野(2)遺跡から竪穴住居跡から出入り口のスロープ状の施設が検出されている。

また、野木遺跡・隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡からは、竪穴住居跡の床面から土器製作に用いたピット（ロクロピット）が検出され、遺跡内から方形で壁面や底面が焼成を受けている土坑（焼成遺構）も検出され、野木遺跡（青森市教育委員会調査）[(3)]では、焼成前と考えられる土師器も出土している。さらに出土した土師器と遺跡内の粘土の胎土分析（蛍光Ｘ線）を行った結果、成分構成が一致する土師器もみられることから、遺跡内で土師器の製作が行われていたと考えられる。

そのほか野木遺跡では、土坑の周りに溝と柱穴をもつ便所遺構や幾つかの竪穴住居跡を囲む柵跡、溝状に硬化面を持つ道路跡、硬化面が段上に確認された階段状遺構などが検出されている。近年道路跡などの検出例が増加している。

井戸跡の検出されている遺跡は、浪岡町隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡・山元(2)遺跡、青森市朝日山(2)遺跡などがあり、幾つかの井戸跡からＢ-Ｔｍ火山灰の堆積がみられることから９世紀代の井戸跡と考えられる。一般的に井戸跡の検出例は少なく、沢や河川を利用していたと思われ、青森市野木遺跡では沢筋に水場が作られ木枠のほか排水のための水路などが検出されている。

鉄の生産（製鉄）は、燃料の豊富な岩木山麓を中心に鉄生産（精錬）が始まり、大規模な生産拠点として発展し、鉄の量産体制とあわせて加工（鍛冶）技術も急速に広まり、農具・工具など多くの道具が鉄製に変わり、生産体制に大きな変化をもたらしたと考えられる。主な遺跡として浪岡町山本遺跡では、2基の製鉄炉検出され第１次精錬が平安時代に津軽地方に伝わっていたと推定された。六ヶ所村上尾駮(2)遺跡では、鉄を加工した鍛冶場遺構が、鰺ヶ沢町の杢沢遺跡では、製鉄炉跡34基、鍛冶場跡3基、炭窯3基など古代の鉄生産を具体的に知る上で良好な資料となっている。そのほかに浪岡町山元(2)遺跡・羽黒平(1)遺跡・高屋敷館遺跡、鰺ヶ沢町外馬屋前田(1)遺跡、青森市朝日山遺跡・新町野遺跡・野木遺跡などでも鉄関連の遺構が検出されている。

畠跡と思われる遺構は五所川原市隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡、浪岡町山元(2)遺跡のほか青森市野木遺跡・朝日山(2)遺跡でも検出されている。畠跡の確認は、畝間に火山灰などが堆積している場合を除いて難しく検出例は少ない。畠跡から栽培されている作物の特定は難しいが、遺構内から出土している炭化種子は、イネ、コムギ、オオムギ、マメ類などがあげられる。

東北北部にみられる円形周溝は、中野平遺跡、野尻(2)遺跡、野尻(3)遺跡などで調査されたが、遺体を埋葬したと考えられる主体部は検出されていない。一般的な平安時代の土坑墓の検出例は少なく、県内で人骨が出土した遺跡は李平下安原遺跡と八戸市殿見遺跡ぐらいである。李平下安原遺跡の31基の土坑墓のうち第61号土坑から古代の人骨が出土しているがアイヌ的要素は認められないという。また、ウマ・ヤギ・ウシの獣骨も出土しており古代の家畜を考える上で貴重な資料である。いずれにしても、面的な調査例が少ないため墓域が集落内なのか集落外なのかは不明である。また、上尾駮(2)遺跡、長谷遺跡、野尻(1)遺跡から土器埋設遺構が検出されているが用途等については不明であり、今後の発掘事例が期待される。

**・遺物**

古代の遺跡から出土する遺物は土師器と須恵器のほか木器（漆器）・鉄製品・銅製品・土製品・木

製品・石製品などがあげられる。

土師器は縄文土器と同様に野焼き（焼成遺構で焼かれる例もある）によって焼かれ、器種として坏、甕、高坏、壷、甑、堝（なべ）、耳皿など日常の食生活で使用される物が多く、形の変化や製作技法から年代や地域的な特徴を把握することができる。特に砂底の甕や堝などは時期的・地域的な特徴をもっている。また、火山灰の堆積した竪穴住居跡からの出土遺物は編年上の資料とされることが多く、アイヌ野遺跡や朝日山遺跡などから好資料が出土している。その他に高屋敷館遺跡の片口土器や内耳土器、中野平遺跡・山元(3)遺跡・野木遺跡などからの北陸型甕、山元(3)遺跡の須恵器模倣の双耳壷なども興味深い資料であり、陸奥湾に面した遺跡を中心に製塩土器も出土している。

須恵器は登窯などで焼かれ、器種として甕、壷、坏などがあり、おもに南から搬入されていたが、９世紀ごろから五所川原産須恵器が主体を占めるようになる。弥栄平(4)・(5)遺跡の竪穴住居跡から出土した須恵器の胎土分析の結果では、加賀南部・秋田・山形・能登半島・五所川原などで生産されたと推定され、日本海沿岸を中心に各地から搬入されており、海上交通路などの問題が指摘されている。また、土師器に文字（墨書）、須恵器には文字や記号（刻書）が記されたものも出土し、その関わりも議論されている。[(4)]

土製品は土鈴、土玉、勾玉など祭祀的遺物のほか、土製の錘や紡錘車などが出土している。李平下安原遺跡から勾玉と土製紡錘車、発茶沢(1)遺跡・杢沢遺跡から土錘、羽黒平(1)遺跡・野尻(2)遺跡から土鈴が、山元(2)遺跡からは土鈴が46点も出土しており興味深い。野木遺跡から土玉と勾玉、高屋敷館遺跡から土鈴と土玉などが出土している。野尻(4)遺跡では、土玉と勾玉8個がカマドに隣接した床面から出土し、カマド神の信仰に関連する可能性が考えられる。

鉄製品は鍛冶技術の普及に伴い刀子、鉄鏃のほか鍬・鋤・鎌・斧・鉋（かんな）・鑿（のみ）・釘・紡錘車・芋引金・釣針などの農具や工具等が出土している。李平下安原遺跡・野木遺跡・高屋敷館遺跡からの錫杖（しゃくじょう）状鉄製品や五輪野遺跡の鐃（にょう）・柄香炉などの仏具が出土している。また、高屋敷館遺跡から銅椀破片と自在鈎状の銅製品、野木遺跡からの銅椀破片も特筆できると遺物と思われる。

木製品は木器・曲物・箸のほか、菰槌（こもつち）・下駄、櫛などがみられる。和野前山遺跡の木器の皿、高屋敷館遺跡の菰槌・竪杵・漆椀、李平下安原遺跡の櫛などのほか、野木遺跡では、木器・曲物・箸・菰槌、ロクロ回転台の回転盤が[(5)]出土している。

そのほかの遺物として、丹内遺跡からは7世紀前葉の竪穴住居跡から琥珀塊と破片が4点、新町野遺跡からは石製帯飾具（丸鞆）などが出土している。また、発茶沢(1)遺跡から炭化米とトチの実、李平下安原遺跡から麻の種子・米・大麦・スモモ・オニグルミ・トチの実、山元(2)遺跡から米・小麦・アワ等、野木遺跡から米、小麦・大麦・豆類などの食料の他、山元(3)遺跡では漆皮の残片なども出土している。

以上、簡単に遺構と遺物について記載したが、この20年の調査から古代の生活が徐々に明らかになってきており、さらに今後の発掘調査につなげてほしいと思っている。

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護総括主査）

# 中 世 ・ 近 世

平 山 明 寿

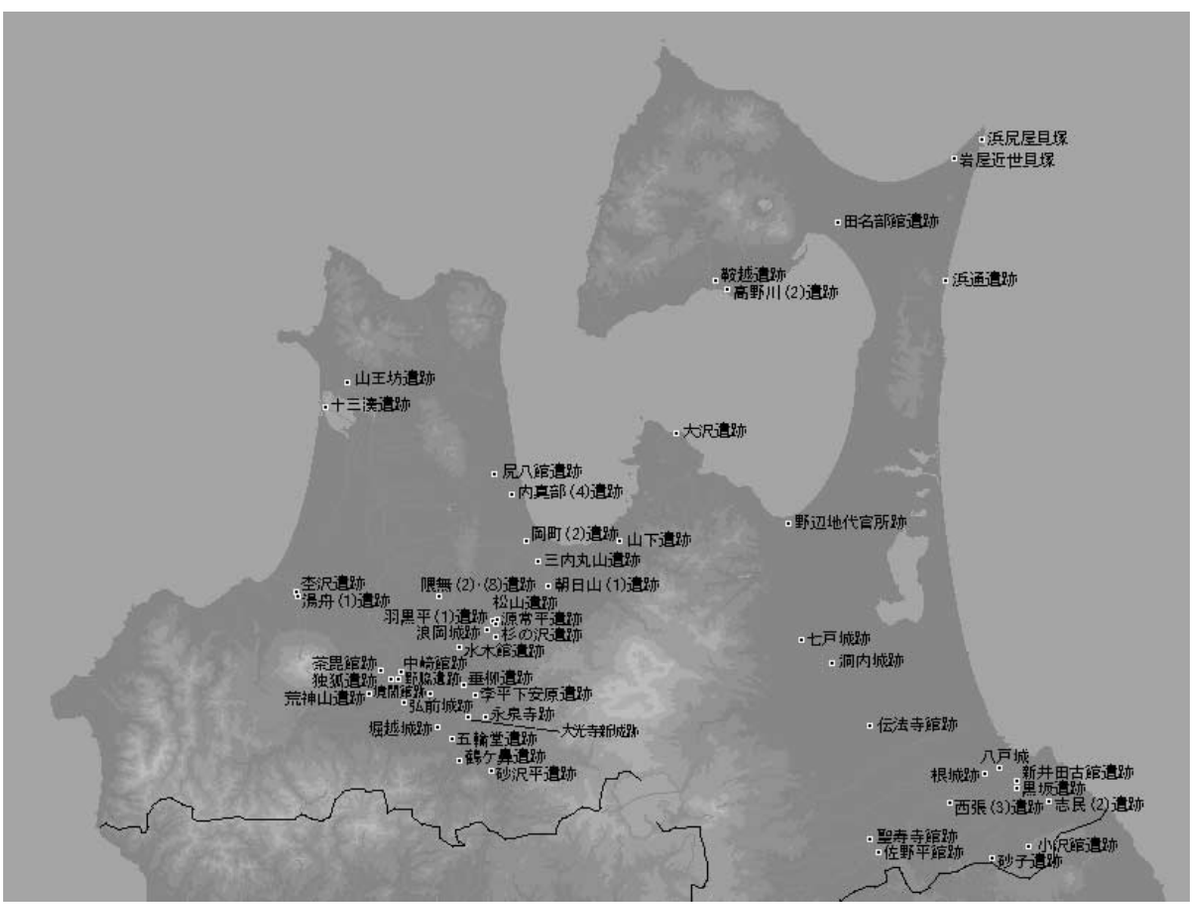
## はじめに

中世・近世という時代は、東北の歴史の中でも近年、注目されつつある時代でもある。文献資料の新しい分析によって、今まで見えなかった歴史の側面が明らかにされつつあるが、考古資料ではどうであろうか。ここでは、12世紀～16世紀を中世、17世紀～19世紀中頃までを近世として、以下の①～③に主題を絞ってまとめてみたい。

①城館・集落・都市

②墓制と信仰

①生産と流通




遺 跡 一 覧

## 中 世

①城館・集落・都市

たいていの人が、中世の遺跡と聞いて思い浮かべるのは城館遺跡でないだろうか。遺跡・遺構が目に見える数少ない例であるとともに、この時期の調査の主流でもある。また、地域の象徴的な存在といった側面もあるのかもしれない。

当センターで調査した城館は、南部地域では階上町小沢館跡・十和田市伝法寺館跡・十和田市洞内城跡・南部町佐野平館跡・むつ市田名部館跡がある。また、津軽地域では弘前市中崎館跡・弘前市境関館跡・青森市内真部（４）遺跡・弘前市茶毘館跡・弘前市独狐遺跡・大鰐町砂沢平遺跡・浪岡町源常平遺跡がある。地形的な特徴もあるが、南部地方の調査例では山城が多く、津軽では居館・平城が多い。また、自然地形を利用した小さな館の集合体で、曲輪規模が大きく、戦時と日常の両方の性格を併せ持った「館屋敷型」のものが多い[注1]。城館の外側は堀・土塁・溝といった遺構が巡り、内側は掘建柱建物跡・竪穴遺構・土坑・井戸・カマド状遺構といった遺構や、ときには切り通しや平場といった整地痕跡も検出される。センターの調査例の他にも、各市町村教育委員会などによって、青森市尻八館跡[注2]・浪岡町浪岡城跡[注3]・八戸市根城跡[注4]・弘前市堀越城跡[注5]・七戸町七戸城跡[注6]・南部町聖寿寺館跡[注7]・平賀町大光寺新城跡[注8]・川内町鞍越遺跡[注9]などの城館が調査されている。

集落遺跡は、東通村浜通遺跡・川内町高野川（２）遺跡・青森市朝日山（１）遺跡などが調査されている。浜通遺跡は16世紀後半～17世紀初頭の短期間しか営まれなかった集落である。高野川（２）遺跡からは、15世紀後半頃の寝殿造りの系統に属する住宅建築が、朝日山（１）遺跡からは四面庇の掘建柱建物跡が検出されている。尾上町李平下安原遺跡・浪岡町杉の沢遺跡・弘前市野脇遺跡・青森市岡町（２）遺跡などからも、中世の溝や井戸が検出されているので、これらも集落の一部と思われる。また、遺構は検出されていないが、田舎館村垂柳遺跡では中世の堆積層が確認されている。

都市は、安藤氏の拠点と考えられる市浦村十三湊遺跡[注10]が調査されている。この遺跡からは、居館や港湾施設などの他に、中軸街路を中心に町屋が並ぶ都市配置が検出されている。

②墓制と信仰

墓の形態には、土坑墓と塚墓がある。土坑墓は、平賀町五輪堂遺跡・浜通遺跡・十三湊遺跡などから検出されている。土坑墓は、そのほとんどが土葬と思われている。ただ、五輪堂遺跡では火葬骨が納められていた。また、浜通遺跡では土坑墓の底面が焼けていた。これは、荼毘に附した遺体をそのまま埋葬したものと考えられることから、埋葬方法にも種類があることが窺われる。また、根城跡などからは、いわゆる「鉢かむり」の土坑墓が検出されている。なお、瀬戸四耳壺など、骨臓器と思われる陶器が出土しているが[注11]、伝世品がほとんどで埋葬形態は不明である。塚墓と思われる塚は、岩木町荒神山遺跡[注12]で100基近く検出されているが、全てが墓でなく、一部、供養や信仰的な塚の可能性も指摘されている。

調査で見つかった石造物には、板碑が境関館跡・茶毘館跡・大鰐町鶴ヶ鼻遺跡から、五輪塔が尾上町永泉寺遺跡から出土している。板碑は境関館跡では井戸、茶毘館跡では溝の中から出土し、鶴ヶ鼻遺跡では近世墓の墓標に転用されていた。

寺院跡の可能性のある遺構には、市浦村山王坊跡[注13]の建物跡が指摘されている。

宗教道具は、根城・浪岡城・大光寺新城から金剛杵などが出土している。また境関館跡から銅鋺が入子状になって検出された。

一括出土銭は津軽地域から数多く検出されているが、発掘調査されたのは浪岡城跡など数例である。

③生産と流通

竪穴遺構は、根城跡・浪岡城跡といった城館遺跡から特に多く検出されており、鞴の羽口や坩堝・小札などが出土する例が多いことから、工房や貯蔵施設といった用途が考えられている。カマド状遺

構は境関館遺跡・浪岡町羽黒平（１）遺跡・青森市山下遺跡などで検出されている。境関館遺跡では129基と特に多く検出されており、屋外に設けられた厨房施設と考えられている。その他に、畝状遺構が十三湊遺跡から、アワビ漁を主体とした貝塚が東通村浜尻屋貝塚[注14]から、道路跡が浪岡町松山遺跡から検出されている。この道跡は、旧大豆坂道と部分的に重なっている。

県内の陶磁器の出土様相は工藤清泰氏によって指摘されている[注15]。下駄や木椀といった木製品は、独狐遺跡のように井戸から出土する例が多い。そのほかに注目される遺物は、火縄銃の火挟みが浪岡城跡・聖寿寺館跡から、茶臼が尻八館跡・根城跡・浪岡城跡から、煙管が浜通遺跡などから出土している。また、アイヌ遺物である矢の中柄が浪岡城跡・浜尻野貝塚・聖寿寺館跡から出土している。

## 近　世

①城館・集落・都市

この時期の遺跡や遺構は調査される機会が少ないため、詳細が分からないものが多い。特に建物跡は検出例が少ないのが実状である。

調査された城館は、弘前市弘前城跡[注16]・八戸市八戸城跡[注17]がある。また、野辺地代官所跡も調査されているが[注18]、主体となる建物跡は検出されていない。

集落跡は、農村集落が野脇遺跡・五所川原市隈無（８）遺跡で調査されている。特に隈無（８）遺跡は下の切街道沿いに面した農村集落として注目される。内真部（４）遺跡・常盤村水木館跡・青森市三内丸山遺跡・伝法寺館跡・岡町（２）遺跡からもこの時期の土坑や溝が検出されている。これらの遺跡では、建物跡が検出されていないが、集落の一部と考えたい。

この時期の都市の調査例は残念ながらないが、一港町と変化した十三湊遺跡から、建物跡や井戸などが検出されている。

②墓制と信仰

近世の墓は、検出数の割に報告例が少ない。鶴ヶ鼻遺跡はその数少ない例の一つである。これは宿川原を見下ろす高台に位置した火葬墓群で、集落の共同墓地と思われる。また、火葬場跡は、五所川原市隈無（２）遺跡・七戸城跡から検出されている。土葬墓の検出例は階上町志民（２）遺跡・八戸市新井田古館遺跡[注19]などがある。新井田古館遺跡ではアイヌ的特徴を持った人骨が検出されている。このような例は、太平洋側の遺跡から数例見つかっているだけである。

宗教施設は、神社の社殿と思われる建物跡が杉の沢遺跡から検出されている。これは、絵図に描かれた勝先沢のお宮と思われる。寺院跡の調査例は弘前城周辺で多い[注20]。なお、宗教遺物は、燭台が永泉寺跡から出土している。

③生産と流通

地方窯製品は、悪戸焼や蟹沢焼などの操業が知られるが[注21]、調査例が乏しいため不明な点が多い。ただ、瓦を生産した窯が八戸市黒坂遺跡から検出されている。炭窯は鰺ヶ沢町杢沢遺跡などから、製塩の窯跡が平内町大沢遺跡[注22]から、また、畝状遺構が十三湊遺跡・南郷村砂子遺跡などから検出されている。李平下安原遺跡の溝群も畑跡の可能性がある。道路跡は、松山遺跡や鰺ヶ沢町湯舟（１）遺跡から、水利関係の施設と思われる樋状遺構が野脇遺跡から検出されている。福地村西張（３）遺跡からは、溝跡に沿ってピット群が検出されており、牧場の柵列と思われる。その他にも、長崎俵物のアワ

ビを採取していた東通村岩屋近世貝塚[注23]が知られる。

特記される遺物として、コンプラ瓶の破片が田名部館跡から、焼塩壺が弘前城と八戸城から出土している。また、離頭銛・骨銛・蝦夷刀・アイヌ玉といったアイヌ的遺物が、下北半島から太平洋沿岸にかけての地域から出土している[注24]。表面採集されたものも多いが、これらの遺物から、本州アイヌの存在が指摘されているが、その集落の調査例ははまだない。

## さいごに

中世・近世遺跡の調査例は残念ながらまだ少ない。そのため、文献資料に乏しい青森のこの時代の歴史は断片でしか窺うこしかできなが、今後の課題を三つ挙げて、全体をまとめてみたい。

Ⅰ.「なにをもって中世・近世とするか？」

ここでは便宜上中世を12世紀からとした。しかし、古代と中世の画期は、県内の考古資料ではまだ定まっていないのが実状である。これは、古代の土器編年がまだ確立していないこと、特に古代末期の遺跡の調査例が少なく、中世との連続性を追えないことや、中世遺跡の調査は城郭が多く、遺跡の性格が偏っているためである。近世も同様で、一般集落の調査が少なく、在地土器による編年が進んでいない。特に、地方窯の調査例がない。

また、ここでは敢えて年代や時代区分をしなかったが、最新の陶磁器研究の成果を使うことで、報告書の時期が変化する可能性がある。

Ⅱ.「南部・津軽・下北の差は？」

史跡整備による城館発掘はさかんな一方で、下北地域や沖積地に位置する遺跡の調査例が少ないといった、調査される遺跡・地域・地形に偏りが見られるため、特定の地域での連続性を追えない。県全体の復元も難しい。また、遺跡間の差違が認められても、それが地域差・年代差・性格差のどれかが分かりづらいものになっている。

Ⅲ.「江戸時代だから？」

近世の記録・記載例が少なく、遺物も肥前系磁器・寛永通寶・泥面子くらいで終始してしまう。遺構の年代も「近世以降」と漠然とした表記になりがちである。報告書のページ数の制約があるからといって、近世だから調査する必要もない・茶碗なんて報告しなくてもよいなどという考えは、すべきではない。青森でも磁器のことを「せともの」と呼んでいるが、近世末に出現した瀬戸・美濃系磁器が、どのような流通経路を辿って入って来たのだろうか。また、文献では津軽や夏泊、下北半島で本州アイヌ集落の存在が確認されているが、その形成や特徴、日本人との関係はどうなのだろうか。近世もまだまだ解らないことが多いのである。

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）

図には、カシミール３Ｄと国土地理院刊行の数値地図を使用しました。

## 引用・参考文献

【旧石器時代】
岩本義雄　1979　「青森県における縄文文化以前の文化に関する研究史」　『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
　青森県立郷土館調査報告第５集
大湯卓二他　1993　「幸畑(7)遺跡Ⅱ」『家ノ前・幸畑(7)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第148集
大湯卓二　2000　「第２編　木造町丸山遺跡」『東北町長者久保遺跡　木造町丸山遺跡』青森県立郷土館調査報告第44集
岡田康博他　1985　『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
葛西励他　1983　『太子森遺跡発掘調査報告書』　平賀町埋蔵文化財報告書第14集
川口潤　1988　「樋状剥離を有する尖頭器の再検討」　『旧石器考古学』36
川口潤　1989　「樋状剥離を有する尖頭器雑感」　『長野県考古学会誌』59・60
小泊村史編纂委員会1995　「後期旧石器時代終末期から縄文時代草創期の小泊村海底遺跡」　『小泊村史　上巻』
桜田隆・石岡憲雄　1978　「先土器時代の遺物、先土器時代の小結」　『青森市三内遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
谷口康浩・川口潤　1999　「調査成果の総括と問題提起」　『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』　大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団
辻誠一郎他　1978　「津軽半島西海岸の第四系に関する新知見」　『日大文理学部研究紀要』13
畠山　昇・小笠原幸範他　1982　『山崎遺跡(1)(2)(3)発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
福田友之　1998　「旧石器時代の津軽地方」　『五所川原市史通史編１』
福田友之　1990　「津軽海峡の先史文化交流」　『伊藤信雄先生追悼考古学古代史論攷』
町田洋他　1992　『火山灰アトラス』　東京大学出版会
三宅徹也　1981　『大平山元Ⅱ遺跡』　青森県立郷土館調査報告第８集
三宅徹也　1981　『大平山元Ⅲ遺跡』　青森県立郷土館調査報告第11集
三宅徹也他　1982　『発茶沢遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
山口航生　2000　『旧石器時代の出土遺物』　『隠川(２)外遺跡発掘調査報告書』　五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集
横山裕平　1992　『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　蟹田町教育委員会

【縄文時代草創期】
（１）大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団編　1999　『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査－旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求』
（２）青森県立郷土館　2000　『東北町長者久保遺跡』青森県立郷土館調査報告 第44集 考古－12
（３）縄文時代研究会　1990～2000　『縄文時代』１～11
（４）階上町教育委員　2000　『滝端遺跡発掘調査報告書』
（５）弘前市教育委員会　1996　『独狐遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
（６）八戸市教育委員会　1997　『是川中居遺跡』　八戸市埋蔵文化財報告書第82集
※県内の草創期関連の文献については、(2)で福田氏がまとめられている。

【縄文時代早期】
（１）八戸市教育委員会　1982　『長七谷地遺跡発掘調査報告書　長七谷地２・７・８号遺跡』
（２）長尾正義　1987　『 根井沼(1)遺跡発掘調査報告書』三沢市教育委員会
（３）八戸市教育委員会　1989　『赤御堂遺跡』
（４）村木　淳　1990　『見立山(2)遺跡』　八戸市教育委員会
（５）村木　淳　1998　『見立山(2)遺跡Ⅱ』　八戸市教育委員会
（６）藤田俊雄　1999　『館平遺跡』　八戸市教育委員会
（７）葛城和穂ほか　1999「北日本における縄文時代の墓制」南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会
（８）中村 大・宮尾 亨 2000「埋葬方法の類型とその配置から見た縄文社会」『史跡三内丸山遺跡　年報』３ 青森県教育委員会
（９）小笠原善範　1986　『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　鳥木沢遺跡』　八戸市教育委員会
（10）名久井文明　1988「北日本縄文式早期吹切沢式系統の後半期編年」『先史考古学研究』第１号　阿佐ヶ谷先史学研究会
（11）中村哲也　1998　『西張(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第233集　青森県教育委員会
（12）中村哲也・坂本真弓1998「青森県の縄文早期住居跡集成」　『研究紀要』　青森県埋蔵文化財調査センター

【縄文時代前期】
（1）青森県教育委員会　1985　『表館遺跡Ⅱ発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第91集
（2）青森県教育委員会　1985　『売場遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
（3）青森県教育委員会　1986　『表館遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第95集
（4）青森県教育委員会　1988　『上尾駮（1）遺跡C地区発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第113集
（5）青森県教育委員会　1988　『上尾駮（2）遺跡（Ⅰ）』　青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
（6）青森県教育委員会　1991　『鬼沢猿沢・尾上山(2)・(3)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第135集
（7）青森県教育委員会　1992　『鳴沢遺跡・鶴喰（9）遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第142集
（8）青森県教育委員会　1992　『沢堀込遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
（9）青森県教育委員会　1994　『三内丸山（2）遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
（10）青森県教育委員会　1994　『畑内遺跡Ⅰ発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第161集
（11）青森県教育委員会　1995　『畑内遺跡Ⅱ発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第178集
（12）青森県教育委員会　1995　『熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
（13）青森県教育委員会　1997　『畑内遺跡Ⅳ発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
（14）青森県教育委員会　1997　『津山遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
（15）青森県教育委員会　1998　『三内丸山遺跡Ⅹ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第250集
（16）青森県教育委員会　1999　『畑内遺跡Ⅴ発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
（17）青森県教育委員会　2000　『新町野遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第275集
（18）青森県教育委員会　2000　『三内丸山遺跡ⅩⅤ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第283集
（19）青森県立郷土館　1995　『木造町田小屋野貝塚』　青森県立郷土館調査報告第35集　考古－10
（20）上北町教育委員会　1983　『上北町古屋敷貝塚・Ⅰ』　上北町文化財調査報告書第１集
（21）上北町教育委員会　1986　『上北町古屋敷貝塚・Ⅱ』　上北町文化財調査報告書第２集
（22）野辺地町教育委員会　1996　『柴崎（1）遺跡』　野辺地町文化財調査報告書第５集
（23）十和田市教育委員会　1984　『明戸遺跡発掘調査報告書』　十和田市埋蔵文化財発掘調査報告第３集
（24）東通村教育委員会　1985　『石持納屋遺跡発掘調査報告書』

【縄文中期】
（1）成田　滋彦　1997「円筒土器文化圏の葬制－富ノ沢(2)遺跡の再検討」『史跡三内丸山遺跡年報』１　青森県教育委員会
（2）中村　大・宮尾　亨　2000　「埋葬方法の類型とその配置から見た縄文社会」『史跡三内丸山遺跡年報』３　青森県教育委員会
（3）十和田市教育委員会　1984　『明戸遺跡発掘調査報告書』十和田市埋蔵文化財調査報告書第３集
（4）八戸市教育委員会　1996　『松ヶ崎遺跡第２次C地点』　八戸内遺跡発掘調査報告書８　八戸市埋蔵文化財調査報告書弟65集

【縄文時代後期】
（1）青森県教育委員会　1975　『近野遺跡調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
青森県教育委員会　1977　『近野遺跡調査報告書Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
（2）青森県教育委員会　1977　『水木沢遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
（3）青森県教育委員会　1980　『神明町遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第58集
（4）青森県教育委員会　1982　『馬場瀬(1)・(2)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第 70集
（5）青森県教育委員会　1984　『韮窪遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
（6）青森県教育委員会　1984　『牛ケ沢(3)遺跡遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第 86集
（7）青森県教育委員会　1985　『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書　第89集
（8）青森県教育委員会　1989　『二ツ石遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第117集
（9）青森県教育委員会　1985　『大石平発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
青森県教育委員会　1986　『大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
青森県教育委員会　1987　『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
（10）青森県教育委員会　1988　『上尾駮(2)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
（11）成田滋彦　1999　「異形土器　切断蓋付土器ー出土土器と器形を考えるー」　『研究紀要』４号　青森県埋蔵文化財調査センター

(12) 青森県教育委員会　1993　『野場(5)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
(13) 青森県教育委員会　1998　『幸畑(1)・(4)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第236集
(14) 笠井新也　1921　「陸奥国発見の石器時代の墳墓について」　『考古学雑誌』第９巻第２号
(15) 喜田貞吉　1934　「青森県出土の洗骨土器」　『歴史地理』第63巻第６号
(16) 葛西励　1983　「縄文時代中期・後期・晩期(葬製の変遷)」　『青森県の考古学』　青森大学出版局
(17) 小片保・森本岩太郎・江坂輝弥　1971　「青森県表館発見の縄文文化後期初頭の甕棺と人骨」　『考古学ジャナール』NO63
(18) 青森県教育委員会　1986　『弥栄平(1)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第98集
(19) 青森県教育委員会　1981　『鷹架遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
(20) 青森県教育委員会　1984　『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第79集
(21) 青森県教育委員会　1987　『弥栄平(4)・(5)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第106集
(22) 青森市教育委員会　1996　『小牧野遺跡発掘調査報告書』　青森市埋蔵文化財調査報告書第30集
(23) 青森県教育委員会　1986　『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
(24) 八戸市教育委員会　1991　『風張(1)遺跡』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
　　八戸市教育委員会　1991　『風張(1)遺跡Ⅱ』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
(25) 注(10)と同じ
(26) 注(9)と同じ
(27) 注(20)と同じ
(28) 注(11)と同じ
(29) 今井富士夫・磯崎正彦　1968　「十腰内遺跡」　『岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』　岩木山刊行会
(30) 青森県教育委員会　1984　『弥栄平(2)遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
(31) 注(23)と同じ
(32) 注(９)と同じ
(33) 注(24)と同じ

【縄文時代晩期】
(１) 青森県埋蔵文化財調査センター　1982　『右エ門次郎窪遺跡・三合山遺跡・石ノ窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集
(２) 青森県埋蔵文化財調査センター　1983　『鴨平(２)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
(３) 青森県埋蔵文化財調査センター　1984　『牛ヶ沢(３)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
(４) 青森県埋蔵文化財調査センター　1985　『石ノ窪(１)・石ノ窪(２)・古宮遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第92集
(５) 青森県埋蔵文化財調査センター　1986　『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第95集
(６) 青森県教育委員会　1988　『上尾駮(１)遺跡Ｃ地区発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集
(７) 青森県教育委員会　1992　『沢堀込遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
(８) 青森県埋蔵文化財調査センター　1993　『野脇遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第149集
(９) 青森県埋蔵文化財調査センター　1993　『朝日山遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第152集
(10) 青森県埋蔵文化財調査センター　1994　『朝日山遺跡Ⅲ　第一分冊　朝日山(１)遺跡－遺物編』青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
(11) 青森県埋蔵文化財調査センター　1995　『千苅(１)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第174集
(12) 青森県埋蔵文化財調査センター　1995　『泉山遺跡発掘調査報告書(第２・３分冊)』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集
(13) 青森県埋蔵文化財調査センター　1996　『泉山遺跡発掘調査報告書Ⅲ(第４分冊)』青森県埋蔵文化財調査報告書第190集
(14) 青森県埋蔵文化財調査センター　1998　『水吉遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第245集
(15) 青森県埋蔵文化財調査センター　1999　『十腰内(１)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第261集
(16) 青森県立郷土館　1984　『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告第17集・考古-６
(17) 青森県立郷土館　1988　『名川町剣吉荒町遺跡(第２地区)発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第22集・考古-７
(18) 青森県立郷土館　1997　『馬渕川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告第40集・考古-11

(19) 八戸市教育委員会　1988　『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集
(20) 早稲田大学文学部考古学研究室　1991　『縄文沼遺跡発掘調査報告書』小泊村文化財調査報告第２集
(21) 横浜町教育委員会　1983　『桧木遺跡発掘調査報告書』
(22) 十和田市教育委員会　1984　『明戸遺跡発掘調査報告書』十和田市埋蔵文化財発掘調査報告第３集
(23) 五所川原市教育委員会　1984～1992　『観音林遺跡』五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第７～15集
(24) 青森市教育委員会　1985　『長森遺跡発掘調査報告書』
(25) 三厩村教育委員会　1996　『宇鉄遺跡発掘調査報告書(第１分冊)・(第２分冊)』
(26) 八戸市教育委員会　1999　『是川中居遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第82集
(27) 階上町教育委員会　2000　『滝端遺跡発掘調査報告書』
(28) 新谷　武・岡田康博　1986　「青森県平舘村今津遺跡出土の鬲状三足土器」『考古学雑誌』第71巻第２号
(29) 福田友之　1988　「鼻曲り土面考」『青森県立郷土館調査研究年報』第12号
(30) 福田友之　1990　「本州北端の硬玉(翡翠)製玉飾り」『青森県考古学』第５号
(31) 安　志敏　1990　「江南文化和古代的日本」『考古』第４期　北京・科学出版社
(32) 福田友之　1991　「津軽半島今津遺跡の鬲状三足土器」『青森県考古学』第６号
(33) 安　志敏　1995　「記日本出土的鬲形陶器」『考古』第５期　北京・科学出版社
(34) 菊池徹夫・岡内三眞・高橋龍三郎 1997 「青森県虚空蔵遺跡出土土器の共同研究」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第42輯・第４分冊

【弥生時代】
(１) 村越　潔・成田誠治　1982「青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡の水田跡」日本考古学協会研究発表要旨
(２) 市川金丸・木村鐵次郎　1984「青森県松石橋遺跡から出土した弥生時代前期の土器」『考古学雑誌』第69巻第3号　日本考古学会
(３) 弘前市教育委員会　1988『砂沢遺跡発掘調査報告書』
(４) 伊東信雄・須藤　隆　1982『瀬野遺跡』東北考古学会
(５) 八戸市教育委員会　1992『八幡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第47集
(６) 八戸市教育委員会　1991『風張(１)遺跡Ⅱ発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
(７) 尾上町教育委員会　1983『五輪野遺跡発掘調査報告書』調査報告書第４集　考古－４
(８) 青森県立郷土館　1979『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第６集・考古－３
(９) 尾上町教育委員会　1983『丑盛の調査』調査報告書第５集　考古－５
(10) 平賀町教育委員会　2000『大光寺新城跡遺跡』平賀町埋蔵文化財調査報告書第27集
(11) 田舎館村教育委員会　1989『垂柳遺跡－範囲確認調査報告書－』垂柳遺跡緊急調査報告書（第三年次）

【古代　奈良・平安時代】
(１) 新町野遺跡と野木遺跡は青森市教育委員会でも発掘調査を実施しており、遺跡内の竪穴住居跡の軒数はさらに多くなる。
(２) 竪穴住居跡と掘立柱建物跡と外周溝を伴う建物跡は時期的に9世紀後半から10世紀前半に限られ、津軽地域北半、青森市周辺、上北地域に分布する。
(３) 青森市埋蔵文化財調査報告書第41集野木遺跡発掘調査概報では「土器を焼いた際の失敗品」と記載してある。
(４) 特に「夷」についての解釈や地域性についていろいろな意見がある。
(５)「蹴ロクロ」のロクロ回転盤で県内初の出土品、径24㎝、厚さ3.5㎝、材質はクリ材である。

【中・近世】
(１) 千田嘉博ほか　1993『城郭調査ハンドブック』新人物往来社
(２) 青森県立郷土館　1981『尻八館調査報告書』青森県立郷土館調査報告第９集
(３) 浪岡町教育委員会　1980『浪岡城跡』Ⅱ
浪岡町教育委員会　1989『昭和63年度史跡浪岡城跡環境整備報告書』Ⅰなど
(４) 八戸市教育委員会　1993『根城－本丸の発掘調査－』八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集など
(５) 弘前市教育委員会　2000『史跡　津軽氏城跡　堀越城跡発掘調査報告書Ⅰ』など
(６) 七戸町教育委員会　1996『史跡　七戸城跡北館Ⅴ』七戸町埋蔵文化財調査報告書第14集など

（７）南部町教育委員会　1995『聖寿寺館跡発掘調査報告書Ⅰ』南部町埋蔵文化財調査報告書第2集など
（８）平賀町教育委員会　1999『大光寺新城跡遺跡－第4･5次発掘調査－』平賀町埋蔵文化財調査報告書第24集など
（９）川内町教育委員会　1996『鞍越遺跡発掘調査報告書』など
（10）青森県教育委員会　1998『十三湊遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第248集など
（11）工藤清泰　1995「中世・近世」『新編　弘前市史　資料編1－1　考古編』など
（12）岩木町教育委員会　1981『荒神山遺跡発掘調査報告書』
（13）市浦村教育委員会・山王坊跡調査団　1987『山王坊跡』北方日本海の中世宗教遺跡研究　第1集
（14）東通村教育委員会　1999「浜尻屋貝塚」『東通村史－遺跡発掘調査報告書編－』
（15）工藤清泰　1995「中世・近世」『新編　弘前市史　資料編1－1　考古編』など
（16）弘前市教育委員会　2000『史跡津軽氏城跡（弘前城跡）弘前城北の郭発掘調査概報Ⅰ』など
（17）八戸市教育委員会　1998『八戸城跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第76集など
（18）野辺地町教育委員会　1995「野辺地代官所跡」『野辺地町内遺跡発掘調査報告書』野辺地町文化財調査報告書第４集
（19）八戸市教育委員会　1997『新居田古館遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第70集など
（20）弘前市教育委員会　1998『津軽山革秀寺庭園遺跡発掘調査報告書』など
（21）国立歴史民俗博物館　1997『近世窯業遺跡データ集成』国立歴史民俗博物館研究報告第73集など
（22）青森県教育委員会　1998『白砂・大沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第246集
（23）東通村教育委員会　1999「岩屋近世貝塚」『東通村史－遺跡発掘調査報告書編－』
（24）工藤竹久　1997「本州北部の中・近世アイヌ関連遺跡」『考古学ジャーナル』425

# 埋蔵文化財調査センター20年の歩み

## 昭和５５年度

【組織】

所長　北山　峰一郎
次長　古井　睦夫

総務課
課長　古井　睦夫
主任主査　高谷　重彰
主事　成田　静男
技能技師　成田　明彦

調査第一課
課長　新谷　武
主査　一町田　工
主査　三宅　徹也
主査　大瀬　秀男
主事　三浦　圭介
主事　畠山　昇
主事　白鳥　文雄

調査第二課
課長　山田　洋一
主査　鈴木　賢二
主事　福田　友之
主事　遠藤　正夫
主事　成田　滋彦

調査第三課
課長　工藤　泰博
主査　北林　八洲晴
主査　春日　信興
主事　工藤　大
主事　相馬　信吉

## 昭和５６年度

【組織】

所長　北山　峰一郎
次長　古井　睦夫

総務課
課長　古井　睦夫
主任主査　高谷　重彰
主事　成田　静男
主事　藤川　正紀
技能技師　葛西　敏悦
技能技師　成田　明彦

調査第一課
課長　新谷　武
主査　一町田　工
主査　大瀬　秀男
主事　三浦　圭介
主事　福田　友之
主事　畠山　昇

調査第二課
課長　山田　洋一
主査　三宅　徹也
主査　遠藤　正夫
主事　成田　滋彦
主事　白鳥　文雄
主事　岡田　康博

調査第三課
課長　工藤　泰博
主査　北林　八洲晴
主査　春日　信興
主事　工藤　大
主事　相馬　信吉

## 昭和５７年度

【組織】

所長　工藤　泰典
次長　古井　睦夫

総務課
課長　森内　四郎
主査　成田　静男
主事　藤川　正紀
技能技師　葛西　敏悦

調査第一課
課長　新谷　武
主任主査　一町田　工
主査　大瀬　秀男
主査　遠藤　正夫
主事　三浦　圭介
主事　畠山　昇
主事　成田　滋彦

調査第二課
課長　山田　洋一
主任主査　成田　誠治
主査　三宅　徹也
主事　白鳥　文雄
主事　岡田　康博

調査第三課
課長　工藤　泰博
主査　北林　八洲晴
主査　春日　信興
主事　工藤　大
主事　坂本　洋一

## 昭和５８年度

【組織】

所長　工藤　泰典
次長　古井　睦夫

総務課
課長　森内　四郎
主事　唐牛　孝一
主事　藤川　正紀
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　新谷　武
主任主査　一町田　工
主査　大瀬　秀男
主査　遠藤　正夫
主査　三浦　圭介
主事　畠山　昇
主事　岡田　康博

調査第二課
課長　山田　洋一
主任主査　成田　誠治
主査　三宅　徹也
主事　白鳥　文雄
主事　坂本　洋一

調査第三課
課長　工藤　泰博
主任主査　北林　八洲晴
主査　春日　信興
主事　工藤　大
主事　成田　滋彦

## 昭和５９年度

【組織】

所長　工藤　泰典
次長　須藤　昭二

総務課
課長　舘浦　善清
主事　唐牛　孝一
主事　藤川　正紀
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　新谷　武
主査　遠藤　正夫
主査　三浦　圭介
主事　畠山　昇
主事　赤平　智尚
主事　岡田　康博

調査第二課
課長　山田　洋一
主査　三宅　徹也
主事　工藤　大
主事　白鳥　文雄
主事　一条　秀雄

調査第三課
課長　工藤　泰博
主任主査　北林　八洲晴
主任主査　成田　誠治
主査　成田　滋彦
主事　坂本　洋一

## 昭和６０年度

【組織】

所長　三橋　時男
次長　須藤　昭二

総務課
課長　舘浦　善清
主事　唐牛　孝一
主事　藤川　正紀
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　新谷　武
主査　遠藤　正夫
主査　三浦　圭介
主事　畠山　昇
主事　赤平　智尚
主事　一条　秀雄

調査第二課
課長　山田　洋一
主査　三宅　徹也
主事　工藤　大
主事　白鳥　文雄
主事　坂本　洋一

調査第三課
課長　工藤　泰博
主任主査　北林　八洲晴
主任主査　成田　誠治
主査　成田　滋彦
主事　岡田　康博

## 昭和６１年度

【組織】

所長　三橋　時男
次長　須藤　昭二

総務課
課長　舘浦　善清
主査　杉田　守
主事　唐牛　孝一
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　新谷　武
総括主査　三浦　圭介
主事　畠山　昇
主事　赤平　智尚
主事　一条　秀雄

調査第二課
課長　天間　勝也
主幹　三宅　徹也
総括主査　遠藤　正夫
主事　坂本　洋一
主事　岡田　康博

調査第三課
課長　市川　金丸
主幹　北林　八洲晴
総括主査　山口　義伸
主査　成田　滋彦
主事　白鳥　文雄
主事　奈良　昌毅

## 昭和６２年度

【組織】

所長　三橋　時男
次長　須藤　昭二

総務課
課長　舘浦　善清
主査　杉田　守
主事　原田　豊則
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　市川　金丸
総括主査　三浦　圭介
主査　赤平　智尚
主事　畠山　昇
主事　長崎　勝巳

調査第二課
課長　天間　勝也
主幹　三宅　徹也
主幹　遠藤　正夫
主事　白鳥　文雄
主事　坂本　洋一
主事　石戸谷　悟

調査第三課
課長　北林　八洲晴
総括主査　山口　義伸
主査　成田　滋彦
主事　奈良　昌毅
主事　岡田　康博

## 昭和６３年度

【組織】

所長　三橋　時男
次長　太田　春樹

総務課
課長　中村　正則
主査　杉田　守
主事　原田　豊則
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　市川　金丸
主幹　三浦　圭介
主査　赤平　智尚
主事　坂本　洋一
主事　石戸谷　悟
主事　三浦　孝仁

調査第二課
課長　北林　八洲晴
主幹　遠藤　正夫
総括主査　山口　義伸
主事　白鳥　文雄
主事　岡田　康博

調査第三課
課長　三宅　徹也
総括主査　成田　滋彦
主事　畠山　昇
主事　奈良　昌毅
主事　長崎　勝巳

**平成元年度**

**【組織】**

所長　須藤　昭二
次長　太田　春樹
総務課
課長　中村　正則
総括主査　滝沢　昭雄
主査　原田　豊則
技能技師　張山　良二
調査第一課
課長　市川　金丸
主幹　三浦　圭介
主事　坂本　洋一
主事　奈良　昌毅
主事　石戸谷　悟
主事　羽柴　直人
調査第二課
課長　北林　八洲晴
主幹　遠藤　正夫
主幹　山口　義伸
主査　白鳥　文雄
主事　岡田　康博
調査第三課
課長　三宅　徹也
総括主査　成田　滋彦
主査　畠山　昇
主事　長崎　勝巳
主事　三浦　孝仁

**平成２年度**

**【組織】**

所長　須藤　昭二
次長　太田　春樹
総務課
課長　三浦　達男
総括主査　滝沢　昭雄
主査　原田　豊則
技能技師　張山　良二
調査第一課
課長　市川　金丸
主幹　三浦　圭介
主査　奈良　昌毅
主事　岡田　康博
主事　長瀬　昇
主事　羽柴　直人
調査第二課
課長　北林　八洲晴
総括主査　成田　滋彦
主査　白鳥　文雄
主事　中嶋　友文
主事　成田　悟
調査第三課
課長　鈴木　克彦
主査　畠山　昇
主査　坂本　洋一
主事　長崎　勝巳
主事　三浦　孝仁

**平成３年度**

**【組織】**

所長　柿崎　日出夫
次長　森内　四郎
総務課
課長　浅田　耕一
総括主査　滝沢　昭雄
主査　原田　豊則
技能技師　張山　良二
調査第一課
課長　北林　八洲晴
主査　白鳥　文雄
主査　岡田　康博
主事　下山　信昭
主事　羽柴　直人
主事　木村　高
調査第二課
課長　三浦　圭介
主幹　大湯　卓二
主幹　成田　滋彦
主事　中嶋　友文
主事　長瀬　昇
調査第三課
課長　鈴木　克彦
主査　畠山　昇
主事　長崎　勝巳
主事　三浦　孝仁
主事　成田　悟

## 平成４年度

【組織】

所長　柿崎　日出夫
次長　森田　房明

総務課
課長　浅田　耕一
総括主査　滝沢　昭雄
主査　佐藤　浩
技能技師　張山　良二

調査第一課
課長　北林　八洲晴
主査　白鳥　文雄
主事　中嶋　友文
主事　新岡　厳
主事　成田　悟
主事　下山　信昭
主事　木村　高
主事　小舘　孝浩

調査第二課
課長　三浦　圭介
主幹　成田　滋彦
主査　岡田　康博
主事　三浦　孝仁
主事　長瀬　昇
主事　阿部　美杉
主事　小笠原　雅行

調査第三課
課長　鈴木　克彦
主幹　大湯　卓二
総括主査　木村　鐵次郎
主査　畠山　昇
主査　伊藤　昭雄
主事　増尾　知彦
主事　工藤　直樹

## 平成５年度

【組織】

所長　柿崎　日出夫
次長　森田　房明

総務課
課長　成田　静男
主査　佐藤　浩
主査　田中　博
主事　黒滝　雅信
技能技師　高坂　金二

調査第一課
課長　北林　八洲晴
総括主査　白鳥　文雄
主事　中嶋　友文
主事　太田　秀文
主事　川口　潤
主事　木村　高
主事　小舘　孝浩

調査第二課
課長　三浦　圭介
主幹　大湯　卓二
主事　笹森　一朗
主事　増尾　知彦
主事　小田川　哲彦
主事　齋藤　岳
主事　神　康夫

調査第三課
課長　鈴木　克彦
総括主査　木村　鐵次郎
総括主査　畠山　昇
主査　伊藤　昭雄
主査　新岡　厳
主事　下山　信昭
主事　相澤　治

調査第四課
課長　成田　滋彦
主査　岡田　康博
主事　成田　悟
主事　長瀬　昇
主事　阿部　美杉
主事　工藤　直樹
主事　木村　真明
主事　小笠原　雅行
主事　中村　哲也

**平成６年度**

**【組織】**

所長　阿部　五十夫
次長　佐藤　良治
総務課
課長　今　　進
総括主査　佐藤　浩
主査　田中　博
主事　黒滝　雅信
技能技師　高坂　金二
調査第一課
課長　北林　八洲晴
総括主査　木村　鐵次郎
主査　伊藤　昭雄
主事　笹森　一朗
主事　川口　潤
主事　下山　信昭
主事　水谷　和憲
主事　七戸　将光
主事　田澤　賢治
調査第二課
課長　三浦　圭介
主幹　大湯　卓二
総括主査　白鳥　文雄
主事　増尾　知彦
主事　小舘　孝浩
主事　山内　実
主事　神　康夫
調査第三課
課長　鈴木　克彦
総括主査　畠山　昇
主査　新岡　厳
主事　小田川　哲彦
主事　木村　高
主事　相澤　治
主事　太田原　慶子
調査第四課
課長　成田　滋彦
主査　岡田　康博
主事　上野　茂樹
主事　木村　真明
主事　長瀬　昇
主事　阿部　美杉
主事　齋藤　岳
主事　工藤　直樹
主事　内海　剛
主事　中村　哲也
主事　小笠原　雅行
主事　秦　光次郎

**平成７年度**

**【組織】**

所長　阿部　五十夫
次長　佐藤　良治
総務課
課長　今　　進
主幹　田野　浩二
主査　田中　博
主事　黒滝　雅信
技能技師　高坂　金二
調査第一課
課長　北林　八洲晴
主幹　木村　鐵次郎
主査　新岡　厳
主事　相澤　治
主事　木村　高
主事　水谷　和憲
主事　田澤　賢治
主事　赤羽　真由美
調査第二課
課長　鈴木　克彦
総括主査　畠山　昇
主査　伊藤　昭雄
主査　奈良岡　淳
主事　川口　潤
主事　中村　哲也
主事　神　康夫
主事　太田原　慶子
調査第三課
課長　成田　滋彦
主査　中嶋　友文
主事　木村　真明
主事　小田川　哲彦
主事　秦　光次郎
主事　中村　博文
主事　内海　剛

主事　鈴木　和子
主事　田中　珠美
調査第四課
課長　大湯　卓二
総括主査　白鳥　文雄
主査　下山　信昭
主事　笹森　一朗
主事　七戸　将光
主事　山内　実

**平成８年度**

**【組織】**
所長　中島　邦夫
次長　佐藤　良治
総務課
課長　今　　進
主幹　工藤　伸一
主査　黒滝　雅信
主事　小鹿　奈緒美
技能技師　高坂　金二
調査第一課
課長　成田　誠治
主幹　白鳥　文雄
主査　中嶋　友文
主事　水谷　和憲
主事　工藤　由美子
主事　秦　光次郎
主事　神　康夫
主事　田中　珠美
主事　坂本　真弓
調査第二課
課長　鈴木　克彦
主幹　畠山　昇
主査　奈良岡　淳
主事　川口　潤
主事　山内　実
主事　中村　哲也
主事　赤羽　真由美
主事　平山　明寿
主事　野村　信生
調査第三課
課長　大湯　卓二
総括主査　伊藤　昭雄
主事　小田川　哲彦
主事　相澤　治
主事　田澤　賢治
主事　新山　隆男
主事　杉野森　淳子
調査第四課
課長　木村　鐵次郎
主幹　工藤　大
主事　笹森　一朗
主事　木村　高
主事　中村　博文
主事　三林　健一
主事　茅野　嘉雄

**平成９年度**

**【組織】**

所長　中島　邦夫
次長　成田　誠治
総務課
課長　成田　孝夫
主幹　工藤　伸一
主査　黒滝　雅信
主事　飯田　奈緒美
技能技師　高坂　金二
調査第一課
課長　成田　誠治
主査　奈良岡　淳
主査　中嶋　友文
主査　太田原　潤
主事　齋藤　由美子
主事　田中　珠美
主事　野村　信生
調査第二課
課長　鈴木　克彦
主幹　畠山　昇
主幹　工藤　大
主事　中村　哲也
主事　神　康夫
主事　工藤　由美子
主事　赤羽　真由美
主事　杉野森　淳子
主事　佐藤　智生
調査第三課
課長　大湯　卓二
主幹　白鳥　文雄
主事　相馬　良仁
主事　小田川　哲彦
主事　新山　隆男
主事　坂本　真弓
主事　平山　明寿
主事　小山　浩平
調査第四課
課長　木村　鐵次郎
主事　笹森　一朗
主事　木村　高
主事　秦　光次郎
主事　中村　博文
主事　佐々木　雅裕
主事　三林　健一
主事　茅野　嘉雄

**平成10年度**

**【組織】**

所長　中島　邦夫
次長　成田　誠治
総務課
課長　成田　孝夫
主幹　工藤　伸一
総括主査　奈良　敏弘
主事　飯田　奈緒美
技能技師　佐々木　豊吉
調査第一課
課長　成田　誠治
文化財保護主幹　櫻井　有一
文化財保護総括主査　中嶋　友文
文化財保護主査　笹森　一朗
文化財保護主査　太田原　潤
文化財保護主査　相馬　良仁
文化財保護主事　工藤　由美子
文化財保護主事　齋藤　由美子
文化財保護主事　赤羽　真由美
文化財保護主事　野村　信生
文化財保護主事　浅田　智晴
調査第二課
課長　福田　友之
文化財保護主事　木村　高
文化財保護主事　中村　哲也
文化財保護主事　新山　隆男
文化財保護主事　平山　明寿
文化財保護主事　小山　浩平
文化財保護主事　佐藤　智生
文化財保護主事　永嶋　豊
文化財保護主事　齋藤　正
調査第三課
課長　木村　鐵次郎
文化財保護主幹　相馬　信吉
文化財保護主査　小田川　哲彦

文化財保護主事　下山　純子
文化財保護主事　神　康夫
文化財保護主事　佐々木雅裕
文化財保護主事　杉野森淳子
文化財保護主事　坂本　真弓
文化財保護主事　田中　珠美
文化財保護主事　三林　健一
文化財保護主事　茅野　嘉雄

資料課
課長　成田　滋彦
文化財保護主幹　畠山　昇
文化財保護主幹　白鳥　文雄

**平成11年度**

**【組織】**
所長　中島　邦夫
次長　成田　誠治

総務課
課長　成田　孝夫
総括主査　奈良　敏弘
主査　工藤　將人
主事　飯田　奈緒美
技能技師　佐々木　豊吉

調査第一課
課長　成田　誠治
文化財保護主幹　畠山　昇
文化財保護総括主査　中嶋　友文
文化財保護主査　笹森　一朗
文化財保護主査　太田原　潤
文化財保護主事　齋藤由美子
文化財保護主事　神　康夫
文化財保護主事　竹内　誠司
文化財保護主事　齋藤　正
文化財保護主事　野村　信生

調査第二課
課長　福田　友之
文化財保護主査　小田川哲彦
文化財保護主事　中村　哲也
文化財保護主事　工藤由美子
文化財保護主事　下山　純子
文化財保護主事　赤羽真由美
文化財保護主事　田中　珠美
文化財保護主事　杉野森淳子
文化財保護主事　平山　明寿
文化財保護主事　永嶋　豊

調査第三課
課長　木村　鐵次郎
文化財保護主幹　櫻井　有一
文化財保護主査　相馬　良仁
文化財保護主査　木村　高
文化財保護主事　佐々木雅裕
文化財保護主事　坂本　真弓
文化財保護主事　茅野　嘉雄
文化財保護主事　小山　浩平
文化財保護主事　佐藤　智生
文化財保護主事　浅田　智晴

資料課
課長　成田　滋彦
文化財保護主幹　相馬　信吉
文化財保護主幹　白鳥　文雄

**平成12年度**

**【組織】**

所長　中島　邦夫
次長　成田　誠治
総務課
課長　西口　良一
総括主査　奈良　敏弘
主査　工藤　將人
主事　飯田　奈緒美
技能技師　佐々木　豊吉
調査第一課
課長　成田　誠治
文化財保護主幹　畠山　昇
文化財保護総括主査　太田原　潤
文化財保護主査　笹森　一朗
文化財保護主査　上野　茂樹
文化財保護主事　赤羽　真由美
文化財保護主事　坂本　真弓
文化財保護主事　茅野　嘉雄
文化財保護主事　齋藤　正
調査第二課
課長　福田　友之
文化財保護主幹　櫻井　有一
文化財保護総括主査　中嶋　友文
文化財保護主事　中村　哲也
文化財保護主事　齋藤　由美子
文化財保護主事　竹内　誠司
文化財保護主事　佐々木　雅裕
文化財保護主事　田中　珠美
文化財保護主事　平山　明寿
文化財保護主事　永嶋　豊
文化財保護主事　葛城　和穂
調査第三課
課長　木村　鐵次郎
文化財保護主査　小田川　哲彦
文化財保護主査　木村　高
文化財保護主事　工藤　由美子
文化財保護主事　下山　純子
文化財保護主事　杉野森　淳子
文化財保護主事　野村　信生
文化財保護主事　横岡　利彦
文化財保護主事　浅田　智晴
文化財保護主事　小山　浩平
文化財保護主事　佐藤　智生
資料課
課長　成田　滋彦
文化財保護主幹　相馬　信吉
文化財保護主幹　白鳥　文雄

# 発 掘 調 査 一 覧

**昭和５５年度**

・三合山遺跡（南郷村）
・右エ門次郎窪遺跡（南郷村）
・石ノ窪(1)遺跡（南郷村）
・馬場瀬(1)遺跡（南郷村）
・馬場瀬(2)遺跡（南郷村）
・発茶沢(1)遺跡（六ケ所村）
・発茶沢(2)遺跡（六ヶ所村）
・山崎遺跡（今別町）

**昭和５６年度**

・鴨平(1)遺跡（八戸市）
・鴨平(2)遺跡（八戸市）
・昼巻沢遺跡（福地村）
・長者森遺跡（八戸市）
・白山平(2)遺跡（八戸市）
・銅屋(1)遺跡（東通村）
・前坂下(13)遺跡（東通村）
・南通遺跡（東通村）
・和野前山遺跡（八戸市）
・山崎遺跡（今別町）
・鶉窪遺跡（八戸市）
・槻ノ木遺跡（野辺地町）
・陣馬川原遺跡（野辺地町）
・松原遺跡（上北町）
・大タルミ遺跡（八戸市）

**昭和５７年度**

・売場遺跡（八戸市）
・大タルミ遺跡（八戸市）
・一ノ渡遺跡（黒石市）
・韮窪遺跡（八戸市）
・昼巻沢遺跡（八戸市）
・牛ケ沢(3)遺跡（八戸市）
・白山平(2)遺跡（八戸市）
・浜通遺跡（東通村）
・弥栄平(2)遺跡（六ヶ所村）
・垂柳遺跡（田舎館村）

**昭和５８年度**

・大石平(1)遺跡（六ヶ所村）
・古宮遺跡（八戸市）
・石ノ窪(1)遺跡（南郷村）
・石ノ窪(2)遺跡（南郷村）
・尻高(2)遺跡（平舘村）
・尻高(3)遺跡（平舘村）
・尻高(4)遺跡（平舘村）
・表館遺跡（六ヶ所村）
・独狐遺跡（弘前市）
・垂柳遺跡（田舎館村）

**昭和５９年度**

・間沢遺跡（平舘村）
・今津遺跡（平舘村）
・売場遺跡（八戸市）
・境関館遺跡（弘前市）
・大石平(1)遺跡（六ヶ所村）
・大石平(2)遺跡（六ヶ所村）
・沖附(1)遺跡（六ヶ所村）
・沖附(2)遺跡（六ヶ所村）
・独狐遺跡（弘前市）
・山本遺跡（浪岡町）
・大湊近川（むつ市）
・弥栄平(1)遺跡（六ケ所村）

**昭和６０年度**

・大石平(1)遺跡－ AB 地区（六ケ所村）
・大石平(1)遺跡－ C 地区（六ケ所村）
・大石平(1)遺跡－ D 地区（六ケ所村）
・弥栄平(4)遺跡（六ケ所村）

・上尾駮(2)遺跡－A地区（六ケ所村）
・上尾駮(2)遺跡－B地区（六ケ所村）
・発茶沢遺跡（六ケ所村）
・境関館遺跡（弘前市）
・大湊近川遺跡（むつ市）
・下谷地(1)遺跡（下田町）
・茶毘館遺跡（弘前市）
・山本遺跡（浪岡町）

**昭和６１年度**

・上尾駮(1)遺跡－A地区（六ケ所村）
・上尾駮(2)遺跡－A地区（六ケ所村）
・上尾駮(2)遺跡－B地区（六ケ所村）
・上尾駮(2)遺跡－C地区（六ケ所村）
・前比良遺跡（南部町）
・下谷地遺跡（下田町）
・小田内沼(1)遺跡（三沢市）
・李平下安原遺跡（尾上町）
・茶毘館遺跡（弘前市）

**昭和６２年度**

・表館(1)遺跡（六ヶ所村）
・発茶沢(1)遺跡（六ヶ所村）
・富ノ沢(1)遺跡（六ヶ所村）
・富ノ沢(2)遺跡（六ヶ所村）
・二ツ石遺跡（今別町）
・杢沢遺跡（鰺ヶ沢町）
・館野遺跡（福地村）

**昭和６３年度**

・表館(1)-Ｂ遺跡（六ヶ所村）
・発茶沢(1)遺跡（六ヶ所村）
・幸畑(7)遺跡（六ヶ所村）
・中崎館遺跡（弘前市）
・下タ沢遺跡（三沢市）
・杢沢遺跡（鰺ヶ沢町）
・富ノ沢(1)遺跡（六ヶ所村）
・富ノ沢(2)遺跡（六ヶ所村）
・弥次郎窪遺跡（八戸市）

**平成元年度**

・西山遺跡（福地村）
・雷遺跡（福地村）
・中野平遺跡（下田町）
・向山(4)遺跡（下田町）
・鬼沢猿沢遺跡（弘前市）
・尾上山(2)遺跡（弘前市）
・尾上山(3)遺跡（弘前市）
・富ノ沢(1)遺跡（六ヶ所村）
・富ノ沢(2)遺跡（六ヶ所村）
・富ノ沢(3)遺跡（六ヶ所村）

**平成２年度**

・堀切沢(2)遺跡（六戸町）
・堀切沢(3)遺跡（六戸町）
・堀切沢(4)遺跡（六戸町）
・堀切沢(5)遺跡（六戸町）
・家ノ前遺跡（六ヶ所村）
・朝日山遺跡（青森市）
・富ノ沢(2)遺跡（六ヶ所村）
・鳴沢遺跡（鰺ヶ沢町）
・鶴喰(9)遺跡（森田村）

**平成３年度**

・筋久辺遺跡（南郷村）
・野場(5)遺跡（階上町）
・高野川(2)遺跡（川内町）
・熊ケ平遺跡（川内町）
・泉山遺跡（三戸町）
・家ノ前遺跡（六ヶ所村）
・幸畑(7)遺跡（六ヶ所村）
・野脇遺跡（弘前市）
・朝日山遺跡（青森市）

**平成４年度**

・朝日山遺跡（青森市）
・三内丸山(2)遺跡（青森市）
・内真部(4)遺跡（青森市）
・山元(3)遺跡（浪岡町）
・家ノ前遺跡（六ヶ所村）
・幸畑(7)遺跡（六ヶ所村）
・泉山遺跡（三戸町）
・畑内遺跡（南郷村）
・板子塚遺跡（川内町）
・熊ケ平(1)遺跡（川内町）
・高野川(3)遺跡（川内町）

**平成５年度**

・朝日山遺跡（青森市）
・三内丸山(2)遺跡（青森市）
・千苅(1)遺跡（金木町）
・日渡遺跡（名川町）
・野尻(2)遺跡（浪岡町）
・山元(2)遺跡（浪岡町）
・松山遺跡（浪岡町）
・羽黒平(1)遺跡（浪岡町）
・水木館遺跡（常盤村）
・畑内遺跡（南郷村）
・家ノ前遺跡（六ヶ所村）
・鷹架遺跡（六ヶ所村）
・黒森下(1)遺跡（黒石市）
・森田(4)遺跡（弘前市）
・森田(5)遺跡（弘前市）
・湯舟(1)遺跡（鰺ヶ沢町）
・湯舟(2)遺跡（鰺ヶ沢町）
・槻ノ木(1)遺跡（野辺地町）
・上蛇沢(2)遺跡（五戸町）
・高野川(3)遺跡（川内町）
・熊ケ平遺跡（川内町）

**平成６年度**

・三内丸山(2)遺跡（青森市）
・近野遺跡（青森市）
・高屋敷館遺跡（浪岡町）
・野尻(2)遺跡（浪岡町）
・野尻(3)遺跡（浪岡町）
・野尻(4)遺跡（浪岡町）
・大平(5)遺跡（鰺ヶ沢町）
・平野遺跡（浪岡町）
・白砂遺跡（大間町）
・佐野平館遺跡（南部町）
・上蛇沢(1)遺跡（五戸町）
・羽黒平(1)遺跡（浪岡町）
・野尻(2)遺跡（浪岡町）
・水木館遺跡（常盤村）
・洞内遺跡（十和田市）
・宇田野(2)遺跡（弘前市）
・戸沢川代遺跡（川内町）
・泉山遺跡（三戸町）
・草薙(1)遺跡（弘前市）
・湯ケ森(2)遺跡（弘前市）
・四ツ役遺跡（南郷村）
・西張(3)遺跡（福地村）
・上田遺跡（七戸町）
・畑内遺跡（南郷村）

**平成７年度**

・津山遺跡（深浦町）
・垂柳遺跡（田舎館村）
・八盃久保(2)遺跡（倉石村）
・隈無(2)遺跡（五所川原市）
・隈無(4)遺跡（五所川原市）
・隠川(3)遺跡（五所川原市）
・隠川(4)遺跡（五所川原市）
・実吉遺跡（五所川原市）
・幸畑(3)遺跡（六ヶ所村）
・幸畑(10)遺跡（六ヶ所村）

・幸畑(6)遺跡（六ヶ所村）
・砂子遺跡（南郷村）
・槻ノ木遺跡（南郷村）
・高屋敷館遺跡（浪岡町）
・新町野遺跡（青森市）
・野木遺跡（青森市）
・田名部館遺跡（むつ市）
・小沢館跡（階上町）
・石焼沢遺跡（福地村）
・西張(3)遺跡（福地村）
・畑内遺跡（南郷村）
・桜ヶ峰(2)遺跡（五所川原市）
・近野遺跡（青森市）
・五輪野遺跡（尾上町）
・朝日山(3)遺跡（青森市）
・松館貝塚（八戸市）
・轡(2)遺跡（弘前市）

**平成８年度**

・外馬屋前田(1)遺跡（鰺ケ沢町）
・新納屋(1)遺跡（六ケ所村）
・幸畑(1)遺跡（六ケ所村）
・幸畑(4)遺跡（六ケ所村）
・水吉遺跡（南郷村）
・幸神遺跡（倉石村）
・八盃久保(3)遺跡（倉石村）
・野木遺跡（青森市）
・新町野遺跡（青森市）
・小奥戸(2)遺跡（大間町）
・大和田遺跡（十和田市）
・平窪(1)遺跡（十和田市）
・平窪(2)遺跡（十和田市）
・伝法寺館跡（十和田市）
・寺山(3)遺跡（十和田市）
・弥次郎窪遺跡（八戸市）
・隈無(1)遺跡（五所川原市）
・隈無(2)遺跡（五所川原市）
・隈無(6)遺跡（五所川原市）
・隠川(4)遺跡（五所川原市）
・隠川(12)遺跡（五所川原市）
・野尻(1)遺跡（浪岡町）
・見立山(1)遺跡（八戸市）
・平野遺跡（鰺ケ沢町）
・今須(4)遺跡（鰺ケ沢町）
・餅ノ沢遺跡（鰺ケ沢町）
・岡町(2)遺跡（青森市）
・西張(2)遺跡（福地村）
・田名部館遺跡（むつ市）
・山下遺跡（青森市）
・玉水(2)遺跡（青森市）
・上野尻遺跡（青森市）
・長谷遺跡（六戸町）

**平成９年度**

・野尻(1)遺跡（浪岡町）
・隠川(11)遺跡（五所川原市）
・隠川(12)遺跡（五所川原市）
・砂子遺跡（南郷村）
・畑内遺跡（南郷村）
・櫛引遺跡（八戸市）
・安田(2)遺跡（青森市）
・上野尻遺跡（青森市）
・新町野遺跡（青森市）
・下馬坂遺跡（東通村）
・新納屋(1)遺跡（六ヶ所村）
・戸沢遺跡（川内町）
・餅ノ沢遺跡（鰺ケ沢町）
・三内丸山(6)遺跡（青森市）
・十腰内(1)遺跡（弘前市）
・山下遺跡（青森市）
・野木遺跡（青森市）
・小奥戸(4)遺跡（大間町）

**平成10年度**

・三内丸山(6)遺跡（青森市）
・山下遺跡（青森市）
・米山(2)遺跡（青森市）
・野尻(1)遺跡（浪岡町）
・櫛引遺跡（八戸市）
・野木遺跡（青森市）
・新町野遺跡（青森市）
・蟹沢(2)遺跡（八戸市）
・丹内遺跡（八戸市）
・餅ノ沢遺跡（鰺ケ沢町）
・岩ノ沢平遺跡（八戸市）
・砂子遺跡（南郷村）
・モダシ平遺跡（横浜町）
・朝日山(2)遺跡（青森市）

**平成11年度**

・岩渡小谷遺跡（青森市）
・安田(2)遺跡（青森市）
・栄山(3)遺跡（青森市）
・宮本(2)遺跡（青森市）
・朝日山(2)遺跡（青森市）
・十腰内(1)遺跡（弘前市）
・尾上山遺跡（深浦町）
・西浜折曽の関遺跡（深浦町）
・上野尻遺跡（青森市）
・笹ノ沢(2) 遺跡（八戸市）
・笹ノ沢(3)遺跡（八戸市）
・岩ノ沢平遺跡（八戸市）
・上野平(3)遺跡（八戸市）
・上野遺跡（八戸市）
・蟹沢(2)遺跡（八戸市）
・三内丸山(6)遺跡（青森市）
・黒坂遺跡（八戸市）
・畑内遺跡（南郷村）
・桜ケ峰(1)遺跡（五所川原市）
・隠川(11)遺跡（五所川原市）
・野尻(1)遺跡（浪岡町）

**平成12年度**

・岩渡小谷(3)(4)遺跡（青森市）
・安田(2)遺跡（青森市）
・近野遺跡（青森市）
・宮田館遺跡（青森市）
・野尻(1)遺跡（浪岡町）
・尾上山遺跡（深浦町）
・西浜折曽の関遺跡（深浦町）
・朝日山(2)(3)遺跡（青森市）
・笹ノ沢(3)遺跡（八戸市）
・林ノ前遺跡（八戸市）
・野辺地蟹田(10)遺跡（野辺地町）
・向田(30)(31)遺跡（野辺地町）
・上野尻遺跡（青森市）
・玉水(2)遺跡（青森市）
・蟹沢(3)遺跡（八戸市）
・黒坂遺跡（八戸市）
・畑内遺跡（南郷村）
・小奥戸(4)遺跡（大間町）

# 発掘調査報告書一覧

**昭和５５年度**

・第６１集　表館遺跡発掘調査報告書
・第６２集　新納屋遺跡(2)発掘調査報告書
・第６３集　鷹架遺跡発掘調査報告書
・第６４集　国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
・第６５集　国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

**昭和５６年度**

・第６７集　発茶沢遺跡発掘調査報告書
・第６８集　山崎遺跡発掘調査報告報告書
・第６９集　右エ門次郎窪、三合山、石ノ窪遺跡
・第７０集　馬場瀬遺跡発掘調査報告書
・第７１集　下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書

**昭和５７年度**

・第７２集　鴨平(1)遺跡発掘調査報告書
・第７３集　鴨平(2)遺跡発掘調査報告書
・第７４集　長者森遺跡発掘調査報告書
・第７５集　下北地点原子力発電所建設予定内埋蔵文化財発掘調査報告書
・第７６集　鶉窪遺跡発掘調査報告書
・第７７集　松原遺跡・陣場川原･槻ノ木遺跡発掘調査報告書
・第７８集　垂柳遺跡発掘調査概報

**昭和５８年度**

・第７９集　一ノ渡遺跡発掘調査報告書
・第８０集　浜通遺跡発掘調査報告書
・第８１集　弥栄平(2)遺跡発掘調査報告書
・第８２集　和野前山遺跡
・第８３集　昼巻沢遺跡発掘調査報告書
・第８４集　韮窪遺跡
・第８５集　白山平(2)遺跡発掘調査報告書
・第８６集　牛ヶ沢(3)遺跡

**昭和５９年度**

・第８８集　垂柳遺跡
・第８９集　尻高(2)･(3)･(4)遺跡発掘調査報告書
・第９０集　大石平遺跡
・第９１集　表館遺跡Ⅱ
・第９２集　石ノ窪(1)･(2)･(3)遺跡、古宮遺跡発掘調査報告書
・第９３集　売場遺跡発掘調査報告書、大タルミ遺跡発掘調査報告書

**昭和６０年度**

・第９５集　今津遺跡・間沢遺跡
・第９６集　発茶沢遺跡発掘調査報告書
・第９７集　大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書
・第９８集　弥栄平(1)遺跡発掘調査報告書
・第９９集　独狐遺跡発掘調査報告書
・第１００集　沖附(1)遺跡
・第１０１集　沖附(2)遺跡

**昭和６１年度**

・第１０２集　境関館遺跡
・第１０３集　大石平遺跡Ⅲ
・第１０４集　大湊近川遺跡
・第１０５集　山本遺跡発掘調査報告書
・第１０６集　弥栄平(4)･(5)遺跡

**昭和６２年度**

・第１０７集　小田内沼(1)遺跡
・第１０８集　前比良遺跡
・第１０９集　下谷地(1)遺跡

・第１１０集　荼毘館遺跡
・第１１１集　李平下安原遺跡
・第１１２集　上尾駮(1)遺跡Ａ地区
・第１１４集　上尾駮(2)遺跡Ⅰ
・第１１５集　上尾駮(2)遺跡Ⅱ
・第１１６集　発茶沢(1)遺跡

**昭和６３年度**

・第１１７集　二ツ石遺跡
・第１１８集　富ノ沢(1)･(2)遺跡
・第１１９集　館野遺跡
・第１２０集　表館(1)遺跡Ⅲ･発茶沢(1)遺跡Ⅳ

**平成元年度**

・第１２４集　下タ沢遺跡
・第１２５集　幸畑(7)遺跡
・第１２６集　表館(1)遺跡Ⅳ･発茶沢(1)遺跡Ⅴ
・第１２７集　表館(1)遺跡Ⅴ
・第１２８集　弥次郎窪遺跡
・第１２９集　中崎館遺跡
・第１３０集　杢沢遺跡

**平成２年度**

・第１３２集　富ノ沢(1)･(2)遺跡Ⅱ
・第１３３集　富ノ沢(1)･(2)遺跡Ⅲ
・第１３４集　中野平遺跡、向山(4)遺跡
・第１３５集　鬼沢猿沢遺跡、尾上山(2)･(3)遺跡
・第１３６集　雷遺跡、西山遺跡

**平成３年度**

・第１４１集　堀切沢(2)･(3)･(4)･(5)遺跡
・第１４２集　鳴沢遺跡･鶴喰(9)遺跡
・第１４３集　富ノ沢(2)遺跡Ⅴ

**平成４年度**

・第１４７集　富ノ沢(2)遺跡Ⅳ発掘調査報告書(1～3)　・富ノ沢(3)遺跡
・第１４８集　家ノ前遺跡･幸畑(7)遺跡Ⅱ
・第１４９集　野脇遺跡発掘調査報告書
・第１５０集　野場(5)遺跡
・第１５１集　筋久辺遺跡
・第１５２集　朝日山遺跡Ⅱ発掘調査報告書
・第１５３集　高野川(2)遺跡

**平成５年度**

・第１５６集　朝日山遺跡Ⅲ
・第１５７集　三内丸山(2)遺跡Ⅱ
・第１５８集　内真部(4)遺跡発掘調査報告書
・第１５９集　山元(3)遺跡
・第１６０集　家ノ前遺跡Ⅱ･鷹架遺跡Ⅱ
・第１６１集　畑内遺跡Ⅰ
・第１６２集　日渡遺跡
・第１６６集　三内丸山(2)遺跡Ⅲ

**平成６年度**

・第１６７集　朝日山(3)遺跡
・第１６８集　黒森下(1)遺跡
・第１６９集　槻ノ木(1)遺跡
・第１７０集　松山･羽黒平(1)遺跡
・第１７１集　山元(2)遺跡
・第１７２集　野尻(2)遺跡
・第１７３集　水木館遺跡
・第１７４集　千苅(1)遺跡
・第１７５集　湯舟(1)･(2)遺跡
・第１７６集　森田(4)･(5)遺跡
・第１７７集　上蛇沢(2)遺跡
・第１７８集　畑内遺跡Ⅱ
・第１７９集　高野川(3)遺跡
・第１８０集　板子塚遺跡・熊ヶ平遺跡発掘調査報告書
・第１８１集　泉山遺跡

**平成７年度**

・第１８５集　三内丸山(2)遺跡Ⅳ
・第１８６集　野尻(2)遺跡Ⅱ,野尻(3)・(4)遺跡
・第１８７集　畑内遺跡Ⅲ
・第１８８集　四ツ役遺跡
・第１８９集　白砂遺跡
・第１９０集　泉山遺跡Ⅲ
・第１９１集　佐野平館跡、上佐野遺跡
・第１９２集　戸沢川代遺跡、熊ヶ平遺跡
・第１９３集　平野遺跡
・第１９４集　羽黒平(1)遺跡
・第１９５集　上田遺跡
・第１９６集　洞内城跡
・第１９７集　西張(3)遺跡
・第１９８集　上蛇沢(1)遺跡
・第１９９集　大平(5)・草薙(1)・湯ケ森(2)遺跡
・研究紀要第１号

**平成８年度**

・第２０６集　高屋敷館遺跡発掘調査概報
・第２０７集　実吉遺跡
・第２０８集　桜ヶ峰(2)遺跡
・第２０９集　隈無(4)遺跡
・第２１０集　隠川(3)遺跡
・第２１１集　畑内遺跡
・第２１２集　八盃久保(2)・(3)遺跡、幸神遺跡
・第２１３集　石焼沢・西張(3)遺跡
・第２１４集　田名部館跡
・第２１５集　朝日山(3)遺跡
・第２１６集　近野遺跡Ⅴ
・第２１７集　宇田野(2)・(3)遺跡,草薙(3)遺跡
・第２１８集　轡(2)遺跡
・第２１９集　垂柳遺跡・五輪野遺跡遺跡
・第２２０集　小沢館跡
・第２２１集　津山遺跡
・第２２２集　幸畑(10)・(6)・(3)遺跡
・第２２３集　松館遺跡
・研究紀要第２号

**平成９年度**

・第２３１集　平野・今須(4)遺跡
・第２３２集　岡町(2)遺跡
・第２３３集　西張(2)遺跡
・第２３４集　野尻(1)遺跡
・第２３５集　大和田・寺山(3)遺跡、平窪(1)・(2)遺跡、伝法寺館遺跡
・第２３６集　幸畑(1)・(4)遺跡
・第２３７集　隈無(1)・(2)・(6)遺跡
・第２３８集　見立山(1)・弥次郎窪遺跡Ⅱ
・第２３９集　新町野・野木遺跡
・第２４０集　小奥戸(2)・(4)遺跡
・第２４１集　長谷遺跡
・第２４２集　外馬屋前田(1)遺跡
・第２４３集　高屋敷館遺跡
・第２４４集　隠川(4)・(12)遺跡Ⅰ
・第２４５集　水吉遺跡
・研究紀要第３号

**平成10年度**

・第２５３集　下馬坂遺跡
・第２５４集　戸沢遺跡
・第２５５集　安田(2)遺跡
・第２５６集　新納屋(1)遺跡
・第２５７集　三内丸山(6)遺跡Ⅰ
・第２５８集　山下遺跡・上野尻遺跡
・第２５９集　野尻(1)遺跡Ⅱ
・第２６０集　隠川(11)遺跡Ⅰ、隠川(12)遺跡Ⅱ
・第２６１集　十腰内(1)遺跡
・第２６２集　畑内遺跡Ⅴ

・第２６３集　櫛引遺跡
・第２６４集　野木遺跡Ⅱ
・研究紀要第４号

**平成11年度**

・第２７１集　モダシ平遺跡
・第２７２集　櫛引遺跡Ⅱ
・第２７３集　丹内遺跡
・第２７４集　山下遺跡Ⅱ、米山(2)遺跡
・第２７５集　新町野遺跡Ⅱ
・第２７６集　畑内遺跡Ⅵ
・第２７７集　野尻(1)遺跡Ⅲ
・第２７８集　餅ノ沢遺跡
・第２７９集　三内丸山(6)遺跡Ⅱ
・第２８０集　砂子遺跡
・第２８１集　野木遺跡Ⅲ
・研究紀要第５号

**平成12年度**

・第２８７集　岩ノ沢平遺跡
・岩渡小谷(2)遺跡
・安田(2)遺跡
・栄山(3)遺跡
・宮本(2)遺跡
・朝日山(2)遺跡
・十腰内(1)遺跡
・岩ノ沢平遺跡
・上野遺跡
・上野平(3)遺跡
・笹ノ沢(2)・(3)遺跡
・底田(3)遺跡
・蟹沢(2)遺跡
・松ケ崎遺跡
・上野尻遺跡
・畑内遺跡
・三内丸山(6)遺跡
・隈無(8)遺跡
・桜ケ峰遺跡
・隠川(11)遺跡
・黒坂遺跡
・研究紀要第６号

**研　究　紀　要　第６号**
2000年12月４日　印刷
2000年12月４日　発行
編集・発行　　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042　青森市新城字天田内152－15
電　話　017－788－5701
ＦＡＸ　017－788－5702
印　　刷　　長尾印刷株式会社
〒030－0931　青森市平新田字森越17－１
電話　017－726－7121

# BULLETIN

## OF
## AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.6

(20th anniversary special number)

---

## CONTENTS


| | | |
|---|---|---|
| Foreword | *NAKAJIMA Kunio* | 1 |
| Message | *MURAKOSHI Kiyoshi* | 3 |
| Outline of 20th anniversary special number | *NARITA Shigehiko* | 5 |
| Palaeolithic Period | *OTAHARA Jun* | 7 |
| Incipient Jomon Period | *ODAGAWA Tetsuhiko* | 10 |
| Initiai Jomon Period | *SAKAMOTO Mayumi* | 13 |
| Early Jomon Period | *KIMURA Tetsujiro* | 17 |
| Middle Jomon Period | *HATAKEYAMA Noboru* | 21 |
| Late Jomon Period | *NARITA Shigehiko* | 25 |
| Final Jomon Period | *FUKUDA Tomoyuki* | 29 |
| Yayoi Period | *NARITA Seiji* | 33 |
| Nara and Heian Period | *NAKAJIMA Tomofumi* | 37 |
| Medieval and Pre-modern Period | *HIRAYAMA Akitoshi* | 41 |
| Progress of 20 years | *SOMA Shinkichi* | 50 |


December 2000

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER